

越後の国雪の傳説

鈴木直著

388.14
Su964



0054567001

2

0054567-001

388.14-Su964ウ

越後の国雪の伝説

鈴木直・著

目黒書店

[正], 続

昭和17-18

AID

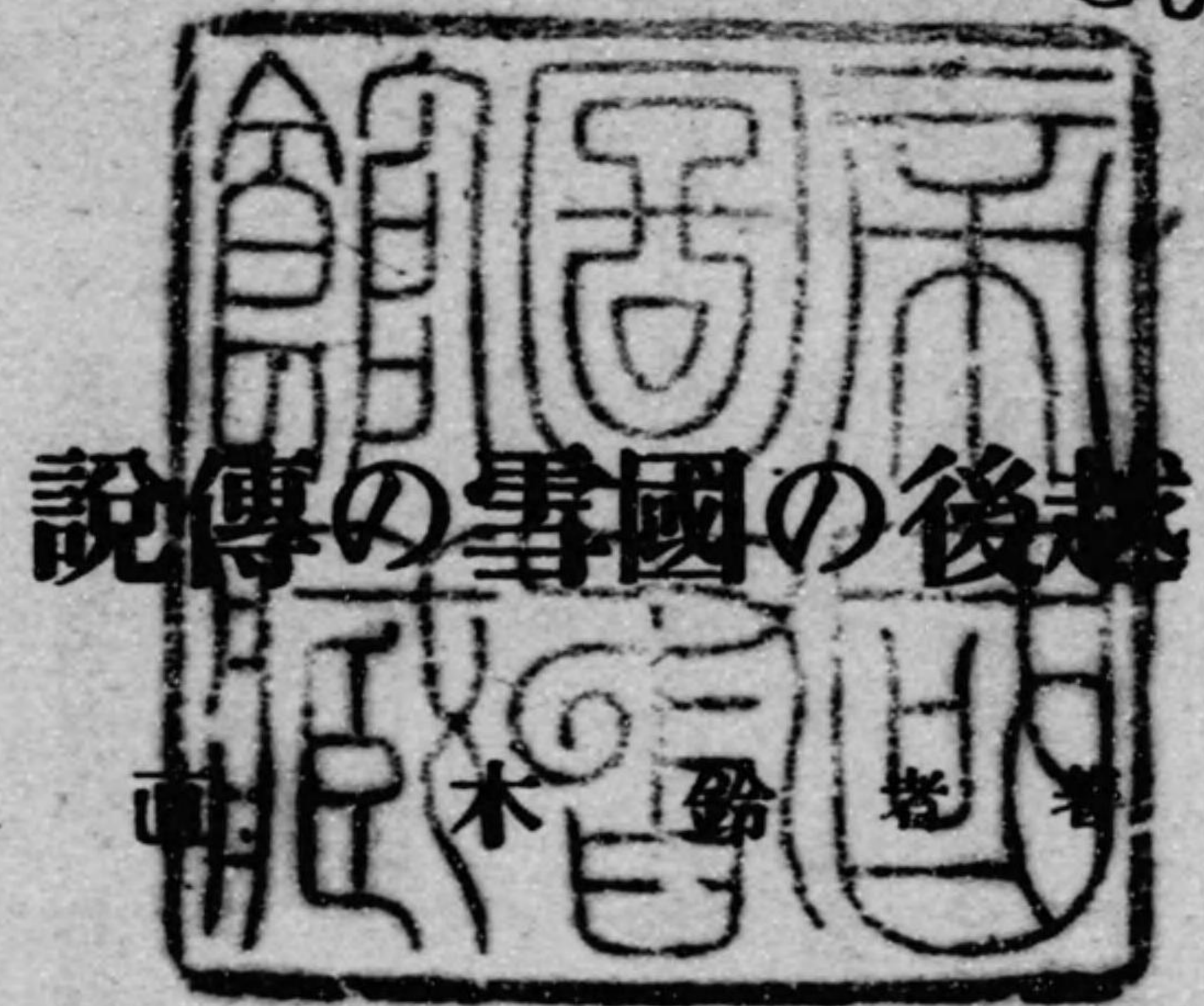
この著作物は、著作権者不明のため、著作権法
第67条の規定に基づき、平成12年3月23日
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するものです

017
32

越後の國
雪の傳説



388.14
SU.96A



目録書店



序

越後人の勤勉と敦厚とは蓋し環境によつて育まれたる特質である。半歳の間雪に閉さる忍苦耐艱と半歳の間に一年分を稼ぎ取る勤勞努力とは幾百年を経て遂に一つの習性となり來つたのである。越後と雪、雪と越後、此の密接不可離の因縁を唯單に、雪魔と罵り去るには餘りにも忍び難いものがなからうか。白魔と呪ふ前に雪姫と呼びかけ、敵視する先に恩恵を考へて見る必要はないであらうか。

鈴木直君の近作「雪の傳説」は越後傳説の中より雪に絡るものゝみを採つて収録したものである傳説の郷土に及ぼす影響を今更云々するの必要はないが、豪雪地魚沼に生れて魚沼に育つた君が、教育的立場に於て、獨特の研究と考察の下に、ものしたる本書は雪に對する世人の親みを深め、雪を通じて我等の祖先が如何に其の生活を潤色して居たかを窺ふに足るものとして敢へて一語を寄す。

昭和十六年十月一日

新潟縣學務部長 橋 爪 清 人



序

歴史か歴史にあらず、歴史にあらざるか、必しも然らず。小説か小説にあらず、小説にあらざるか、必しも然らず。蓋し、傳説の傳説たる所以。思ふに、人類地上に在りてより幾萬千年、その民族が持てる特異の世界こそは、實に傳統を育ぐくむ搖籃にして、そこには民族肇世の大理想を高揚する尊い矜持の存するあり、而かも之に神話と信仰とを織り交ぜては、これを神秘に導き、之に哀戀悲話を配しては、一齣の物語を作る。英雄佳人孝子節婦の登場によつては、これを美化し、魍魎魁怪力亂神を捉へ來りては、その範疇まことに極まるところなからむとす。

山澤の隈、河海の果、こゝに五戸の民あれば、則ち傳説あり、風水雨雪日月星辰、すべて是、傳説の温床たるを失はざる也。國古くして、傳説の源愈遠く、而かも文運開くるに従ひて、傳説のやうやく銷磨せむとする、洵に慨す可し。越の國たる、古くして且遠く邊陲に在り、郷土の特性生むところの傳説、おのづから異なるもの多かり。中に就きて、雪に纏はるもの、如きは、他郷はなはだ無きところなり。鈴木君、夙に之を蒐めこれを究む。今、稿して坐右に堆し。之を梓に上して世に示すもの、嘗に未開文化の所産を傳へむとするに留まらず、この裡含むところ、粉飾せざる郷閭

の眞貌を闡くと共に、優れたる郷土の民族性をも顯はさむとするに外ならざるべし。これが良俗淳風の人を感奮せしめ、因て以て、世を益するの多きを這裡に酌む者あらば、是れや、眼光紙背に徹するものにして、恐らく著者がひそかに祈念するところを把握するに庶幾からむ歟。

昭和十六年清秋木屋室裡にて

新潟縣教育會長 近藤 勘治郎

序にかへて

郷土に残る色々貴重な口碑的説話は、年と共に亡び行く傾向がある。これは甚だ悲しむべき現象である。

讀物や娯樂に不自由だつた過去に於ては、終日屋内に閉居を餘儀なくされ、冬の夜長に退屈し切つた子供達は、祖父母に強請み、炬燵の中で現代人の常識からは頗る縁遠い、寧ろ荒唐無稽とも思はれる首尾も整はぬ物語や、牽強附會とも感ずる説話に異常な興味を覺えて胸轟したものであつたけれども近代生活の慌しさは、子供の世界から大人の心からも、斯うした試みを漸次稀薄に疎縁にさせてしまつた事は事實である。其の結果、歐米童話や外國の神話傳説に豊富な知識を誇る近代知識人が、反つてその郷土と密接不離な關係にある口碑的説話に對しては頗る風馬牛なる態度を示して居る事が多くなつた。

これは本末の顛倒も甚しと言はねばならぬ。何故ならば、汝自身を知らずして將何をか爲さんとするやの謗を免れ難いからである。これは或る意味に於て、心の故郷を失つたものと斷ぜざるを得なす。

翻つて思ふに、今や我が國は八紘一宇の建國精神に基いて、新東亞の建設と指導といふ未曾有の一大聖業に當らんとして居るが、斯る際、確固不拔の信念と舉國一致の團結とを以て、大日本民族はこれに直面せねばならぬ事は言を俟たぬ處である。然し、偉大なる國家理念も熾烈なる民族意識も畢竟、先づ郷土と言ふ温床と膏壤に育まれ培はれずして、果して十分の大を期待出來得ようか。斯く觀じ來れば、世界情勢を通觀する以前に、我々は故郷越後の過去現在を詳細悉知する必要がある。しかして郷土の往古を知るべき資料は蓋し頗る豊富であり、所謂傳説に關しても已に尠からぬ著編を有するが、降雪に關する傳説に就ては遺憾ながら、北越雪譜以外甚だ乏しい。それ故、我々が今、越後の雪に關する傳説に就て顧ることは強ち無意味な事ではなく、寧ろ進んで、これを他縣の人々にまで紹介すべきものであると思ふ。

避難も豫防も絶対に不可能な降雪と言ふ自然現象並に之に伴ふ災禍をば、我々の祖先は如何に見、如何に考へて居たであらうか。傳説を顧る時、我々は、明らかに同一の素材から發して居ると考へられる物語が、時と處と人によつて、如何に多種多様に變化轉成して居るかを窺得て、其處に、土と人との相關による差違を發見して限りない興趣に咬られるのである。

お伽噺めいた傳説の中に儼存するのは、敬神崇祖の念であり、忠孝を根幹とする人倫の昂揚であ

り、將又良風美俗の推賞に外ならない。更に加之、纏綿たる親子骨肉の情を説き、其處には、時所を超越する我が國民の倫理道德の美をも誇示して居る。

のみならず、記録には残されぬ我々の父祖の有した、文化的乃至思想的の精神生活の斷片をさへ傳へて居ると言ふ點に於ても、我々は、それ等を書誌に漁り、古老に質し、出來得る限り原形を正確に保存すると共に、一面適度な敷衍と潤色によつて諒解に便ならしめる事は蓋し郷土振興上十分意味のあることと信ずる。

斯うした見地から越後の雪に關する傳説を蒐集し、且つ管見をも加へて見たのであるが、材料過多な爲め、取材の範圍を、中・下越の中比較的豪雪で有名な地方のものを主として採つた。舊稿殘篇を整理し上越地方の話を加へたものは上梓を他日に期す。

昭和十六年神無月

長陵の寓居にて

研 南 識

目 次

雪山物語	一
白狐の怪	九
雪の傳説	一八
碁をうちに來た老人の話	二三
雪の神様	三一
素封家持丸氏の事	三六
萬年橋の起り	四五
雪中の幽霊	五九
毛塚の縁起	六四
雪女(一)	七七
足痕隠しの雪	九二
雪蟲	一〇一

消えた娘……………一一二

雪女(二)……………一一八

茂助地藏……………一二四

石になつた獵師……………一二九

妙多羅天と彌三郎婆……………一三六

恩に報いた石地藏……………一五七

雪婆と蛇塚……………一六六

雪の五郎助爺さん……………一七六

冬咲く黒百合の花……………一八四

熊に助けられた人の話……………一九二

雪の鬼五郎傳奇……………二〇二

雪の傳説

雪山物語



今から數百年も昔のことである。

今の西山油田(相崎市近傍)を隔てた出雲崎方面に或る一小部落があつた。さうして、此の村に

啓吉といふ一人の子供があつた。啓吉は平和な家庭に育つた大變素直な少年であつた。

此の啓吉少年は農家に生れはしたもので、非常な學問好きで、先づ最初は當時としては農家の主人には珍しい博學の父に就いて漢籍の手解を受けてゐたが、父の學力と素養に満足しきれなくなつたので啓吉は父に願ひ、山一つ越した隣村に住んで居る叔父の家から、其の村でその頃遠近に博學の聞え高かつた某寺の住職の下へ通はせて修業させて貰ふことになつた。

懐しい父母の膝下を離れて、可愛がつて呉れるとはいふものゝ、叔父の家で過す朝夕は流石に今年十一の少年に過ぎない啓吉にとつては淋しいものであつたが、啓吉の好學心は日々學ぶ聖賢の道によつてよく此の淋しさを慰めては居た。かうして毎日よく力めたので先生である住職も、その覺のよいのと頭腦の明晰なことには内心秘かに舌を卷いた。そして住職は自分の學統を啓吉に傳へよ

うと思つて愈々その蒞著^{しやく}を傾けて、他のどの弟子にもまして熱心に業を授けて居た。けれども少年啓吉にとつて、わが生みの父母の家は他の何物にも増して、理性を超越^{てうまう}した特別の愛着があつたから、

「お正月になると、塾^{じゆく}も暫く休みになる。さうしたら懐しい父母の許に歸ることが出来る。」と勉學の暇々^{ひまひま}には、此の事ばかり一日二日と指折り數へて、お正月の近づくのを待つてゐた。そしてこれは啓吉にとつて、學問とは又別な意味で楽しいことであつた。

愈々お正月が近くなつて來た。そして生家から啓吉を迎へに叔父の家まで人が一しかもそれが、彼の腦裡^{のうり}から寸時も離れることのない慈愛^{じあい}の母一來る、と聞いた彼は飛び立つ程喜んだ。

お正月もあと二日の後に迫つた。啓吉を迎へにやつて來た母は、啓吉と打連れ立つて叔父の家を出かけることになつた。啓吉は叔父にしばしの別れを告げて、日頃夢にまで見る懐しい我が村、我が家に母と肩を並べて出立した。

久振りに我が家へ。啓吉の身も心も輕かつた。足どりも元氣に新雪を踏^ふんで、輝^かかしい陽光^{やうくわう}を身体一杯に浴びながら母子はだんく叔父の家を後に、道は山にかゝつて來た。

と、叔父の家を出る時には、冬には珍しいあんなに好い天氣だつたのに、あれ程青^{こん}い紺碧^{こんへき}の空だ



つたのに、急に一面灰色に曇つて来た。そして折柄吹き出した風に混つてチラリ、ホラリと雪が舞ひ出して来た。

母子が驚いて空を見上げてゐる中に、雪は風につて愈々猛烈になつて来た。進まうか引き返へさうかと思案してゐる間に、だん／＼非道い吹雪に變つて母子を襲つて来て、所嫌はず吹きつける雪は面を向けることも出来ない有様で、見る／＼中に道は埋まり、行手も定かに見極められなくなつてしまつた。今更、母子は叔父の家に戻すことも出来ず、さりとて山を越えて進むことは猶更出来ない。全く此處に進退に窮してしまつた。そして一寸油断して一步踏み外したら谷底に墜落する危険がある。かと言つて其の儘一箇處にちつとしてゐたら、雪のために体が降り埋められ、手足が凍えて死んでしまふ懼れがある。途方に暮れた母子はあてどもなく附近をさまよふ中に數時間は瞬／＼間に過ぎて、二人が最も恐れてゐる夜がだん／＼近くなつて來始めた。

餓えと寒さと疲勞のために、先づ、か弱い啓吉少年が雪の中にしやがみこんでしまつた。我を忘れて愛兒を介抱する母の手に擁かれた儘、ともすると眠りさうになる啓吉を眠らせては大變と母親は、「啓吉や、啓吉。目をおあき!! え、目を」。眠つたら死んでしまふよ。啓吉ッ。」と母に揺り起されて、啓吉は目こそ開いてゐるが、平素から學問好きのため、どちらかといふと

自然の子として育たなかつた啓吉は、數時間吹雪の中をさまよつたので、身も心も疲れ果て、しまひ、今はもう全く視力さへも衰へた洞の瞳をあけて、時々讒言みたいに、

「あゝ寒い／＼。お腹が空いた。」

と母に訴へるともなく呟く。母親は、愛しの我が子のために、唯もうおろ／＼と自分の身に着けてゐるものを、啓吉が「寒い」と口走るその度毎に、己れの寒さも打忘れて、一枚脱ぎ、二枚脱ぎしては啓吉に着せかけてやつてゐた。

啓吉の家では、

「今日こそ、啓吉が母と二人で歸つて來るのだ。もう見えさうなものだ。」と朝から待焦れて父親は幾度か門先まで出て見てゐたが、そんなに待つた甲斐もなく、到頭夜に入つても歸つて來なかつたので、心配の餘り翌朝人を隣村に走らせて、息子と妻の消息を訊ねさせた。

晝過ぎてから使の者は大急ぎで歸つて來て、「昨日の朝早く出發したんだから昨日の夕方は着いてゐる筈だが。」と叔父の言葉その儘復命した。

「さあ大變だ。それちや屹度山の中で吹雪にやられて遭難したに違ひない。かうしてはゐられない。」と俄かに人を集めて捜させることになつた。やがて村を擧げての應援を得て間もなく夜になる

のに備へて無数の松明を用意して捜索隊は繰出した。

積雪を踏みしめて村中の人々の熱心な捜索にも拘らず、母子の行方については何等の得るところもなく、捜索隊は空しくその夜は引上げた。

翌朝は啓吉の父親を先頭に、もう一度揃つて捜しに繰出したが、矢張無駄であつた。母子の行方は杳として皆目手掛りさへ知れなかつたので、流石の父親も悲歎をおさへて、「止むを得ない。これ程捜して貰つても分らないのだから……。やがて雪消えにでもなつたら或は死骸位は何處からか発見されるかも知れぬから、それをせめてもの心慰めにしよう。」と言つて、厚く村人達の連日の勞を稿つた。

事實、父親の言葉のやうに、捜されるだけは捜してしまつたので最早これ以上手の盡しようがなかつたので、人々も仕方なく歸途につかうとした。

すると捜索隊の一人が、山の小蔭にうづ高く積つた雪の吹溜りを指さして、「吹雪を避けようとして若しや反つて雪の吹き溜るあの様な處にでも避難してゐて、雪に埋つてしまつたんぢやあるまいか？、どうだらう。一つ念のためにあそこを掘り返して見ては。」と言ひ出した。

此の提案に、折柄、來合せた叔父の率ゐる隣村の應援捜索隊の人々も力を協せて村人一同が、木鋤の先を揃へて、うづ高く積つた雪を掻きのけて見ると、果然子を擁いた母の死体が現はれた。

夫であり父なる人の歎きは、傍の見る目も氣の毒であつたが、それよりも猶一層村人の涙を誘つたのは世にも崇高なる母の慈愛の姿であつた。

殆ど肌襦袢一枚の半裸体ともいふべき姿になつてまで、我が子のために少しでも温かなるやうに自分の着てゐるもので可愛い子供の体から吹雪をよけてやらうと最後の一瞬まで努めたらしいその尊い姿であつた。

自らは殆ど半裸体となつて今は青白く冷い屍と化した母に犇とかき擁かれてゐた啓吉は、人事不省に陥つてはゐたが、一枚二枚と母が慈愛で着せかけ蔽ひかけて呉れた衣服をめくるにつれて、彼の体には未だ微かながらも幾分の温か味が残つて居り、極く弱々しくはあつたが心臓の動悸も感ぜられるのであつた。

驚喜した父が能ふ限りの手厚い介抱を盡したそのお蔭で啓吉は程なく、かすり傷一つない体の儘遂に蘇生した。

やがて啓吉は、我が身を犠牲にして自分を救つて呉れた母の尊い死を知つた。

そして悲歎のどん底に突き落された彼は、何人の慰めも耳に入れず唯悶々として日を過し、二月となり三月となつても、遂に再び叔父の家に峠を越して戻ることをしなかつた。學問も修業も否聖賢の尊い教へも彼の嘆き悲しみをどうすることも出来なかつた。

かうして来る日も去る日も涙に明かし、嘆いて暮らしてゐた啓吉は、亡き母の慈愛に對して一念發起して、嘗て彼が母と共に吹雪に倒れた場所に、母の限りない慈愛を表彰するために、子供を抱きしめた地藏菩薩の尊像一基を建立した。

遠近此の話を傳聞して、子供地藏、慈母地藏と評判して、噂さは日毎に廣まり、參詣する人の數は日と月と共に増して、四時香華の絶間もない繁昌振りであつた。

然し、これ等の信者にもまして、孝心深い啓吉は、雨につけ風につけ母の慈愛を忘れなかつた。そして最も彼の心に深く銘じてゐるのは冬ともなつて雪の降る日につけての思出であつた。思ひ出すだに幾年たつても胸が痛くなる。さうして吹雪の荒れ狂ふ日には、途の遠きも、身の難儀も嫌ひ願ふ暇もなく、常に簑笠を持參して石地藏を母と思つて、悪天候から母を守つて共に吹雪を凌ぐことをせずにはゐた、まれなかつたといふことである。

星移り物變つて數百年、地藏尊体は風雪に何時しか滅んでしまつて知る人もないが、此の雪山に

これ以來日本海を渡つて荒れるシベリヤ風の猛吹雪にも遂ぞ一人の遭難者すら出なくなつたといふことである。今も村人は語り傳へて、

「これこそ、啓吉の死んだ母が地藏菩薩と化身して人々の上に不斷の加護を垂れてゐるからだ。」と言つて、在天の靈に對する感謝を口から口へと子孫に傳へて捧げてゐる。

白狐の怪

長岡の東方に、冬が近づくと紺色美しく朝な夕なに陽に輝いて聳り立つ山がある。名を森立峠と呼ぶ山である。

今は昔のことである。徳川時代のはじめの頃のこと、来る日も来る日も吹雪くので、丈餘の雪に半ば埋もれた家が此の森立峠の頂上近い所にたつた一軒ボツンと置き忘れられたやうに建てられてゐた。

此の家は峠を越して往來する人を休息させる茶店で、主人は獵師を稼業とし、妻が店を守つてゐるのであつた。

或烈しい吹雪の夜のことであつた。

冬ともなれば往來する人も稀になり、まして訪ふ人ともない山頂の一軒家だ。況んや夜に於いては寧ろ人の來るのが不思議である。お女房さんは薄暗い行燈の下で頻りにお齒黒を染めてゐた。ビュー／＼、ゴウ／＼と外は物凄しい風だ。時々メリ／＼ツ、ボキーンと音のするのは木の枝が風に折れる音であらう。

破れ障子の紙がブルービューと震へてゐる。みし／＼と音がしては、ズシーン、ドウ／＼ツと屋鳴震動して茅葺屋根から崩落ちる雪の地響も身体に感じられて物凄しい。

此の恐しい吹雪の夜の一軒家も、もう幾年か此處に住み馴れて見ればそれ程にも感じない。お女房さんはやつとお齒黒を染め終へて、

「まあ何て今夜は寒ることだらう。」と一人呟きながら圍爐裏に薪をくべたした。夫は輕井澤村まで、

「よい搏打が立つてゐるから一儲して來る。」
と言つて今朝がた出かけて行つて留守である。

幾ら馴れてゐても一人では流石に何となく寂しい。物凄しい木枯を聞かせながら寒い冬の夜は次第々々に更けて行つた。山家の一軒家を賑はすものは吹き荒ぶ風と雪以外にはない。でもその中には

夫も歸宅するかも知れぬ。幾年雪の中に住み馴れた獵師家業だ。こんな吹雪で歸れぬ様な人間ではない。が然し大して當にもならぬけれども、心待ちに夫の歸宅を待ちながらお女房さんは外になすこともないので所在ない儘に圍爐裏の火を火箸でつゝきながら煖つてゐた。

すると凡そ今の時刻にして十時を過ぎると思はれる頃、ガラ／＼と外の風の音に交つて誰やら潜戸を開ける音がして、頬被りした一人の男が黙つた儘ぬゝつと這入つて來た。お女房さんは戸の開く音を聞いて夫が歸つて來たなと思つて顔を上げた。

仕事もしないのに行燈を點けてゐるのは油が無駄だといふので消してあるから爐の焚火の明りに照し出されたのはしよんぼりと不氣嫌さうに下さし俯いた夫だつた。夫は無言の儘お女房さんの向側の爐傍に跌坐を組んだが頬被りした手拭はとらうともせず、懐手のまんまだつたので、お女房さんは少し變な氣がしたけれども服装は全く夫と同じで着物の縞柄までそっくりさうだつた。

一体夫はこれまでもよく勢込んで「どれ一儲け。」と期待して出て行つても、事志と違つて歸る時には大概かういふ不氣嫌な様子で來たからこれは大して珍しい事でもなかつたから、お女房さんは、「矢張り時化だつたんだな。」と思つたが、それにしても、兎角平素は輕口の夫が「お歸んなさい。」と言つても、「うむ。」とさへも返事しないのはどうも少し様子が何時とも異ふと思つた。

そこでお女房さんは、爐の火を行燈の燈心に移さうと思つて附木に火をつけようとする、夫は始めて、慌てた様に、

「いや、つけなくてよい。」と妙に噎れた聲で言つた。けれどもお女房さんはかまはずに行燈に火を點して、さてよく夫の様子を見ようとしたが、どうしたことか何時もの様に行燈が明くないので燈心をかきたてようとする途端に行燈の火がスーッと變に薄暮くなつてしまつた。慌て、燈心をかきたてたが、かきたても、油は皿に十分あるのに少しも明くならないのでお女房さんは到頭斷念した。「首尾はどうだつたんだい。え？お前さん。」と話しかけて見た。すると怪しげの夫は「ふうん。」と獸の呻聲みたいな聲を出した。お女房さんは重ねて訊いた。

「え、今夜はどうだつたつてのさ。」しかし夫は依然として變な聲を出して、

「むゝ。」といふばかりだ。

愈々變に思つたお女房さんが圍爐裏の火をかきたて、その光で頬被りの中を覗き込もうとすると、急についと顔をそ向けてしまふ。

「一体どうしたつてのさ。ねえ、お前さん。」と言つてお女房さんはしん／＼と更けわたる夜氣の故ばかりでなしに何かしらブル／＼と戦いた。

とう／＼お女房さんは決心した。

火箸で爐の火をほじくるふりをしながら突如火箸を振上げて頬被りの手拭を拂落さうとした。

しかし、一瞬早く男は素早く頭をかはしたが、火箸の先は手拭の結目を解いた。その刹那今迄手拭で隠されてゐた顔が明かに夫でないことを見てとつたお女房さんは思はず、「あつ!!」と叫んだ此の叫聲を聞くとひとしく怪しの男は、

「おのれ、見たな。それ程見たくば見せてやる。」と不氣味に濁つた不明瞭な叫びを發すると同時にパツと手拭を拂のけると起上つた。

脱ぎ棄てられた手拭の下に現れたのは、夫とは似てもつかぬ男で、顔をお女房さんの方に向けるとクワツと目の玉が飛び出るかと思ふ程大きく眼を開いて睨みつけた。

此の時先刻折り添へた薪がパツと焰をあげて勢よく燃え出した光が見るも恐しい此の見も知らぬ男の顔を赤々と照して見せた。形は人間であつたが、耳まで裂けた眞紅な口、三角の眼は蛇のそれの様にぬら／＼と青く光つてゐた。

餘りの怖さにわな／＼として腰を抜かしかけたお女房さんの瞳に、怪しの男の耳が、急に伸びたかと思ふと見る／＼三角に頭よりも高くにゆうと上に出て見えた。額まで振り亂した蓬髪、ニヨキ

く釣の、様に鋭く曲つた光る三角の手先の爪。

如何さま確かにこれは人間ではない。怪物だ。お女房さんは気が遠くなりさうになつた。立上つてゐた。怪物は突然、呻くともなく笑ふともなく一種奇妙な名状しがたい「うふ、うふ。」といふ様な異様な叫びを、耳まで裂けた口を歪めて發するとちり／＼お女房さんに挑んで來た。お女房さんは我にもあらず、金切聲を上げて救ひを求めたが、折角の救ひを求める聲も空しく寒風に流されて消えてしまつた。隙間洩る風が身を切る様に寒い。しかしお女房さんは寒さも覺えなかつた。

伸びた三角爪の生えた右手をさつと上げたかと思ふと怪物は一寸刻みに迫つて來る。

危機一發。お女房さんの命は今や風前の燈火だ。あゝ危い!!

此の時ふとお女房さんの腦裡を掠めた空想は、妻の身が危険に瀕してゐることを歸宅の途上で知つた夫が、雪の中を驀地に駈けて來る姿だつた。がらりと戸を蹴散す様に開けて、怪物の背後から一撃する光景だつた。

然し現實は「逃げるつ。早く逃げる。あゝつ危い。」怪物は、今やとびかゝらうとして左手まであげた。

必死になつて、それでも怪物の魔手から最後まで逃れようと思つたお女房さんは、それでも敵に後を見せることの危険を慮つてちり／＼と後退りをした。

あゝ、然し、ふつ、ふつ、ふつと呼吸する度に赤く青く又赤く一息毎に變化する怪物の顔が次第々々にお女房さんに近づいて行く。と怪物が一步ずつと前に出た。はつとして息をのむ暇もなくお女房さんも本能的に後へ退がる。そして、

「たゝ助けて!!」

「ふつ、ふつ、ふつ」

お女房さんの絶叫と怪物の荒い息づかひとが北風に乘つて消えて行く。

だん／＼追ひ詰められて二人の間隔は僅か四尺許りになつた。山の中に住んで常々猛獸毒蛇などの襲撃を体験してゐるお女房さんには、「四尺の間隔さへあつたらどんな敏捷なものゝ攻撃もかはしてかはせぬことはない。」といふ一種の信念があつた。だから怪物との距離も絶対に四尺を一分でも縮めないようにしようと思つてゐた。

「あと一尺——早く夫が歸宅して呉れぬか。」と果ない空頼みを唯一の力に、ともすれば萎えてしまひさうになる勇氣を辛くも維持し續けてゐた。

ちりつ怪物が又一步前へ出た。そして續いて更にもう一步。猫が殺す前に鼠を弄ぶ様な態度を棄て、愈々怪物はとびかゝるつもりになつたらしい。震へ戦く足を踏みしめてお女房さんも一步續いてもう一步後へ退らうとした。

途端にどしんと体が後の壁に突きあたつてしまつた。萬事休す。一步も半歩も退ることは出来な。怪物との間隔は危険圏内の三尺に縮められてしまつた。否三尺は愚かなこと二尺四五寸が精一杯位しかない。絶對絶命最期の土壇場まで愈々追ひ詰められてしまつた見るも怖しい怪物の耳まで裂けた口、鋭い牙が光る。今まで燃え續けてゐた櫓も最後の餘燼をあげ終つて四邊は一層暗くなつた。戸の隙間から吹き入る風に怪物の亂髪がばさばさしくと動く。

「此處で相果て、しまはなければならぬか。夫は遂に歸らないでしまつた。あゝ!!。」とお女房さんは最後の一瞥を入口の土間にちらつと走らせたが、忽ち天恵の如く腦裡に浮んだのは、茶店の隅の土間の片端に、どうして何時の頃から置かれてあつたのやら忘れてしまつたが、石の地藏様が鎮座していらつしやる。此の石地藏が人の話によると何でも大層御利益があらたかなのださうで、雪のな。い時分には随分方々遠くから此の石地藏を拜みに來る者が多く、そのために此の茶屋も大分その意味で御利益を蒙つてゐるのだつたが、紺屋の白袴で肝腎の茶屋の夫婦は大して信心深くもなかつた

ので、お女房さんも平素人々が話す、

「どんなに困つた時でも『お地藏様お願いいたします。』何卒お助け下さい。」と三遍言つて頼んだら御利益は立ちどころだ。」といふことも上空で聞流しさ程信用もしてゐなかつたが、此の急場に石地藏の尊体が目に入るとひとしく溺れる者は藁にさへ絶る。苦しい時の神頼みといふこともある。折柄、荒蕙を蹴つて牙を嚙んで怪物が躍りかゝつたその刹那、「お地藏様お願いします。」とお女房さんの口を衝いて出た悲鳴に近い言葉が三度繰返して唱へられた。

壁を背に殆ど横倒しにどうと尻もちついて怪物の爪を避けながら、さながら霧の中に物を見る様に朦朧としてお女房さんの目に映じたのは、慈悲忍辱の御手に錫杖を振上げた地藏菩薩のお姿であつた。

「ギヤツ」と谷々に卻する様な悲鳴にも似た叫びと共に人体の怪物は忽ち本性を現はして、八尾の大白狐となり、さつと天井近くの採光窓を蹴破つて吹雪の戸外へ跳んだ。

「ホツ」と安堵の嘆息を吐くと呼吸も荒々しく暫時の間お女房さんは四肢の戦慄と激しい胸の鼓動が制止出來ず、助かつたといふ喜びも寒さも感ぜず、動くことさへも出來得ないで僅十分間に満たぬ短時間の出來事にかゝはらず壽命が十年も縮まつた様な氣がしたとは後の話で、殆ど放心状態

で夜を明かしたお女房さんは朝の光と共にやつと蘇生の思がしたのであつた。

留守中の我が家の出来事を神ならぬ身に知る由もなく、一夜を輕井澤村で明かして翌朝晝近い頃になつてやつと我が家の關を跨いだ夫は未だ宙を凝視した儘、話しかけても碌に返事も出来ず寒さと餓えに震へながら、洞な瞳をしてゐる妻を發見して驚いた。

漸く人心のついた妻が語る昨夜の恐怖を程經て知つた夫は、流石豪膽な獵師渡世ではあつたが、肌に粟を生じ、同時に夫婦共々改めて土間の片隅に鎮座在す地藏尊に對して端座瞑目合掌して感謝の祈念を捧げるのであつた。

今しも夕陽に赤々と白雪を染めて聳え立つあの平和そのもの、様な森立峙に、今は昔斯うした怖しい雪の夜語があつたのである。

雪の傳説

これは雪の越後の傳説の中で、今日食糧増産の聲の高い時全國一の米の産額を誇る農業新潟縣に絡まる興味ある傳説である。

越後でも大昔は冬になつても南の國の様に暖かで少しも雪などは降らなかつたのださうだ。とこ

ろが或年の冬の初めの頃一人の坊さん(一説に弘法大師だとも謂はれてゐる。)が杖をつき笠を被り、此の越後路の冬を行脚して廻られてゐたが、途中で疲れたので、とある路傍の茶店に足をとめて休息し、一杯の白湯に咽喉をうるほして居られた。

丁度坊さんが茶店で休憩していられた時、此の家の奥の間には大勢の村人が寄り集つて何事か鳩首相談の眞最中であつたらしいが、よく／＼困つた問題と見えて、どの人の顔にも心配さうな色が漂ひ、何時まで經つても名案が出さうにも見えなかつた。

此の様子を見て旅の坊さんは、此の村には何の縁も由縁もなかつたけれども衆生濟度は佛家の勤めと思つたか、

「大變御心配のことがおありのやうですが、一体どんなことが起りましたので。」と茶店の亭主に訊ねた。すると、

「實は明日といふ日に急に御領主様が此の村を御巡視においでになられるといふ御布令が途先刻参りましたので唯今それに就いてお通りのお道筋は勿論のこと村中隅から隅まで塵一本ない様に綺麗にして置け。見苦しいものがお目に入らぬ様にといふ細々とした御注意がございましたが、御領主様は名代の氣難しいお方でこれまでも方々の村で御氣嫌にかなはなかつたため、御手討になつた者

牢屋に入れられた者、年貢を倍にされた者などがこれまでに随分とありますので、これには村でも大困りに困つてゐるのです。どうせ一度は御巡視にお出になることは分つてゐましたがこんな事が急ではどうすることも出来ませんので村人一同弱り切つてゐるところでございます。」と話して呉れた。

すると黙つて、ニコ／＼しながら此の話聞いてゐた旅の坊さんは、

「ホ、ウ、それは又足元から鳥がたつやうな。嘸ぞお困りのこととせう。」と言つて暫く考へてゐたが、

「よし／＼儂に好い工夫が出来ましたわい。どうぢやな。先づ明日はうんと寒い日和にすることにしては。さうしたら如何に氣難屋の御領主様でも御駕籠の中にちどかんで、よう外も御覽になれまして。若し又御覽になつたとしてからが、儂にはまだ工夫がある。あなた方は御存じかな？雪といふものを。御存じあるまいが、それは／＼少し冷いが白くて綺麗でなか／＼結構なものですぞ。だから屹度綺麗好きの御領主様の御氣にも召すと思ふ。その雪といふものを明日はうんと降らせて村一面を、いや野も山もそれから田も島もすべてのもの皆を眞白に美しく包んで差上げることにしてしよう。さうしたらどんなに氣難い御領主様だつて此の村には文句の言ひ様もござるまい。さあ

／＼皆さん、これでよい。安堵しなされ／＼。」と何やら一人首肯しながら言つた。

此の如何にも自信に満ちた、しかも同情の溢れた旅の坊さんが茶屋の亭主に語る言葉を傍で聞いた村人達は驚喜した。そして未だ見ぬ奇蹟を此の坊さんが果して示し得るかどうかに就いては半信半疑ながらも、差當つて外に施すべき術を知らない村人は一寸遅れに只管坊さんに頼らなければならなかつた。

「雪」といふものがどんなものかといふことを噂したり想像して見たりしながら、重荷を他人へ肩代した様な責任逃れの氣持で三々伍々集會を解いて茶屋を後に家路についた。

家へ戻つてからも村人はその家族達に「今夜は庄屋殿の家へ泊らつしやつたが。」と冒頭して、此の村の災難をさも事もなげに易々と引受けて呉れた、此の邊ではついぞ見かけた事のない旅の坊さんの話をして、何處のどうした人か兎に角不思議な坊さんだと語り合つた。

「私どもが萬端用意しようとする處へ見も知らぬ坊さんがやつて来て、よしなされ。よしなされ。儂がよい様にするから。」と言つて止めましたので……。と萬一の場合は責任を回避し、一人の旅僧に轉嫁して役所へつき出せばよい、といふ様な氣持から幾分かは安心しながらも、萬一奇蹟の起らなかつた場合を考へると庄屋をはじめ村人達は一人として流石に枕を高くして眠れぬ長い冬の一

夜を過した。

萬一の場合にはせめて自分丈は責任を逃れようと思つて、人知れず家の内外を整理した個人主義者もあつたが、夜の更けるにつれてこんな人達も追々と寝に就いてしまつた。

普段から早起きの村人達であつたが、特に翌朝は期待と好奇心とからで早起だつた。床を出た瞬間村人達は手足の指先が痺れる様な寒さを感じたが、續いて戸外を覗いてあつと仰天してしまつた。

これが昨夜庄屋の家に宿つた坊さんの言つた「雪」といふものか。野も山も、田圃も島も、家も木も道も森羅万象ありとあらゆるものが一面に白皚々だつた。そのみならず灰色の空からは綿をちぎつて飛ばすやうに霏々として降り頻つてゐるではないか。始めて見る物珍しさに、寒さも心配も忘れて、老若男女皆外に走つて出た。觸れて見、握つて見、我を忘れて珍しがつた。

奇蹟は餘りにも見事に起つたのだ。然し村人は餘りの事に呆然として唯雪の奇象に心奪はれて旅僧への感謝は愚か、その存在さへも全く忘れてしまつたが、旅の坊さんが昨日豫言した通り役所からは折柄の雪を蹴立て、本日の御巡視中止の傳令がやつて來たのを迎へて後、やつと庄屋が旅僧の部屋を覗いた時にはもう旅僧の姿はどこにもなかつた。

お禮の言葉は吐口を失つて、讚美と敬仰の念に變つたが、それは又忽ち信仰心になつた。しかし此の旅僧が誰であつたか分らぬ儘にその對象が翁然として佛教に向つたことは當然であつた。

此の歳以來翌年から此の地方は毎年其頃ともなると異常な寒氣と共に決つて雪が降る様になり、雪の翌年が又故老の記憶にもない豊年となることに氣のつき始めたのは數年を経ての後であつた。かくして古來越後人は厚く三寶に歸依して、又冬に備へて老若男女皆よく働く勤勉な風習を馴致し、遂に今日の農業縣新潟となつたのであると縣下各地に語り傳へられてゐる。

碁をうちに来た老人の話

何時頃の事かすつと昔のこと、岩船の關谷といふ村に誠に村思ひで眞面目な正右衛門といふ名主を勤めてゐる人があつた。

此の人は大は人格の立派な好い人だつたので村の信望は極く厚い人だつたが、頗る圍碁が好きで他にこれといつて非のない人だけに殊更此の碁好きなことが際立つて何でもないことながら玉に瑕とも見られてゐた。實際、正右衛門の碁と來ては所謂下手の横好を通り越して、下手な癖に碁となると前後の見境も思慮も分別も失つてしまひ本當に「耽溺」してしまふのだつた。そのため往々善良

の村民達に「正右衛門殿の碁狂人」といつて悪意のない蔭口さへもきかれるほどだつた。

さて、或年の正月のことであつた。正右衛門は明けて間もなく村内の用事を片付けてしまつたし、するので、親戚へ年始のために下男の寛助といふのをお供に連れて、さう大した距離でもないが隣郡の新發田へ出かけて行つた。

それは丁度越後名物の綿雪のちらほら降る日であつた。方々の親類知己縁者を廻つて年頭の挨拶を全部済まして歸途につかうと思つたが、時刻も幾分遅いしするからいつそ引とめられるまゝに誰かの家に泊めて貰はうかとも思つたが、

「いや、つまらぬ氣遣するよりも……。」

と考へ直して町の旅宿へ一泊して氣輕に一夜を過すことにした。

風呂に這入り晩飯を済ましてから主従二人は向ひ合つて炬燵で煖まつてゐた。話の種もなくなつたし所在なさに時刻は少し早かつたが晝の疲れが出て眠くなりかけたのでそろ／＼寢に就かうかと言つてゐると襖の外の廊下で「今晚は」と案内を乞う聲がした。

そして、襖があいて人品の賤しくない白髪の老人が部屋にはいつて來た。

宿の女中か番頭かと思つてゐた主従は突然此の見も知らない老人の來訪に睡氣ざしてゐたところ

へ不意に虚を衝かれたやうな形で一寸面喰つてゐると、これも稍々躊躇してゐたが老人は少し間を置いて、

「雪の夜、あまり退屈なので一局御指南にあづかりたいと存じて失禮をもかへりみすまゐりました。いや實は私は今晚お隣に泊つた旅の者です。」と言つて名乗つた。

正右衛門は相手が全く見ず知らずの人間であつたし、それに老人の自己紹介の辯を待つまでもなく一見直ちにそれと知られる言葉遣や風采からして他國の旅者に違ひないが、どうも唯旅の者で隣室に泊つた者とだけで自分の職業姓名を名乗るぢやなし何となく腑に落ちないところがあつたが、日頃好きな道ではあるしするので、可成早々と宿をとつただけけれども隣室には遂ぞ今まで人の泊つたらしい氣配も感じられなかつたので、些か躊躇に似た億劫さを覺えて一抹の心進まぬものを感じはしたけれども、村人に平素から「狂」といはれるだけに、寛助に命じて碁盤を取寄せた時にはもう總べてを忘れてしまつてゐた。

次の間に退つて寛助は白河夜船であつたが、對局數番正右衛門と老人は丁度似合の腕前であつたのでばかり／＼と興の湧く儘に時の經つのを忘れてゐた。今の時計にして午後十二時と思はれる頃勝負がついて、さら／＼と石を崩すと、

「いや、これはどうも突然お邪魔いたして意外に遅くまで大きに失禮いたしました。」と云つてその儘来た時と同じやうに廊下へ消えた。碁盤の後始末や何かで格別注意してゐた譯でないから閑渡したのかも知れないが、正右衛門は隣の部屋の襖の開く音を聞かなかつたが深く氣にも留めずその儘寝んだ。

翌日正右衛門主従が目覺めた時は、猛烈な雪降りに變つてゐたので仕方なしにもう一日逗留を續ける決心をしてゐる處へ朝食の膳が出た。食事をしながら給仕の女中に聞くと意外や隣室には數日來泊客などはないといふ話だつた。口を尖らして何か言はうとする寛助を制して正右衛門は何も言はせなかつた。朝食が済んで主従が茶を啜り、其を燻してゐる處へひつこり昨夜の老人が訪ねて來たので、又碁になつた。雪荒で無聊の儘勝つたり負けたり終日夜に入るまで倦むことも知らぬ様に耽つた。怪しい〜と思ひながらも碁が始まると正右衛門は一切夢中になつてやつた。時たま碁の最中に女中がやつて來て老人を見て、後で食事の時など、

「大層御懇意の方らしいですが、何方ですの。」と一再ならず質ねたこともあつたが、何故か正右衛門は言葉を曖昧に濁してしまふのであつた。

かうして來る日も明ける日も荒天が續くのでそれをよいことに連日連夜碁も亦續けられた。その

合間々々には世間話などすることもあつたが、自分の素性については老人は一言も觸れようとしなかつたし、正右衛門も亦訊ねようとしなかつた。忽ち五日間は過ぎてしまつた。

流石に碁好きの正右衛門も數日間家を留守にして用務のたまつたことが氣掛りになると、漸く石をにも少々飽きて來た。六日目の晩、今日も朝から今迄老人は正右衛門と對局してゐたが、漸く石を收めて、茶を啜りながら、「どうも毎日々々、随分長い事お邪魔させていたゞきましたが、儘も用が濟みましたので明日は當地から出立いたしたいと存じます。」と別れの挨拶を述べたので正右衛門も「いやどうも碁にばかり夢中になつてゐまして頓とお訊ねすることも忘れてゐましたが、貴方は一體どちらの方ですか。」と言ふと、老人は、

「お話申す程の者ではありません―が時に貴方は未だ御滞在になりますか。」と正右衛門の質問を避けて置いて、一旦しまつた石を再び手にとつて、

「ではお名残に最後の一局を……。」と話をそこで打切るものゝ様に自分先手ではちりと盤の上に石を置いたので話は此處で杜切れてしまつた。

これが終ると老人は、

「お寝みなさい。随分と御健勝で……。これでもう明朝はお目にかゝらないかも知れません。」とあ

つさり挨拶して何時もの様に何處へ行くのか廊下へ消えてしまった。

最後の別になつても矢張り自分の名前も素性も明かさぬ老人を流石に正右衛門も訝しく思つたので、下男寛助の入智慧で宿屋の者には、

「随分長逗留を雪のためにさせられたので家の者も心配してゐようし、仕事もたまつてゐるだらうから、天氣模様にかゝはらず、明朝は早朝出發するから、その様に願ひます。」と言つて用意萬端とのへて、何處から出て来るか知らぬが街道の四辻へ待ち構へて老人の跡をつけて見ようとする晩は早くから寝た。

翌朝目を醒まして見ると非常な快晴だつた。急ぎ支度をとゝのへた正右衛門主従は未だ誰も通らぬ新雪を踏んで四辻へ急いだ。

暫く待つたが老人はなかく来ない。ふと下男の寛助が向ふを見ると何と主従が待ちあぐんだ老人が數間前方を歩いてゐるではないか。慌て、正右衛門の袖をひいて主従は老人の後をつけることになつた。

老人は何時も暮を打ちに来る時と全く同じ服装で、足には何を着けてゐるやら定かでないが老人とも思はれない速さである。正右衛門主従は一所懸命で見え隠れについて行つた。

漸く町並を通り過ぎた。二人には熟知の辻堂の前を通つて愈々道は原つばにかゝつた。未だ誰一人通つてゐないところで道もついてゐる筈がないのに老人の足は素晴らしく早い。けれどもすつかり見透しの原つばだから老人の姿を見失ふ虞はなかつたが、反對に何時老人に主従二人は後振向いて発見されるかも知れぬといふ危険があつた。けれども老人は只管道を急ぐだけで町を出てから唯の一度も後を振向くやうなことはなかつたので、主人は息をきらし、背筋や脇の下に汗を覺えながら老人に後れまいとした。

今はもう主従二人は好奇心の虜となり切つてしまひ、野を越え川を涉り傍目もふらずに急いだが老人の足が漸く緩かになつた時四邊を見廻して老人の脚の目指すところがだん／＼墓地に近くなつてゐることを知つた。こんな朝早く一人通らないのに怪しい老人のあとを追つて墓地に這入つて行くことは流石に氣味悪かつた。ちらつと目と目を見合せると相談はすぐまとまつた。正右衛門主従は口もきかずに咄嗟の間にも來た道へ踵を返さうとした。その途端、今まで一度も後振向かなくなつた老人がぐるりと頭を廻らすと、ギョロロと二人を一瞥した。「あつ。」と低く叫んだ主従は懸命に足を速めて引返さうと努力したが、瞳だけは彼等の意志と正反對にどうしても老人の後姿から離すことは出来なかつた。老人の姿から目を放したが最後一瞬間に老人の猿臂が忽ち咽喉首に伸びて

来さうに思はれたからであつた。

かうして磁石に引かれる鐵の様に到頭正右衛門主従は老人のために墓地の中央までひかれて行つた。墓地の中央にこちらを向いて直立した老人の背後は灰色に曇つて雪が舞つてゐたが、突如老人は右手をさつと舉げて正右衛門主従に何か合圖めいたことをしたかと思ふと背景の雪の中に溶け込む様な具合に、だん／＼薄れ最後に白い齒を出してニツと笑つたかと思ふと姿が見えなくなつてしまつた。

吃驚仰天魂を心外に飛ばした主従は踵で頭を蹴つて逃げた。逃げて／＼「ヤレ安心。もう町だらう。」とほつと吐息して四邊を見廻せば、これは如何にもとゐた場所で彼等はどう／＼廻りを先刻から續けてゐたに過ぎず身は矢張り墓地を望むところから一寸も離れてはゐなかつた。

(附) 雪女郎に對して雪老人は他に一寸類のない話である。男性を雪の性にした話にはこれともう一篇「雪のころすげぢいさん」があるが共に趣が變つてゐて面白い。が、雪女郎は殆ど大同小異のもので僅かに成人と少女との差位な違ひにしか過ぎないけれども、これは雪の襲來をその行動に絡ませて然も、人を殺すといふ様な慘虐性を有さぬ點がよいと思ふ。

雪の神様

昔々雪の深い越後の國は、蒲原の、福島境の或る山の中に太郎作と次郎兵衛といふ二人の樵夫が程遠からぬところに住んでゐた。かうして二人共年がら年中山の中にだけゐて全く世間から隔離した様な暮しをしてゐた。

或年の冬の非道い吹雪の晩のことであつた。夜更けてから太郎作の小屋の戸をとん／＼と外から叩くものがあつた。

平素から訪ふ人としては次郎兵衛の外は稀な山住みであるから、太郎作は誰かしら、こんな晩に、しかも、こんな遅くと訝りながら何氣なく戸をあけて表を覗いて見た。すると、吹雪に塗れて、熊と狐と兎の三匹の獸が悄然と軒下に行んでゐた。

入口から顔を覗かせた太郎作の肩先は見る間に粉でも吹きかけられた様に雪で眞白になつた。「くしやん。」と一つ嚏をした太郎作が獸達に用向きを訊ねて見るとかうであつた。

食物を捜しに銘々の棲處を出た獸達は、雪のために食物を得られなかつたわけではなく、穴にかへる途も見失つてしまひ、夕方は近づいたし此の儘であると雪に埋められて凍えて死んでしまふより

外はなかつたので、偶然一つに落合つたのを幸に色々と相談した結果、平素は彼等が何物よりも怖れてゐる人間の住居を訪ねて一晩泊めて貰はうといふのでやつて来たのだ」といふことであつた。

元來が小柄口者で狡猾な太郎作は、

「占めく。望んでも得られない獲物が揃つて舞ひ込んで来たわい。肉は食べて、それから毛皮は剥いでと」。といきなり物も言はずに駈け戻ると爐傍から弓矢を持つて来て無惨にも三匹の獸を忽ち其の場に射殺してしまつた。

「懐に飛び込んで来た窮鳥」を無慈悲にもうち殺してしまつた太郎作は「してやつたり。」と許り獨りにたりと快心の笑を洩して、次々と小屋の中に獸物の屍体を運んだ。

然し、此の哀れな三匹の靈達はフラ〜と忽ち屍体から抜けて、依然として荒れ續ける暗の山中の吹雪の中に徘徊ひ出て行つた。

見るも憐れな様子であつてもなく吹雪に苛まれつゝ宙をさまよふ相擁した三匹の獸の靈は間もなく、中空を四角四面に荒れ廻つて奮闘なさつていらつしやる雪の神様に發見された。やさしくお袖の蔭に吹雪を避けさせておやりになつた雪の神様は仔細をお聞きになつて大層氣の毒に思召して、

「うん。さうか。よし〜。それは氣の毒だ。儂がぢや代りに別の着物をやらう。」と仰しやつて眞白な大變清潔なそしてふは〜した温い着物を銘々に一枚宛お與へになつた。

三匹の獸の靈達は喜びに溢れて深く神様にお禮申し上げてお別れしたけれども、此の夜更に矢張り棲處に歸ることは逆も出来ないで仕方なしに、三匹揃つてもう一度、此の山の中にあるたつた二軒の中の、太郎作の小屋とはさして遠くもない處にあるもう一軒の次郎兵衛の小屋を今度は訪ねて見ることにした。

夜更てこと〜と戸を叩く音に驚いて起きて来た次郎兵衛は、もと〜情にもろいお人好しであつたから直ぐに三匹の獸達の事情を聞くと、

「此の雪ぢや逆も歸れつこない。いゝとも。さあ〜。」と快く獸達を小屋に引入れると薪をどんぐ〜爐に燃して暖まらせ、食事まで腹一杯になるまで振舞つてやつた。

吹雪は夜の更けると共に愈々益々物凄くなり、骨にくひ入る様な寒さが骨々と身に迫つて来た。此の夜、大童になつて天地間を駈廻つて、何もかにも埋め盡さなければ止まじと許り雪の神様は北風を御して大奮闘をなさつていらつしやつたが、ふと次郎兵衛の小屋の上空をお通り過ぎになる時、中を覗いて御覽になつた。

更け行く夜の寒さに、圍爐裏の楯火に十分煖まつた次郎兵衛と三匹の獸達は、それでもしん／＼と骨身に徹する寒さに堪へかねて、爐傍で、次郎兵衛は熊の巨大な体に抱かれ狐と兎と一緒に相擁してその足許にくつすりと、さも温かさうに寝入つてゐる様を御覽になつて雪の神様はにつこりとお笑ひになつた。

その儘北風を御して行くつと續いて太郎作の小屋が足下に見えた。すつとお下りになつて覗いて御覽になると、圍爐裏にはどん／＼と勢よく火が燃え盛つてゐた。太郎作は爐傍に大胡坐で、先刻射とめた三匹の獸の屍体はもう悉皆手際よく處理されて、もう毛皮と肉に分けられてゐたが、此の毛皮と肉の山を見較べながら何を思ふか太郎作は獨りで頻りに悦に入つてゐるところであつた。

人間にとつては怖い此の雪の神様にも、世の中の愛といふことはよく諒解がお出来になつてゐたから、此の惨たらしい有様を御覽になつたその瞬間、神様のお顔からは次郎兵衛の小屋をお覗きになつた時の和やかな表情が忽ち消えて大變嚴肅なお顔に變つた。そして神様は其の儘北風を驅り立て、中空へと遙かにお立去りになつてしまはれた。そして世もこれが最後かと思はれさうな凄い荒れが朝まで暫くも止むことなしに續いた。

翌朝はからりと晴れて、昨夜の荒れなんか何處へか忘れてしまつた様な陽光眩しい日和であつた。野も山も、森も林も家もありとあらゆるものを埋め盡した白雪は碧空に映じて日光を亂舞させてゐた。

勿論太郎作の小屋も次郎兵衛の小屋も殆ど發見するのに困難な程雪を被つてゐた。然し、昨夜三匹の獸達と一緒になつてお互に相抱合つて寒さを凌いで寝た次郎兵衛の小屋の窓からはもく／＼と紫色の煙が出てゐたが、太郎作の小屋からは未だ起きぬのか煙が出てゐなかつた。

次郎兵衛の小屋を覗いて見ると、爐にはばち／＼と勢よく火が燃え、自在鑪にかけられた鍋には獸達と共にする朝の食事が煮えかけて居り、爐傍では次郎兵衛が熊狐兎の三匹と共に煖りながら火箸で爐の火をつゝいて樂しげに話し合つてゐた。

けれども太郎作の小屋を覗いて見ると、まだ爐に楯が燃え残つてゐる。傍で太郎作が冷い屍となつて横たはつてゐるのであつた。その体には未だ生の儘の熊と狐と兎の毛皮が深々とさも温かさうに巻きつけられて居り、枕許には三匹の獸の肉が堆く盛り上げられて置いてあつた。

(註) 佛教傳説や他の童話などの中にもこれと類似のものが尠くないやうだ。

此の傳説も、もとは、佛教傳説がその源泉かとも思はれるが、多少趣が異つてゐる。今、同一素材から出たと思はれる物語が、時と所と人によつて漸次變化して來た経路を辿ることも亦意味のないことでもないからと思つて、その参考にもと思つて掲げて見た譯である。

素封家持丸氏の事

今はもう遠い昔のこと、岩船は村上の御城下に市右衛門といふ人が住んでゐた。此の人は最初の中は逆も非道い貧乏で、僅かの背負荷の行商をして辛くもその日の活計を立て、ゐる身の上であつた。それも年中通して一定の品を商ふ程の資力さへもなく、其の節々の際物商賣のしがない境遇であつた。

頃は江戸幕府の初期、老婆と妻子五人を養ひかねて、或年の正月の末のこと申柿を背負つて若松方面に出かけ、荷物を賣捌いて一儲しようと思ふと目論で村上の自分の家を出た。

道は越後と會津領との境界をなす葡萄峠といふ處を越えて行くのであつた。

折柄冬のことではあつたが天氣は誠に快晴であつたので、今日を外しては又幾日後になるかも知れぬと積雪が深く山谷を埋め盡してはゐたが、それにもめげず朝早く出立した。然し葡萄峠は名にし負ふ險所なのでなか／＼歩行は積雪のためばかりでなく容易なことではなかつた。丁度午の刻時分峠の難所にかゝつた市右衛門は雪の中をあらちちらと道らしい道もない處を先行の人の足痕を辿り／＼歩いてゐた。

すると俄かに全山を震動させる様な衝撃を感じたかと思つた次の瞬間には地鳴りをさせて山の斜面の雪が山頂から押し出して來た。春三四月の頃ならば兎に角今頃は滅多に起らない筈の雪崩だつたのだ。朝來餘りの快晴だつた／＼めに積雪が太陽の熱でゆるんだ故らしかつた。

一度どつと押し出した雪崩のために、足元を掬はれて堂と横に倒されると滑り出した雪盤にのつた市右衛門は溪間をめぐりて墜落して行つた。彼と前後して三々伍々道を辿つてゐた旅人達も幾人か市右衛門と同じ巨大な雪盤にのつて「あはや」と思ふ間もなく一緒に落ちて行くらしかつた。

夢の如く現の如く落下する雪盤に運ばれて谿間を望んで落下した市右衛門は、体の動きが止まつたので漸く人心地がついて自分の周囲を見廻して見た。何といふ仕合せのことであつたらう。市右衛門は幸運といはうか、偶然といはうか、溪間に生えてゐる山毛櫨の大木に出來た洞穴の中へ撥飛ばされてゐる事を知つた。身には擦傷一つ負ふでもなく、背負つた荷物は勿論携帶の品も何一つ紛失したものはなかつた。

四邊を見廻はすと、多分、先刻まで彼と同じ様に彼の前か後かを歩いてゐた人であらう。見も知らぬ旅人が一人洞の片隅に茫然うづくまつてゐた。

さて此の木の洞穴は随分大きく廣いものであつた。だん／＼樹齡を経ると非常な大木には斯うし

た洞穴が自然に出来るものではあるが、それにしても此の洞穴は珍しく広いもので、随つて山毛櫛木そのものゝ大きさも想像に餘りある、間口が六尺、奥行が二間にも餘るかと思はれる程の大きく広いものであつた。

だんくゝ時の経過するにつれて、市右衛門は身の振方を考へる餘裕が出て来て、先づ、洞穴の内側を仔細に研究し調べて見たが、どうしても洞穴から外に出る隙間も方法も發見出来なかつた。洞穴の入口について最も詳しく見たが自分達を押し込んだあとには雪が非常な壓力で押詰められて、恰も巖石の様であつた。又假令入口を切り開いて外に逃れ出て見たからが外は一面の雪の溪底に違ひないからどうすることも出来よう筈がない。これも分りきつたことである。

斯う思ひ考へて見ると市右衛門も旅人も唯啞然としてしまつて施す術も浮ばない。それにつけても自分らの外にも數多い歩行者があつたことだらうにその人達は一体どうなつたであらう。多分雪崩の爲めに外で押潰されて死んでしまつたに違ひないと考へる以外に想像も及ばなかつた。

其處で市右衛門は詮方なく、腰につけた焼飯と、それが盡きたら仕方がないから商賣物の串柿を命の糧にして、此の柿の無くなるまでは生き延び、助かるだけは助からうと決心せざるを得なくなつてしまつた。

先づ焼飯から手をつけようと腰の包を解いて見た。包の中には、梅干を入れて、外はこんがりとした狐色に焦した座頭の頭程もある大きな焼飯が三個遣入つてゐた。焼飯を眺めて市右衛門が「洞穴の中では終日仕事もなしに座つてゐるだけだから平素程ひどく腹も空くまいから、三日に一個で十分だ。すると焼飯だけで九日否十日は命が繋げるかな。それから串柿だ。」などと考へながら焼飯に手をつけやうとすると此の時まで一言も發せず黙つてゐた旅人が携帯の食糧も何處に失つて、もたぬと見えて、今、市右衛門の焼飯を見るにつけて急に空腹を感じたのか、或は又これから後のことを考へて心細く思つたのか、

「斯うして二人が一つの洞穴に落ちつたといふのも何かの因縁かと思ひます。其處でこれは誠に申しかねるお願いですが、儂にその焼飯を一つだけ賣つては下さらぬか——。」と財布に手をかけながら旅人は市右衛門に數願して言ふのであつた。

旅人の言葉に市右衛門は暫時考へてゐたが、やがて、

「いや如何にも御尤です。賣るなんてそんな——差上げますよ。喜んで焼飯だけは全部差上げます。いゝえ、お金なんか要りませんから決して御心配なく……。然しこれは甚だ情を知らぬ男と儂のことをお考へになるかも知れませんが、差上げた焼飯がなくなつても、此の串柿だけは、もうどうして

も分けて上げられませんから——。」と言つて市右衛門はその理由を旅人に語つた。

「此の雪は何時になつたら消える見當が付きません。けれども申柿には際限があります。見透しのつかない雪を限りある申柿で切り抜けることは到底出来ない相談といはなければなりません。一人一口でさへさうなのに二人で食べたとしたならば、此の洞穴の中で二人共雪に閉ぢ込められたまゝ結局一人も助からないでしまひますから、焼飯は全部喜んでお上げしますから申柿だけは何卒勘辨して下さい。」と言つて焼飯は三個ながら惜しげもなく旅人にやつて自分は飯一粒も口にしないで、やがて起るだらう旅人の要求や歎願や哀訴をきつぱりと未然に拒絶してしまつた。

雪はなか／＼消えさうにもなく、洞穴の入口の雪は幾日経つても光を透しさうにも見えなかつた。大切に／＼少し宛焼飯を雪と共に嚙んでゐた旅人も遂に三個の焼飯が盡きる日が来てしまつた。迫り来る飢餓にも旅人は市右衛門に申柿を請ふことが出来なかつた。二人が洞穴に閉ぢ込められてから日數をかぞへて見ると三十五日目といふに衰弱した旅人は到頭餓死してしまつた。

市右衛門の手許には未だ相当量の申柿が残つてゐたので、食に窮して果なくも死んで逝つた旅人を見ると流石に少し自分の無情に過ぎた様な所業が思はれて濟まない様な氣持にもなつたが、又一面考へて見ると此の日から先旅人の屍体と一緒に洞穴の中で暮さなければならぬ一寸見當もつかない

程長い時日を思ふと、残りの申柿の無くなる前に果して洞穴の口があくかどうかと思つて愈々心細さが増して來るのであつた。

焼飯を提供する時した問答以外に何を考へてゐるやら旅人は一言も口をきかなかつたので市右衛門も強いて話かけもしなかつたが、それでも一人よりは二人の方がどれ程氣強かつたか知れなかつたのに、今旅人には餓死されてしまひ、市右衛門は限りない物思ひに毎日々々惱んでゐた。日一日と、どんなに量を節約して見ても柿はだん／＼残り少なくなつて行く。

「此の柿がなくなると、儂も此の人の様に幾日か後には死ななければならぬのだ。それならばいつそ旅人と二人で、快く此の柿を分けて食つて一緒に餓死した方がどれだけ増しだつたかも知れぬ。」とあゝ思つて見たりかうも考へて見たりして、市右衛門は居ても立つてもをられない様な焦燥に驅られた。指折り數へて見ると今日は旅人が死んで逝つてから彼此三十五六日になる。雪崩のためにいつそ一思に押潰されて死んだ方が寧ろましだつたかも知れぬと、感傷に耽りながらやがて疲れて眠つてしまつた。

幾時間位眠つたことやら市右衛門は目醒た。晝夜の別も確然としない洞穴の中ながら朝ともなれば矢張り仄かに明るくはなる。市右衛門は何時もの癖で目醒めるとすぐ洞穴の入口の雪壁を見る。

がばつと市右衛門は跳ね起きた。雪壁の明るさが今迄とどうも違ふ様だつた。急いで穿くつて見た。が矢張り駄目だつた。漂流者が絶海の孤島で行く雲の影を白帆と見擬へた時の失望にも似た氣持で悄然と腰を下してしまつた。然し注意して見る迄もなく雪壁の明るさは一日まじに明るくなることは氣の故許りでなく事實だつた。

「駄目だらう。どうせ！」と思ひながら最初歡喜びをしてから五六日目に試みに拳をあて、見るとすぼつりと穴があいた。

市右衛門はあまりの意外さに喜ぶことも忘れて呆然とした。暫くして外を覗いて見ると漸く雪も少くなつてゐる。調べて見るまでもなく串柿はすでに残り數個しかなかつたのだ。その串の柿を前にしてやつと市右衛門は、

「あゝ、助かつた。命拾ひをしたのだ。」とはつきり意識することが出来た。傍に横はる旅人の屍体のことも忘れて喜びのあまり市右衛門は雀踊をした。

「しからばいざや我が家へ——。」と志した市右衛門は改めて旅人の身の上に就いて思つた。燒飯請受の時以外は始終黙々として數十日の間話一つするでなく臨終の時ですら頑なに口を緘したまゝ逝つた非業の旅人が何人であるか。せめて親類縁者でもあつたらその最後を知らせてもやりたいと思

つて手掛りになるべきものを身邊に物色して見たが何もなかつた。だんくく檢べて見ると遭難の際に失つてしまつてないのか所持品といつたら着換の下着類の這入つた風呂敷包たつた一つだけだつた。なほよく懷中までも檢べて見ると財布の中には錢が五百文程あつたに過ぎなかつたが肌はだに巻いた胴巻には何と小判で七十兩、小粒銀若干があつた。驚いて一旦は放しては見たものゝ、天下の重寶捨て、置くのも勿体ない遺族に渡してやるのも佛への功德と納めてから、更に詳しく檢べたが他には書付一枚はいつてゐなかつたので仕方なく、危い命を辛くも助かつて喜び勇んで溪を匍上つて我が家に歸つて行つた。

歸宅して見ると、家では妻は勿論息子に先立たれた老母や父を失つた子等は、行衛不明の儘音信一つないこと二三ヶ月にもなるので、これは屹度雪崩の災厄に罹つて最早死んでしまつたものと近所隣の情に絶つて佛事供養も滞りなく済んでゐる處へ、憔悴こそして居れ、擦剝傷一つない夫が父が、倅が歸つて來たので家内一同夢かとはかり泣いて喜んだ。

事情を具に物語つた市右衛門は二三日休養して十分体を恢復してから、再び今度は十分の用意をして葡萄峠へと出掛けて行つた。

來て見ると雪も大体消えかゝつてゐたので前に災厄に遭つた溪に下りて見ると、そのあたりには

見るも無惨な遭難者の手足などが散亂してゐた。取集めて見ると丁度五六人の死体になつたが、その他にも二三餘分の手足とか頭などあることから判断して未だ二三人は行方不明の者があるやうに思はれた。溪底にある限りの旅人の身元だけは知らうと思つて、懐を検べて見ると、どの人もどの人も皆胴巻の中に相當以上の金子を所持してゐることから江戸あたりの商品仕入の商人らしく思はれたが一人として身元の分つた者はなかつた。

死屍を剥ぐ様な気がして些か後めたいものを感じはしたが、これとて捨て置くには餘りに勿体ない多額の金子であるから残らずとり集めた。

さて七八十日、いや九十日にも垂んとする自分の住居だつた山毛櫛の洞穴はと思つて捜すと、それは丁度崖の中程に生えてゐる樹齡數百年を経たかと思はれる巨大な木の洞であつた。

市右衛門は溪底にある屍体を一人宛背負つて崖を攀上り一人残らず自宅まで運んだ上で懇ろに供養して自分の菩提寺に手厚く葬つてやり、墓も建て、やつたし、位牌も佛壇に置いて忌日には必ず祀ることを終生忘れなかつた。

それから先の日屍体から集めた金を資本にして市右衛門は商賣を営んだ。運よく商賣は調子よくとん／＼拍子で繁昌し何を賣つても買つても莫大の利益を常に收めることが出来たが、彼は慎み深

く嘗ての貧時の生活を忘れず決して分に過ぎた行は一つもしなかつたので世間の評判も至極よく市右衛門の家には仕合が續き、家産は日と共に殖へ、家運は年毎に盛んになり、子孫繁昌したといふことである。

これが今も話に残る持丸長者傳説である。

萬年橋の起り

上越線の一驛六日町から南東へ三里半奥に這入つた山間に五十澤といふ村落がある。此の村を東から西へ蜿蜒々と迂つて流れる川を三國川（下野・上野・越後に跨がる川の意）といふ。此の川は春三四五の三ヶ月の雪解時節を除くと一年中殆ど平常は水らしいものも流れてゐない様な川であるから、従つて他部落と境をなす部分では、他部落の人に往々水無川と呼ばれる位の川である。けれども河身が極めて複雑な川で、全く水がないかと思ふと處々に岩魚の棲んでゐる深潭や奔湍激流をなす狭い岩床の溪谷があるかと思ふと、非常に川幅が廣く淺くなつて川か河原か見當のつかない様な部分もあるといふ川である。

けれども一度春の融雪期や梅雨の候さては夏日の驟雨になると、山間の水を一つに集めた濁流が

滔々として渦を巻いて溪谷を噴み、蕩々として河原一面の水となり、溢れて田島を泥海と化し去つてしまふことも妙くない。

従つて一度三國川氾濫すると五十澤から他村に通ふ幾本かの橋は何處でも彼處でも根こそぎ橋脚から濁流のために洗ひ流されてしまひ、水の減くまでは交通は杜絶状態に陥つて假令その時期が一日にしろ半日にしろ村人の難澁は一方ならぬものがあつた。

然し橋の流失する難澁も、夏季のそれは冬季のそれに較べたら物の數でもなかつた。地上は數尺の否丈餘の白雪に埋め盡されてゐる半歳の冬こそ橋が落ちたらそれこそ村は絶海の孤島に島流しに遭つたと同様な苦みに陥るからであつた。それ故冬季間に於ける村人の橋に就いての心遣は並々でなかつたが、冬になると溪谷の水が橋を流すばかりでなしに、どんなに村人が苦心して造つた岩壘の橋も橋脚は激しい水勢に洗はれ、上からは連日連夜止むことなしに降り積む雪のために橋桁は壓しつけられるので如何な橋も迎も堪らず忽ち溪谷に墜落流失してしまふのであつた。それ故村人達は橋の上に雪を積らせまいとして寒中に水中で作業を続けなければならぬ痛苦を思つてあらゆる注意と努力を拂ふのだが、その甲斐もなく一冬に二三回は必ず架けかへなければならなかつた。といふのはどんな危険と苦痛を忍んでも橋を架けなければ、五十澤八百村民は實に言語に絶する甚大な生活上の脅威を蒙らなければならなかつたからである。

五十澤から隣村城内の一部落に通ずる橋は今でこそ立派な縣道に堂々たる橋が架けられ、地勢も亦當時と著しく變化してゐるので、到底昔を偲ぶべくもないが、此の間に架けられた橋こそ當時の五十澤村民の生命線とも云ふべき橋であつたといふことである。

此の橋に絡まる傳説が次の如きものである。
今を去ること數百年前、時代は明かでないが、やがて近づく灰色の空と雪の猛威に備へるに餘念のなかつた村人達にとつて、どうしても解決の出来ない苦惱の種となつてゐるのは秋の長雨のために流失した此の橋の架換工事のことであつた。

庄屋を始めとして村の重立つた人々は寄り集つては幾度か協議を繰返したが毎回のこととして、人々の智慧は夙くに凋れ盡きてゐたので何回寄つても何時迄経つても、これといふ名案も出て來ず村人の愁眉は開かるべくも見えなかつた。なまじつかな橋を架けてもそれが骨折り損になることが村人には分り過ぎる程分つてゐたからである。そして流失してしまつたら丈餘の積雪を分けて橋材を求め運ぶことは未だしも、肌をも劈く水中で身を溺死の危険に曝して橋脚を建てることを敢へてしなければならなかつたから、何とかして流れぬ橋、落ちぬ橋を架けたいと腐慮し焦心してゐるので

あつた。今更雪の被害を託つて見たからが始まらないことである。

かうして誰一人として架橋に關する新意見を述べることもしなして、今日も亦庄屋の宅で開かれた寄合は單に鳩首歎息に終るかに見えた。すると思ひ餘つた重立の一人が到頭「人柱」——工事の完成と長久を神に祈願するために犠牲の人を立てること——を發議した。

これに對して一人の異議を唱へる者もなく、

「成程それはよからう。思ひつきだ——。」と異口同音に答へて見たものゝ、それでは誰を人柱にする——といふ點になると、誰あつて私をと進み出る者のあらう筈がなかつた。それにつけて、一休「人柱」などいふものは非常に人選の難しいもので無暗矢鱈に出来るものでない。譬へば豪勇無双一世になり響いた者とか乃至は純真無垢で穢れを知らぬ妙齡の美女とか條件は容易なものではないのだ。

そのために折角の妙案も、結局あはや立消えになるかと思はれた時、先刻來一言もきかず唯黙然と腕拱いて人々の意見を聽いてゐた庄屋が、きつと決心を眉宇に漲らして腕をとくと、

「その「人柱」の人選については萬事僕に一任しては呉れまいか？、少し存じよりもないではないから……。」と言つた。

庄屋の心中深く期する處があるらしい一言に、思案にあぐんでゐた村人は一も二もなく悉皆委して、返事を明日に約して別れた。

間近かに迫つた冬、雪の猛威、橋の完成、人柱などそれからそれへと思ひ悩み續ける庄屋は一人凝然と奥の一間に端座して瞑目考へに沈んでゐた。村人の集つて来るのも間もないであらう眞晝頃、今日も灰色の空は低く垂れてゐた。庄屋の面上に一瞬苦悶の色が浮んで消えた。そして間もなく、庄屋が掌中の珠と慈しみ育くむ最愛の一人娘おいよが父親の膝下に呼ばれた。懇々と説いて、そして、

「村のために犠牲になれ。」と因果が含められた。傍では母なる庄屋の妻が慟哭してゐた。..

定刻に集つて來た村の重立達は、心中秘かに想像して來た事ではあつたが、改めて庄屋が自分のたつた一粒種今年十八の鄙には稀なる容姿のおいよを「人柱」にすると聞かされて、今更の如く驚いてしまつた。けれども此の際、差當つて外の方策もなく、又好い加減のその場限りの追従や讃辭は、庄屋の心中を思ふ時迎も口にすることが出来なかつたので只管敬仰の瞳を以つてこれに従ふことにした。工事は明朝先づおいよを人柱として川に生きながら沈埋たら直ぐに取懸る事に相談が決つた。

「庄屋殿のおいよさんが「人柱」になる。」此の噂は時を移さず全村に擴まつた。そして庄屋の義侠を讃へるもの、或は美女おいよの薄命に同情するもの、流石に村は騒立つてゐたが、庄屋の邸のみは物音一つせず召使の端々に至るまで沈痛な面持で寂然と静まり返つてゐた。

すると何處から來たか、庄屋の門前に途ぞ村では見かけたこともない一見ただけで直ぐ看取出來る兇惡な相をした中年男が現はれて、づか／＼門内に歩き入つた。

玄關に立つて案内を乞ひ、面會を斷る家僕の言葉などには頓着なく、是非庄屋に面談したいと強要してやまなかつた。

致方なく玄關式臺に立つた庄屋に對つて突如として男は、

「私が橋を明日の朝までに立派に拵へて上げませうか。」と自分の姓名素性も各乗らずに言つた。

「、、、。」庄屋はげげんの眼をあげて改めて此の不思議な男の顔をじつと見詰めてゐた。すると男は續いて言つた。

「その代り橋を最初に渡つた人は私がいたゞきます——決して毀れない流れない堅ぢない橋です。

永久に……。」と愈々出で、奇妙なことを言ふ。呆氣にとられた庄屋は返事することも忘れて男の面を見詰めるばかりだつた。

爛々と輝く男の視線を全身に浴びて、何か魔法にでもかけられた様になつて庄屋は唯ぼろとなつてしまつた。

「それからお娘御の命も助かります。」と男は更につけ加へて言つた。

我にもなく自制心を失ひかけてゐる庄屋は怪人の最後の一言に、響の物に應ずるやうに自らは不知識に、

「如何にもあなたの仰つしやる通りにします。が、橋は屹度明朝迄に間違ひありませんか。」と妖術にでもかけられた様に理性を失つてしまつて、最初に渡る人の意味も考へずに遂ひうか／＼と怪人の言葉に陥つてしまつた。

庄屋の返事を黙つて頷いた男は、何思つたか突然屋内につか／＼と這入つて來て、火鉢の中に埋けてあつた大きな炭火を素手でヒョイと撮み上げた。

「では、これがお約束の印です。」と言ひながら炭火をころ／＼と二三度掌の中で捏廻したかと思ふと忽ち火の玉にして差出した。

「、、、」はつと本能的に尻込みする庄屋に怪人はにこりとませずに、

「熱がありません。」とぶつきり棒に言つたかと思ふと火の玉を疊の上に置いた。けれども疊は焼け

なかつた。怖々、庄屋はその火の玉を手にして見たが全然熱くなかつた。

怪人の射竦める様な例の眼光に、言葉を挿む餘裕を失つて、庄屋は餘儀なくその約束の火の玉を受取つてしまつた。

氣がついて見ると玄關に怪人の姿はもうなかつた。

考へれば考へる程不思議な應待であつた。いや、それよりも怪人と譯の分らぬ約束をしてしまつたことが重大の失策の様な氣がして悔まれてならなかつた。

火の玉を机上に置いて怪人との約束を最初から靜かに検討して見ると、庄屋はやつと自分の約束の容易ならぬことに氣がついた。といふのは此の地方古來の習俗として、架橋の渡初式は、村の最年長の長壽者によつて渡られるのだつたから、最初に渡つた人、といへば即ち村の尊敬すべき高齡者のことなのだ。あゝ、私は自分の娘の代りに村の人を誰の許しを得てしようとするのか。こんなことなら始めから娘を「人柱」などにする必要が何處にあつたのだ——庄屋は嚙臍の念に驅られて焦慮したが最早どうすることも出来ない。人こそ知らぬといへ何時かは私の卑怯と下劣が物笑となるだらう。思ひ餘つて先刻怪人から受取つた火の玉を机上から取上げて見ると、何とそれは一箇の透明な眞紅の寶石と變つてゐた。

此の夜、庄屋は遅くまで獨り起きてゐた。いくら考へて見ても、どうすることも出来ないことではあつたが、さうかと言つて床に就いて見てもどうして眠ることなど出来よう。

月のない夜に星が寒むさうに瞬いてゐた。何といふこともなく、ふと縁側に出て空を仰いで嘆息した。見るともなく見ると頂上近くはもう雪で眞白な靈峯八海山が目に入つた。又しても悔まれるのは自分の輕卒さ加減についてであつた。

八海山の巔から眼を霜の白い我が家の庭に移した庄屋は突然ぎくりとした。

縁側の手洗鉢の傍に白髪も神々しい老人が杖を手にして立つてゐるではないか。庄屋が聲をかける前に老人は一步二歩庄屋に近づくと突如かう言つた。

「晝間來た男、彼奴は惡魔ぢや。お前の命を取りにやつて來たんだ。架橋が竣工して渡初に村の老人達が橋を渡る。お前はそれらの人々を先導して僅かだが老人達より一步前に渡ることになるのだぞ庄屋。お前は明日渡初をする時には此の袋の口を開いてから、それから渡れ。」

今日はよく／＼妙な事ばかり起る日だ。晝は逞しげな怪しい男、夜は見るからに氣高い白髪の老人、誰も彼も自分の素性も名乗らず自分の言ひたいだけのことを言ふだけだ。晝間の男の言ふまゝにして置いていゝか、それとも此の老人の言を聴くべきだらうか、見れば此の老人は神々しい風格

さへ備へてゐるが、それに言ふことも肯綮に値する様なことを言つてゐる様だが——と庄屋が瞳を凝した時にはもう老人の姿は其處になかつた。夢でない證據には可成の体積のある相當重量のありさうな袋に這入つたものが縁側に残されてゐる。

續出する不思議な出来事と出現した不可解な二人の人物、幾ら考へても分らない。長い懊惱の夜は曉を迎へ、怪人の約束した架橋完成の朝が來た。

珍しく美しい日和で碧空には雲一つなかつた。高山の巔の雪は銀色に、枯野は金色に美しく照り映えてゐた。

庄屋が事情を村人に告げる前に、もう村人は一夜にして竣工した旭日に輝く架橋完成の事實を發見し、庄屋が昨夜深夜庭前に現れた白髪の老人に托された袋入りの荷物を家僕に背負はせて従へながら、架橋事實の有無を檢分するために河畔に來た時は、橋の袂は黒山の様な橋見物の村の老若男女童幼で雑沓しひしめきあつてゐた。

けれども、その橋が世にも珍しい橋で全く橋脚のない宙に浮いた様な所謂今日の「吊橋」であつたため、未だ嘗てこんな奇妙な橋を見たことも聞いたこともない村人は、誰あつて物好きに橋を渡つて見ようとする人もなかつたお蔭で、多勢の村人達は唯眺めて騒いでゐるだけで、まだ完全の處女

橋の儘であつた。

庄屋のやつて來るのを見つけて寄つて來た村の重立の人に庄屋は橋の架けられたことの仔細について極く概略を手短かに物語つて、兎に角早速渡初式を行はうと言つた。

川を隔てた向ふ岸を見れば、昨日庄屋を訪ねて架橋を約束した例の怪しげの男は、もう橋の袂に見えてゐた。男は庄屋が自分の存在に氣がついたと見るや、大聲に何事かを喚きながら頻りに手を振り、体を動かして庄屋を促し立てゝゐた。

呼びに走るまでもなく、既に橋見物に集つて來てゐる群衆の中から、四五名の村での最高長壽者が推されて出た。庄屋は先導に立たうとしたが、ちらと横目で橋向ふの怪人の姿を認めると共に、家僕の運んだ袋を思ひ出して渡初める前に袋の口を解いた。すると袋の口は中から紐を押してばつと外に何物かと躍り出た。見ればそれは巨大な一頭の猛犬であつた。鈴を張つた様な瞳、削いだ竹のやうな耳、それは見るからに強く逞しげな犬であつた。犬はさつと庄屋の傍をすり抜けると先頭に立つて橋を渡り初めた。續いて庄屋も村の老人達を促して渡り初めた。

此の案に相違した庄屋の振舞に、橋向ふの怪しの男は怒りの形相も物凄く、眞先に渡つた猛犬を避けて背後にやり過しておいて、後から續いてやつて來る庄屋達を睨んで拳を握り体を震はせ、足

踏み鳴して待ち構へた。今や渡り終つて最後の足が、老人達よりも一瞬早く向ふ岸の地に着かうとした刹那、庄屋目がけて男は猛然と地を蹴つた。

危機一發、男の腕は空を掴んで背後に倒れた。男の肩先を咬へた猛犬のために後へ引戻されたのだつた。

男が起上つて体勢を整へようとした時、男の傍に次第に濃く朦朧として姿を現はしたのは、昨夜庄屋の庭前に現はれた白髪の老人だつた。

と、見るや老人は手にした杖を振上げて撥止と一撃、男の肩先に強打を加へるや、其の場に顛倒した男は忽ち身の毛もよだつ悪鬼の本性を現し、虚空遙かに消え失せた。

餘りの不意の活劇に向ふ岸に蟻集した群衆は勿論、目の前に突發した降つて湧いた様な椿事に度膽を抜かれた庄屋達が茫然自失してゐる裡に一切は覺がついてしまつた。

そして人々が我に返つた時には老人の姿も猛犬も何處へかどつぐに消えてしまひ、後には唯々燦たる陽光に虹の如く見える架け渡された橋のみが残つてゐた。

改めて此の珍しい新橋を見直して、村人は愕きれてしまつた。見れば見る程奇妙な橋であつた。川の兩岸近くにそれ／＼聳える巨木に太い／＼藤の蔓を自然に生えたまゝのを架け渡し、それが

ら同様生きた藤蔓を垂れ下げて橋桁を巧みにとりつけた奇抜なものであつた。

成程これならば橋脚がないから絶対に流失の心配はない。冬季の積雪に對しては、夕方人々が總べて渡り終へたら、片方の端につけた蔓を引いて持上げて置いたら雪の被害を蒙る憂へもない譯だ。

けれども悪魔の架けた橋だ。何かしら危険な仕掛がありはしまいか？、庄屋を始め村人一同の心中さうした危惧がないでもなかつたが、それはつまり取越苦勞に過ぎないことが日ならずして分つた。どんな重いものを運んでも橋はびくともしなかつた。唯揺れるに過ぎないだけであつた。

大風一過の感じを抱いて村人は夫々家に歸つた。庄屋も何かしらほつとしたものを覺えながら歸宅した。そして今朝家を出る時にも一寸出して見てから出かけたのであつたが、例の悪魔が架橋契約の印として残した火の玉の赤い寶石を見た。

眞赤に輝く石、これこそ今回の出来を詳細に調べるために残された唯一の手掛りだ。かう思つて庄屋は何心なく火の玉の寶石を手にした。

その途端、今迄冷たかつた眞赤い寶石はぼうつと俄かに燃え上つた。

「あつ!!」と驚いた庄屋は慌て、玉を庭先に捨てたが、したゝか手を焼いてしまつた。

「今こそ悪魔の呪が解けて再びもとの火にかへつたのだ。」と庄屋は呟いた。

星移り物變つたが「萬年橋」はその名の如く何時朽ち果てることも知らぬ氣に、年々橋の欄干の藤蔓は葉が繁り花を着けるのであつた。幾十年橋は村人に恩恵を與へ續けた。然し、當時庄屋は一切口を緘して詳細を語らなかつたので、火の玉のことも夜庄屋の庭に姿を現はした老人が庄屋に袋入の猛犬を托したことなどについては知る人がなかつたが、老人と悪魔、それから袋から出た猛犬を當日目撃した村人は暫く種々の噂さをして賑かだつたが果ては、あの老人こそは現今金銅像に鑄られて靈峰八海の絶頂の岩頭に猛犬を足下に控へさせて、風雨を凌いで鎮座在す 八海大明神のお姿であつたといふ噂さに歸結して行つた。

そして村のために最愛の娘と共に自分まで悪魔の犠牲に知らず知らずならうとした庄屋を救ひ、又村人に永久の恩恵を與へるため一時その悪魔の力を利用して架橋を完成させて下すつたのだと専ら評判するやうになつた。

此の橋は夙に壊滅してしまつて、昔を偲ぶべくもないが、同村民は子々孫々に此の有難い恩澤を語り繼いで今日に及び、夜も八海山の方向には足を向けて寝ない程の感謝と尊敬を忘れず捧げてゐる。

(附) 此の話はそれ自身あまり面白くないかも知れないが、文化史的に見ると色々興味のあるものだと思ふ。そ

の第一は「吊橋」だ。時代が傳説のこととして明確でないが、我が國に、否、越後に「吊橋」の出来るようになった由來を、雪の被害に關聯させて説いてゐることで、成程傳説が、一種の啓蒙資料として扱はれてゐたことが偲ばれて頗る懐しい氣がする。第二は郷土の神に對する信仰心を童心に鼓吹してゐること、第三は發明創始といふ様なものを超人間的な力に假托してゐることである。

雪中の幽靈

不氣味に呻く風の音。低く吼える猛獸の聲にも似た物音。眞白い綿かそれとも幾千萬とも數知れぬ白い胡蝶の亂舞かとも思はれる飛雪。横なぐりに猛威を擅にする北風、唯々天地晦冥、此の世に生氣ありとも覺えぬ越後の冬二月のことであつた。

處は古志、物淋しい柿川河畔に起つた一怪奇に就いて述べる。

時は江戸の末期のことである。今年明けて漸く二十を迎へた許りの一青年彌太郎は大工職であつた。やりかけた仕事に息をつけて、明日からは又他家へ赴かなければならぬので思はずも暇どつてしまつて歸宅が遅れたので、仕事箱を其家に明朝迄あづけ、獨り老母の待つ我が家へ道を辿つた。夜も早や時刻にして夜の十時過ぎ、隣村からの歸途、荒れ狂ふ吹雪が道を埋めたところを小田原

提灯を頼りに只管自宅へと急いでゐた。

さうでなくてさへ暮れるに早い吹雪の日、夜も十時を過ぎては人一人通らない。まして村外れ近くなるにつれて立並ぶ人家も次第に疎らになり、果ては全く往來も杜絶して、晝間踏み固められた下道の上にはもう二尺近くも雪が積つて人の足痕はおろか道と兩側の雪との高低の差さへも定かでない。

六尺先は見透しも十分でない中を、歩き馴れた道のことであるから視線を足許に、面を伏せて顔にかゝる雪をよけ、彌太郎は歩いてゐた。

愈々道は村を外れた。もう一軒村の入口に離れて建つてゐる茶店兼帯の駄菓子屋の前を過ぎるとこれが最後で、あとは柿川の土堤傳ひになる。途中には何のために存在するのか知らぬが半分倒れかゝつた、苦草の朽ち果てた小屋が四方を雪に圍まれて辛くも命脈を保つてゐるみたいのものがあゝる外は全く人家と縁が切れてしまふのだ。

吹雪の中に、柿川の川瀬の音のみを淋しく聴きながら下さし俯いて歩いてゐた彌太郎は何かしらはつとして、足許のみ凝視めてゐた眼を上眼づかひに前方に向けた。ひゆうと顔に吹きつけて來た風にぐつと呼吸を詰まらせた途端ぎくりとして、見透しの利かない前方の闇をじつと見詰めて足を

止めた。すると、からん、からんといふ鈴の音が聞えて來た。

「何だらうなあ。空耳かしら——。」と思つた瞬間、前方の吹雪と闇の中に歴然と浮かび上つたのは二三間先をこちらにふら／＼とやつて來る白装束に金剛杖といふ御嶽行者みたいなき者の姿であつた。

からん／＼と鈴を鳴らした二人連の御嶽行者の姿を見た彌太郎は、

「こんな夜更の吹雪の晩に、變だなあ。」と瞳を凝らすと、行者は行者だが、闇と吹雪を透して夜目にもそれと分る、額にあてた三角布、闇に浮く蒼白な不気味極まる顔。ふら／＼とやつて來るのも道理なる哉。腰から下は朦朧として定かでないのは、あながち闇と吹雪の故ばかりではないらしい。これはほんの瞬間の觀察にしか過ぎなかつた。目の前に迫る幽靈行者。逃げることも隠れることも出來はしない。今迄せつせと雪道を歩いて寧ろ汗ばんでゐた肌、背筋からぞつと冷いものが流れた。

「えいつ。もうしようがない。知らんふりして避けて通らう。」と決心して糞度胸握るた彌太郎は、小勢の方が大勢に一步雪中に踏み込んで道を譲るのが、雪國の雪中交通道徳だから、怖しさに視線を俯せて吹雪をよける振しながら、二人のために一步道を譲つてやつた。擦れ違ひさま、見まいと

したが、怖いもの見たさで見ずには居られない。そつと上目づかひに二人の幽靈行者をちらと見た。

人がわざと道を譲つてやつたといふのに、先方も彌太郎と同じ側へ道を譲らうとした。はつと反対側に飛んだから危く衝突を免れたと、白装束の三角布をした二人の人は、又してもふらりと彌太郎と同じ側に来て、わざわざ寄つて来るではないか。今度こそは明らかに故意に突つかうつて来たのだ。續いて二度三度と彌太郎が右に寄れば右、左へ避ければ左と確かに意識して、ふらふらつ、ふらふらつと嵩にかゝつて来るのだ。

「畜生、手前らなんぞに押潰ぶされてなるもんか。彌太郎の恐怖心は反撥心に變つた。右へ左へ、左へ右へかはしながら機を見て彌太郎は左へ寄ると見せて相手の虚を衝いて再びはつと左へ寄つたかと思ふと巧みに彼等を後へ避けることに成功した。

彌太郎は魂を心外に飛ばして、踵で腦天を蹴つた、雪に足奪はれて起きつ轉びつ、全身雪達磨の如くなりながらも唯々盲滅法、鐵砲彈の様に我が村さして霧地に駆け走つた。

が「免れた。」と思つて駆け抜けた刹那、矢張り怖いもの見たさの一念で、ちらつと一瞥を後に走らせた彌太郎は「あつ!!」と驚いて足を緩めてしまった。今度は正しく振返つて見て「わあつ」と聲

を擧げて仰天し、どつと其の場に尻もちついてしまった。

驚いたも道理、闇と吹雪に三尺先は定かに物の形も判断出来ない夜目にもかゝはらず、二三間先からはつきり識別の出来る、白装束、三角布の幽靈行者二人連れの姿は、それこそ天に駆けたか、降り積む雪に潜つたか、影も形もないではないか――。

「はつ。」と息をのんで、眼を擦つたが、次には跳ね起きるや否や一目散後も見ずに駆け続けた。漸く自分の村の取つきの家を叩き起して飛び込んだ彌太郎は暫く物も言ひなかつた。

やつと冷水一口ごくりと飲んで、一部始終を物語り、その家の主人に提灯で自分の家まで見送られてふらつく足を踏みしめながらやつと自分の家に歸つて行つた。

二三日後、まだ疲勞のために寝てゐる彌太郎を先夜送つてくれた人が訪ねて来て、「今朝になつてやつと判明したんだが、柿川向ふの村に住む私の知人で、狂信的に南魚の八海山を信じてゐる男が、五六日前、何を思ひ出したか、突然同じ様な狂信者の友と二人で『江戸でさへも寒念佛といふ寒行をする。儂らも寒行に八海山に行つて来る。清瀧にうたれて千垢離とつて平素の汚れを拂つて来る。』と家人の止めるのを袖振切つて出掛けて行つたのが、途中で遭難して死んだといふことが、今朝通知があつたといふことだ、あなたが逢はれたのは、遭難した二人の靈魂が家へ

歸つて来る途中だつたらうと思つて、その事も話してやつたんだが——。」と語つて言つた。

毛塚の縁起

此の話は「北越雪譜」(鈴木牧之)にも蒐録されてゐる相當有名な雪に因む傳説であるから敢へて掲載する。

鹽澤町(現上越沿線の一驛)の南方に關(現在石打驛のある部落)といふ村があり、此の關に隣接して關山といふ部落がある。道路は關山村から魚野川を越えて五十嵐村といふ處に行つて終つてゐる。

關山村と五十嵐村との間にある魚野川は此の部分に於いて誠に川の流が急になつてゐるので僅かの出水にも橋は屢々流失するので、昔は極粗末な橋しか架けられて居なかつたのださうだ。

しかもその川幅が頗る廣いので、出水時の外は川の中に幾つかの島が出来てゐるので、此の島と島との間を綴り合せて出来た幅一間にも足りないのが此の川の橋で、板や粗梁を藤蔓や繩切で橋桁に括りつけて島と島との間を繋ぐ丸太棒を補つた處の極めて貧弱なものであつたから渡ると橋は上下左右に動揺するので、慣れないものには体の中心がとり難くいため、渡ることの困難な様な橋であつたといふことである。

若し一度出水とならうものなら、此の橋は渦巻く濁流のために點在する島が水中に埋没するので忽ち流失してしまひ、これと同時に兩村の交通は全く杜絶の止むなきに至るのであつた。

冬の降雪期には兩村の人々が分擔し合つて、橋上の除雪をして、橋の墜落を未前に防いで交通に支障なからしめようとしてゐるのだが、それも一夜に數尺も積る頃になると銘々が各自の屋根の雪降りしや村内の交通等のため、なか／＼思ひながらも手が廻りかねて、橋上の除雪が怠り勝ちになるさうなると橋の上は積雪が忽ち欄干よりも高くなつて、丁度馬の背の様になる。かうなると橋上の通行は危険此の上もない。下は一面の流れの早い水であるし、足場は悪い。馴れた土地の大人でさへも時々過つて川に墜落することが、吹雪く日や薄暮などには稀でなかつたから、况んや老幼婦女乃至は不馴の人が過つて川の中に滑り墜ち可憐命をむざ／＼と落すことは珍しくなく、年々此處で數多くの溺死者や行方不明になる人が出てゐた。

さて、何時の頃であつたか、關山村に草庵を結ぶ源教といふ坊さんがゐた。佛教に對してどれ程の造稽があつたか分らないが、道心頗る堅固の坊さんで、行ひすましてゐたのでその名は相當遠近に聞えてゐた。

源教は毎年冬になると決つて寒三十日の間寒念佛を行つて、晝は方々の寺々を廻つたり、村内を托鉢したりし、夜は毎晩鉦を叩いて村内を歩き、その歸途は必ず魚野川の此の橋の上に佇んで、毎年非業の最期を遂げて死んだ人々のために、水底の鬼に對して念佛回向をするのであつた。

どんな激しい吹雪の晩でも三十日の間一晩として此の供養を怠つたことがなかつた。

或年の冬のことであつた。今夜が丁度寒念佛三十日間の行事最後の晩といふに、珍しくも今宵は吹雪も止んで、深海の底を思はせる様な穏かな大空には、冬の月特有のあの物凄いまでに澄み切つた青白い月が、曖々と山野に充ち満ちた雪を照してゐた。

裸の木立の黒い影がくつきりと白い雪の上に印されてゐた。

源教はいつもの様に橋上に佇んで回向した。寂然とした夜氣をふるはす様な魚野川の川瀬の音が念佛の聲と交錯して川面を渡つて消えた。

只管念佛に心を澄まして無念無想、一心に稱名念佛に餘念のなかつた源教は、ふと眼を開いて見た。

と、急に四邊がす——つと薄暗くなつた様に感じたので、

「おやつ!!」と思つた源教が思はず空を見上げようとした途端、朦朧と一面にもやの立こめてゐた



川面からぼ一つと一團の青白い陰火が燃え上つた。

これには道心堅固な源教も流石に大膽であり得なかつた。

「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」源教は瞑目して頻りに鉦を叩きながら一心に念佛を唱へた。暫くして目を開いて見ると、橋上の彼方から僅か二間許りの處に、年齢三十前後と思はれる女の姿があつた。

白蠟を思はせる顔の色、額には黒髪が亂れかゝつてゐた。しかも、それが今、水から上つた許りと見えて、此の寒中衣服からは雫が滴つてゐた。

「幽霊だつ」と源教は動顛しさうになつた。危く踏み泳へたが、背筋に此の寒中に冷水を浴びた様な感じがし、瞬間彼の顔は一時に血の氣を失ひ、五体の筋肉がぶるゝつと痙攣した。

源教は我にもあらず唯無暗矢鱈に念佛した。が、女は依然身動きもしなかつた。

暫く時が経過すると、源教の胸の動悸も次第に平靜に復して行つた。

「迷へる魂だ。痛いことぢや。水底の鬼と化したまゝ後弔ふ人もないのに違ひない。儂の前に迷つて出るといふも、此の世に執着があつて、行き處に行けず、宙に迷つてゐるからだらう。氣の毒千萬な。」と彼の心に油然として佛の慈悲心が蘇つて來た。

「南無幽霊頓生菩提。南無阿彌陀佛、々々々々々々。」と呟いて念佛すると、彼の怪しい女の姿がふら／＼と二三歩前に出た。そして微かな蚊の鳴く様な聲で斯ういつた。

「わたくしは古志荷頃村の菊と申す女。先年夫と子供に共に先立たれ、打續く不幸に女の細腕その日の生計も立てかねまして、此の五十嵐村にある由縁の家を訪ねて、先日の夕まぐれ此の橋を渡らうとし、過つて馴れぬ道を踏外し川に墜ちてしまひました。一旦は浮き上つたものゝ寒氣と疲勞のため再び水底に沈んでしまひ、今日が丁度四十九日目ですが、誰あつて一遍の回向はおろか一碗の水すら供養して呉れるものもなかつたのに、あなたは毎夜此の橋の上で回向して下さいましたので、有難い念佛の功德によつて、佛果を得ることが出来ましたが、唯々此の黒髪が邪魔になつて未だに成佛いたしかねて宙に迷つて居る次第であります。せめてものことに此の黒髪をばあなたのお手で剃つてはいただけますまいか。」と、しとどに濡れた兩袖かきあはせて潜然とうちしほられた。

幽霊の此の物語を聞いて、源教も轉同情の念を禁することが出来なかつたので、
「それは誠にお痛しいこと。黒髪を剃るのはいと易いことながら、生憎今夜は此處に剃刀を持つて居らず、お望みを叶へて差上げたくは存するが出来ません。若し明晩もう一度關山の儂の庵まで來て下さるなら、屹度あなたのお望みは叶へて差上げますが——。」と言つた。

すると首うな垂れて聞いてゐた女は、世にも嬉しさうにうち肯察うかがひいて、再び煙のやうに其の姿を水中に没した。

すると今迄立籠たちこめてゐた四邊一面の朦朧とした氣も同時にさつぱりと霽はれて、寒月は愈々その輝きを増したかの様に思はれた。

翌日は三十日間の寒行を終へたので源教は何がなしにほつとしたものを覚えて終日庵で過したが人に言傳ことづて、源教が日頃から親しくしてゐる同じ村の紺屋七兵衛の許へ、晝過ぎる頃庵まで訪ねて来てくれ、と言つた。

訪ねて来た七兵衛と四方山よちやまの話をした末に、源教は、昨夜水死女の幽霊いづれいに出逢であつた話を詳しくして聞かせてから、

「今夜そのお菊の幽霊が庵へ来ることになつてゐるから、あなたは後日の證人になるやうに儘と一緒いっしょに幽霊を見ては下さらぬか。實は儘は此の話を佛縁ぶつぐに疎い人々に話して聽かせて諸人教化しよじんけうかの便りにしたいのだが、好い加減の作り話と思はれるのも嫌だから、平素正直七兵衛として評判の通つてゐるあなたから證人になつて貰もらひたいのだが——」と言つた。

昔段よたんから熱心な念佛信者であつた七兵衛は源教の、

「諸人教化のためと思つて承諾しょうたくして呉れぬか。」といふ頼みを聽くと、何の異論もなく即座そくざに承知して

「それでは一度歸宅して用意してから改めて後程出直して來ます。」と言ふと、源教は、

「此の事は何卒明日まで人に話して下さるな。村の物好や青年などが面白半分に『幽霊を見よう。』などと言つて、やつて來て騒ぎでもしたら、折角の幽霊の希望を遂げてやれないやうな結果になるかも知れぬから……。」と念をおして言つたので、七兵衛もその旨を心得て歸宅し夕刻近くなつて再び庵にやつて來た。

七兵衛がやつて來るまでの間に源教は、佛壇に供物をととのへ、室内を整頓し、佛前に暫く讀經どきやうしてから七兵衛を待つた。

源教と七兵衛は晩の食事を済すましてから、佛壇に燈明とうめいを點したが、今宵はわざとほの暗くし、特に佛壇の前にはあらごもを敷いて幽霊の座をつくつた。それから折悪しく夕方から吹雪になつたにもかゝらず、入口の戸は細目に開けて幽霊の這入り易やすい様にし、佛前の經机きやうぐゐの上には研ぎ澄した剃刀かみそり二挺を用意し、香煙縷かうえんる々とさせて幽霊の來訪を待構へた。

宵から變つた空模様は稍々風さへ加はつて吹雪になつたので幽霊のために少しあけて置いた戸の

隙間から吹き込む風は、身を切る様に冷く感じ又そのために佛壇の明燈も明滅して定まらないので戸を閉めて圍爐裏の傍に坐を占めた源教は幽霊見届のために佛壇下の戸棚に這入つて隙間から覗くことになつてゐる七兵衛に對つて話し出した。

「寒くない様にと思つて戸棚の中に蒲團を敷いて置いたが、好い氣持になつて其處で眠つてしまひ幽霊の來たのを見落しなさんなよ。」と言ふと、七兵衛は

「儂は一生の思出にと思つて今晚わざ／＼やつて來たのに、幽霊を見ないでどうしませう。かうして一所懸命お念佛唱へて幽霊のやつて來るのを待つてゐるが、あなたこそ爐傍で煖まり過ぎて居眠りし、折角やつて來た幽霊に無駄足させない様に氣をつけなされや。」とやりかへした。

かうして源教は七兵衛と話しながら、獨り煙草を燻らしてゐたが、其も吸ひ飽きてしまつたが、幽霊はなか／＼やつて來ない。その中にそろ／＼欠伸が連続して出はじめたので頻りに念佛して見るが、好い氣持に爐の火に煖まつたのでともすると欠伸と念佛が噛み合つて出て來る。何とか睡魔を拂ひのけようと努力して顎の鬚など抜いて見たりして色々やつて幽霊の出現を待ちかねてゐた。

夜は次第に更けて四邊は寂として物音一つ聞えず、たゞ戸外の吹雪が窓の紙をうつ、さら／＼と言ふ音のみが時を刻んでゐた。源教は最初の中こそ我慢もし堪へてもゐたが、待つても待つても幽

霊は來ず、躰は煖つては來たし次第に睡魔の虜になつて眠りさうになる。幾ら氣を張つて見ても直ぐ駄目になる。到頭堪りかねてう／＼と遂に居眠つた。だん／＼体が傾いて倒れようとして、はつと目を開いた。消えかゝつた佛壇の燈明で見るともなしに佛前を眺めた源教は、ばつと一時に睡氣がふつとんでしまつた。

「來た！」お菊の幽霊が首うな垂れて、佛前のあら／＼も上に何時の間にもやら來て端座してゐる。瞬間源教は待ち設けてゐたことではあつたが、ぞつとした。が心を靜めて、

「お、よくこそやつて來られた。ではさあ……。」と言つたが、お菊は今夜は一言も發しようとはせず、默然と控へてゐる。

姿は昨夜その儘である。

源教は衣の袖をか上げた。手を淨め、盥に水を用意し、さて剃刀を手にしてお菊の背後に廻つて見ると、透き通る程白い頸から頬にかけて亂れかゝつてゐる黒髪は雫が滴らんばかりに濡れてゐた。

けれども雪の降る中をやつて來たといふやうな形跡は微塵も見られなかつた。

源教心の中で思ふやう。

「よし。此の髪の毛を剃り取つて残して置いて後日の證據にしてやらう。」と剃刀をあて始めたが、剃り落すにつれて髪の毛は一本残らず吸ひとられる様にする／＼と皆お菊の懐中に這入つて行つてしまふ。

「此の期になつてもまだ髪の毛が惜しいと見える。流石に女だ。」と思つた源教は今度は、髪の毛を指先に絡んで剃つたが、それでも皆自然に吸ひとられてしまひ、剃り終つた時には、ほんの僅かの毛しか源教の手には残らなかつた。

兎角して全部綺麗にお菊の頭は圓められた。頭の青々となつたお菊の幽霊は、白く瘡せた掌を合せて佛壇の如來像を拜みながら、その姿は次第に朦朧となつて遂に消え失せてしまつた。

七兵衛が眞青な顔をして佛壇の下の戸棚の中から震へながら匍ひ出して來た。

「さて／＼恐しいものを見た。戸棚の隙間から見てゐてさへ身の毛がよだちましたが、あなたはまあ、幾ら坊さんだからつて、よくまあ怖しくなくて剃刀があてられました。何といふ氣の強い事か儂は見ても齒の根が合はずが／＼鳴つて仕様がなかつたといふのに……。儂はもう迎も、氣味が悪くて悪くて一人で此の夜更にさら／＼歸宅などする氣は起りません。御迷惑ながら今夜は此の庵に泊めて貰ひます。」と言へば、源教は、

「あゝ、何卒お泊りなされ。待つてゐた人が來てもう用が済んだからには、一向差支へもござらんこれを御覽なされ。後日の證據にもと思つて、やつとこれだけ髪の毛を残しました。一本残らず懐の中に吸ひ取られるかと思つたが——屹度幽霊もそのつもりでこれだけ残したんだと思はれるんだけれど。」もとお菊の髪の毛を七兵衛に示せば、七兵衛は氣味悪るがつて覗いて見ただけで手にとつて見ようとしなかつた。源教はお菊の髪の毛を白紙に包んで佛壇にのせた。それから七兵衛に對つて、

「何にも肴はないが、夕飯に飲んだ酒がまだ少々残つてゐる。」と言つて、二人は爐傍に坐つて酒を酌みながら幽霊のことについて種々話合つた。

「幽霊といふものは、話には聞いてゐたが、見たのは今夜がはじめてです。袖すりあふも他生の縁と申すこともあるしするから、唯々幽霊を見ただけで済まます、どんなものでせうか。今夜こそしみ／＼と佛様の有難さが身に浸みて覺えましたから、いつそのこと明日此の庵で百萬遍念佛をしてやつて、幽霊の成佛を祈つてやることは——。」と七兵衛が言ふと、源教は、

「それは何よりの功德。ではあなたは明朝村人に古志のお菊の幽霊を見たといふことを語つて下され、さうしたら儂もあなたを證人に幽霊の話をして諸人教化の一助ともいたしますから。」とその夜

は他にも色々、

「一体幽霊などいふものは遠い昔からあつたものだといふことで、僕も随分以前に或人から聞いた話ではあるが、「沙石集」(僧無住編)とかいふ本にも、幾つかそんな話が載つてゐるとか申します。」と言つて、幽霊の話をして聞かせ、やがて夜も更けたので、その夜は一つ夜著に一緒に寝た。

さて翌朝、七兵衛は源教を伴つて自分の家に歸つて行つた。さうして近所隣の人々を呼集めて、お菊の幽霊の話をしてきかせると、源教も懐から白紙に包んだ彼女の髪の毛を取り出して示したので、人々も非常に感動して、口々にその奇異を言つた。

七兵衛がお菊のために百萬念佛をしたらと言ひ出すと、集つた人々は、

「それはよいことだ。早速今晚やつたがい。食事の方はわたし共が用意するから、庵ではお茶の支度だけ願ひます。村中に觸れませう——あ、それから庵に珠數がないから、これはお寺から借りて行く。」と即座に大乘氣で賛成した。

夕方迄に此の話は忽ち擴がつて、噂は隣村にまで傳はつたので、其の夜の源教の庵は大變な人で賑はつた。

七兵衛は妻と相談して餅を搗いて庵に持つて行つた。

百萬遍念佛は源教を導師にして、お菊の幽霊のために實に盛んにとり行はれた。

お菊の幽霊の話はかうして次第に遠近に傳はり、話を聞いた人々は源教の手許に残つた髪の毛を埋葬して石塔を建立してやつたらば屹度幽霊が喜ぶだらうと言つた。そして志を同じくする人々は相寄つて資を募り碑を建てることになつたが、源教は石碑建立供養の導師を堅く自ら辭退した。さうして當時學徳遠近に評判高かつた、最上山關興寺の和尚に願つて、特にお菊のために戒名を貰つてやり、お菊溺死の橋の傍に、源教の手許に残つたお菊の髪の毛を埋め、その上に石塔を建て、やつたが、その一切の営みは天壽を全うした人を葬ると全く同じで、近郷近在から大勢の人が參集し、盛大に懇ろに佛事供養が執り行はれた。

紺屋七兵衛は此の事あつて後幾許もなく、一念發起して源教の弟子になつて出家してしまつた。

これが今に傳はる關山村毛塚の由來である。

雪

女 (一)

雪の空はどんよりと鉛色に低く重く垂れ下つてゐた。

此處は上信越の國境をなす銀山平である。

村里遠く離れて一群の松に取圍まれて、一軒の小さい藁葺家がぼつとりと建つてゐる。

白く積つた丈餘の雪、冬枯れた喬木の梢、何となく見る人の心をうつ荒涼そのもの、冬景色である。

さて、此の一軒の離れ家には今年二十歳になる吾作といふ青年が、年老へた父親とたつた二人で暮してゐた。

吾作は親孝行者として麓の村から隣村にまで聞えてゐる感心な青年であつた。身縁としては此の廣い世界に、たつた一人の叔母がある限りであつたが、その叔母も遙か離れた麓の村に住んでゐるのであつた。

吾作がまだやつと三歳の冬、丁度今日のように矢張り寒さの酷い日であつたが、ふとした風邪が原因で床に就いてゐた母がぼつくり死んで行つた。母に別れてから、十有幾年といふ長い年月を父が慈愛の腕に抱かれて貧しいながらも楽しい日を過して成人したのであつた。

年の瀬も押迫つてお正月も目の前に近づいた或る日のこと、新春の御馳走の用意でもしようと思つた吾作は、今年迄は新年を迎へる魚は父の手で捕へられるのが例になつてゐたが、寄る年波に近年めつきり

作は溪川に出かけた。

衰へを見せた父が折も悪く、風邪氣味で床に就いてゐるので、今年も吾作が父に代つて出かけたのである。

床の中から逞しい若人と成人した我が子を微笑ましうに見送る父を残して、積雪を裸に踏んで、溪川の深い淵の底に集つて凝と寒さのために動かすにゐる魚を獲らうとして出かけて行つた。

家を出る時には、雪國の冬には珍しい紺青の色を見せてゐた空も、吾作が中途まで来た頃から、變り易い天候は、ちら／＼雪を催して來た。目的の深淵まで行き着かぬ中に雪降になつたけれども案内知つた場所ではあるし、引返すのも癪にさはると、藁の深靴の紐緊め直して進んで行つた。

天候の急變に驚いて、餌を漁りに出て居た野兎が穴に逃げ歸らうとしてゐる處を、吾作に生捕られてしまつた。

思はぬ獲物を得たこと、急變した天候とに吾作は餘程腫を返さうかしらと思つた。

けれども今年始めて父に代つて出て來たといふ意識と、未だ目的の場所にすら行きつかないで歸るといふことが、血氣の青年の自尊心にとつては忍べないことであつたので、歸らうと思つた心も鈍つてしまつた。然し彼が未だ數歩と行かぬ中に四邊は咫尺を辨じ得ない程の物凄吹雪となつてしまつた、山に生れて山に育つた吾作ではあつたが、流石の彼にも行くべき方角さへも分らぬ程

の酷い荒模様に変つた。致方がないので、若しやその邊に偶然炭焼く人の小屋でもありはせぬかと避難場所を求めたが、残念ながら吹雪のために全然遠望がきかぬからそれも及ばぬ事だつた。

かうして吾作は、往くことも歸ることも出来なくなつてしまつた。が、此の儘居ては、凍死する外はない。夕方早い冬の山奥にはもうだん／＼日没が近づいて來つゝあることが、吹雪の天地晦暝の中にゐても、經驗から來る感で吾作には分つた。山峽の夜の吹雪は恐しい。ひよつとすると雪に降り埋められてしまふ危険が多分にある。

けれども山家に育つた吾作に恐怖はなかつた。雪の遭難も今日迄には幾度か經驗してゐる。焦らず撓まず根氣よく方角を求めて思慮を廻らしてゐる中に、ふと薄暮と猛烈な雪の帷の彼方にちらつと遙か向ふに一つの灯影を認め得た。それが果して何であるか分らなかつたが兎に角辿りついて一夜を過すに如くはないと吹雪を衝いて暗の迫る雪の中を、足許に氣を配り／＼歩いて行つた。

行けども行けども目指す火には容易に達することが出來ず、その中に日は全く没し暗になつた中に、愈々はつきりして來た目標を目がけて、足下に伏在するかも知れぬ危険に怠らず注意しつゝ歩き續けた。

膚をも劈く様な寒氣を侵して道なき暗い夜の雪道を摸索しながら、唯一筋にたつた一點の火を目

當に、やつと一軒の山小屋らしいものに行き着いた時には、吾作の肌は湯の様な汗で衣服までぐちや／＼になつてゐた。

小屋に到着して見て、吾作にはその小屋が自分の家から大した距離のある地點にあるのではないことを直ぐに知り得た。そして彼は今の今迄、こんな小屋が、こんな處にあることを遂ぞ知らなかつたので、一寸妙に思つたけれども「助かつた。」といふ心持から大した疑念も抱かず小屋の入口から案内を乞うて這入つて行つた。

小屋の中の爐には赤々と楷火が燃え盛つて居り、正面にはこちらを向いて、彼が見たこともない若い女がたつた一人で坐つてゐた。

吾作はその女と視線が合つた時、はつと何がなしに異様なものを感じたけれども、躊躇なく事情を物語つて一泊を頼んだ。

女は吾作の話に首肯いて、快く小屋の中に吾作を請じて、親切にもてなし、餓ゑも十分に満して呉れたし、爰もとらした。それから明朝の食事の用意まで萬端済してから吾作に言つた。

「吾作さん——」。

吾作は我にもあらず、どきんとした。彼女が自分の名を呼んだからである。

吾作は此の小屋に来てから、未だ自分の名を名乗りもしなければ、女が誰で、どうしてこんな處に住んでゐるのかなど、立入つた詳しい話は何一つ話もしなければ聽きもしないのに、女は明かに自分の名を知つてゐるではないか。すると女は、微笑みながら話を續けた。

「——そんなに吃驚なさらなくてもいいんです。今夜かうして、あたしの小屋にあなたがおいでになつたといふのも、何かの御縁と存じます。けれども明日お宅へお歸りになつても、此處に小屋があつたの、女が一人で住んで居たつたのと、人にお話になることだけは吃度なさらないでね。それだけはお願ひするわ。ねえ、いゝでせう。」と彼女は念を押して置いてから又、

「あたしは、これから一寸出掛けて來なければなりませんの——いゝえ、行く先や用件はお聞きにならないで——ですから、あなたは何卒明朝まで御悠くり此處でお寝みなさい。爐に火さへ絶やさなければ、決してお寒かありませんが、でもこれを——。」と言ひながら女は、こんな吹雪の晩に、何處へ何しに行くのやら、未だ若い女の癖に恐れ氣もなく、剩へ身支度一つするでなしに、これもおよそ冬には不似合な眞白い着物一枚着たなりで、今迄着てゐた温かさうな綿の這入つたものを脱いでふはりと吾作の肩に着せかけるや、すういと吹雪の吼える闇の戸外に消えてしまつた。あまりの事に呆然とした吾作は、暫く返答は勿論身動き一つせず、戸口を見詰めたまゝ、惘れてゐた。

獨り小屋に残された吾作は、夢か現かと暫くの間疑つた。今眼前に起つた、一寸常識では判断の出來ない様な奇妙な出來事について——。

けれども吾作は間もなく、晝間の疲勞と空腹を満して火に煖つた飽満感とのために、一方に於いては何となく氣味悪くは思ひながらも、爐傍に横たはつて、女が肩に着せかけて呉れた着物を被つて熟睡に入つた。

目醒めた朝は麗らかな日和で、白銀の雪の上には日光が眩しく輝いてゐた。

一人息子の身の上を心配して昨夜は碌々安眠出來なかつた父が懶い体で軒下に立つてゐる處へ元氣な足調で歸つて來た吾作は昨夜のことには就いては詳細父に告げることが敢へてしなかつた。

雪の一夜に怪しい女の小屋に泊めて貰つてから早くも三年の歳月が流れて、吾作も二十三になつた或年の晩秋のことであつた。

山ではもう冬だつた。雪の來るのが平地に較べて一段と早く、二三日前に降つた雪はまだ二三寸地上に消え残つてゐた。山を登るに従つて雪も深い。

朝來好天氣だつたし、久振りに麓の叔母の家を訪ねて久瀧を敘した吾作が、歸りを氣にしなからも引止められるまゝに意外に遅くなつて歸途についたのは、釣瓶下しの秋の日が山の端に懸らうと

する頃だつた。

歸りの遅いのを氣にしてゐるであらう父のことを思ひながら只管急ぐ足がだん／＼坂にかゝつて来ると、山の方ではちらりほらり雪が舞つてゐた。「おやつ」と空を見上げた眼を登り道の上の方に走らせると、今頃、此の時刻に通る人のある筈がない山道に、遙か上の方に人影がある。

「今時誰だらう？日光へなんか抜けようなどするのは……。」と獨言を呟きながら足を早めてゐると前の人との距離はだん／＼ちぢまつて来た。今はもう夕暗の中でも明瞭と識別が出来る。弱々しげな足どりで行く女の人だつた。間もなく追いついた吾作は、上程雪が深くなるのに、此夕間暮に行くことの無暴さを説いて、今夜は一思ひに麓に引返して一泊し、改めて明朝道案内の夫を雇つて先達して貰ふ方がよからうと、本當に親切な心持で女に話しかけて注意もし、すゝめてもやつた。けれども考へて見ると、もう日もすつかり暮れてしまつた今頃、弱々しさうな此の女の脚で麓の村まで戻ることさへ迎も覺束ないことに氣がついたので、見窄しくても宜かつたら自分の家―此の山の上の平にある―に泊つてはどうかと言つた。

かうして自分の家に女を伴ひ歸つた吾作は父親に委細を語つて、其の夜はだん／＼夜の更けるにつれて冷え込んで来る夜氣に、眠るには猶早い夕食後の一刻を圍爐裏傍で暖をとりながら、父子は

女と話したつた。

女の自ら語る身の上はかうであつた。

「わたしは羽前鶴岡の者で雪と申す女です。遂先頃殆ど前後相繼いで兩親に死に別れてしまつて、外に頼る身寄といふものもないので、未だ會つたこともありませんが、下野の日光に父の遠縁の者が住んでゐるとかいふことを聞きましたので訪ねて行つて、身の振方を相談しようと思つて行く途中なのでございます。けれども長い間の音信不通ですから訪ねて行つても果して住んでゐるやらゐないやらそれ分りませんし、若し居ても面倒見て呉れなかつたら……と、それを思ふと誠に心細くなつてしまひます。」と長い物語に父子も、身につまされて坐哀を覺えて、女の身の上に只管同情を惜しまなかつた。

翌日からは、生憎と酷い雪が降りつゞいたので、女は引止められる儘に滞在することにした。しかし數日経つても雪はなかく降り止みさうもなく、例年よりは少し早い様だが、もう斯うなつたら假令晴天になつても、雪は根雪になつて消えつこない。さうなると道案内をする人があつても、女の足では日光までは愚か麓まで下りて行くのでさへ容易なことではない。話を聽いて暗然となる女に、父子は、

「まあ、かうなつたら迎も駄目だから、嫌でも仕方がないから諦めて、何れ來春になつて雪の消えるのを待つて、當分儂らが家に落着いてゐなされ。」とすゝめたので、女も愈々決心をして吾作の家に腰を据ゑて、何かと手助けなどしながら厄介になることにした。

女は本當に何でもよく出来る感心な人であつた。女一通りの仕事はどれもこれも皆千人並秀れてゐないものはなく、その上誠に素直でよく氣が付き、父親には殊によく仕へたので父親は自分の本當の娘の様に嫁の如くに思はれてならなかつた。

こんな譯で陰慘な山の冬も今年も吾作一家にとつては誠に短かく思はれて春がやつて來た。けれども雪が消えても花が咲いても、父親も吾作も出て行けと言はなかつたし、女にも出て行く氣などは毛頭なく「日光へ」といふ言葉すら口にしなかつた。

特に吾作一家にとつて、お雪を迎も日光へなどやる氣のしなかつたのは、十數年來女手なしに過して來た父子の生活に彼女が本當に便利で重寶でそして潤ひのある存在であつたからだ。炊事に針仕事に其の他の細々とした家事の整理に必要缺くべからざる人間であつた。彼女が一人ゐるために、和やかな氣分が家中に漲つて、吾作父子は彼女を全くもとの家族の一人と思ふ様な雰圍氣の中に一日々々が楽しく過ぎて行つた。

さうして吾作は不相變、忠實者、親孝行者として世間の氣受けもよく、毎日山に行き、野に出て島を耕して眞黒になつて働き續けてゐた。殊に女が來てからといふものは、老衰した父の世話も家事も一切を彼女に任して、全く後願の愛なく専心戸外の仕事に心を打込むことが出來た。

その中に、父親はふとした風邪が原因で床に臥したが、女の親身も及ばぬ手厚い看病も、吾作が人並すぐれた親孝行の心盡しも、老への身には甲斐もなく、ふと秋風に誘はれる様に妻のあとを追つて逝つてしまつた。

吾作は父に別れた悲しみをやる術もなく、泣く／＼野邊の葬りは出來得る限り手厚く滞りなく済したもので、當分は氣の抜けた人の様に唯がつかりして日を過してゐた。すると四十九日の忌日にやつて來た叔母が色々吾作を慰めた末に言つた。

「お父さんに亡くなられたし、お前もどうせ何時まで獨身でも居れまいから留守居をする者も要ることだからお嫁を貰つたら、どうだねえ、いゝえ、お前は今こそ悲しみのためにそんな事をいふけれども、家を守る者なしに濟まされるもんかね。——就いては、これは他處から迎へるのも何だしするから、いつそ氣心のよく分つてゐるあのお雪さんと夫婦になる氣はないかねえ。今更、お雪さんだつて日光でもあるまいし……。」とすゝめるので吾作も考へて見ると叔母の言ふ事も道理なの

で、
「お雪さんさへ好ければ、どうぞよい様に。」と言ふので、叔母が彼女の意中を訊いて見ると、彼女には勿論異存のあらう筈もなく、

「今更、日光へ訊ねて行つて見たとてどうなりませう。さうして戴けるなら何よりの仕合と存じます。」と言ふ儘に、日を改めて叔母が媒妁して、吾作とお雪は祝言をやつた。

その後、吾作夫婦は仲睦まじく、心を合せて働いてゐたので、律義者との評判もよく、亡き父母の追善供養も怠りなく只管家業に精出してゐた。

さうして吾作夫婦の間には次々と子供が生まれて來た。どの子どもどの子どもも伶俐で可愛い顔をした縹緞好しであつた。

父親が死んでから五年経つた。父を失つた悲しみも三人の子の父となつた吾作は次第に忘れて、今は妻子を愛し養ひながら楽しい月日を過してゐた。

又今年も陰惨な冬がやつて來た。

圍爐裏傍で楽しい夕飯後の一時を、吾作は繩を縋ひ、妻のお雪は子供達の正月の晴衣を縫つてゐた。母にまつはつたり、父の傍へ寄つたりしながら、三人の子供は父と話したり、母に尋ねたりし

て、指折り數へてお正月の話に餘念もなかつた。和やかな空気は、爐の楷火の煖さと共に、外の吹雪も忘れてしまふ程、家中にみち満ちてゐた。吾作は繩縋ふ手の合間々に、子供の顔を眺めてうち微笑んだり、妻と顔見合せたりしながら仕事を續けるのだつた。

妻のお雪は三人の子の母となつた今でも、その容色は以前とちつとも變りなく、今も猶五年前その儘の美しさを見せてゐた。その名の如く雪の様に白く美しく輝く顔は愈々若く美しくなつて行くのではないかとさへ思はれる程であつた。三人の子供の縹緞のよいのもその點全く母親似といはなければならなかつた。吾作は爐の火に照らされた美しい妻の横顔を好ましげに見詰めてゐる中に、ふと遠い／＼記憶が心に蘇生つて來た。

今迄、此の數年間、忘れるともなく忘れてゐた、あの雪の一夜の山小屋のことを今思ひ起したのだつた。

あの不可解な、戦慄さへ伴ふやうな思出、そしてまさ／＼と眼底に焼き附けられた山小屋の女の顔。それが何と今頻りに針を運ぶに餘念のない妻お雪の横顔にそつくりその儘ではないか。

仕事も丁度一區切ついた。妻は、もう爐傍にすや／＼居眠つた三人の子供をそれ／＼床に寝かしつけて來てから、吾作に盃茶をすゝめた。

爐では火が快く燃えてゐる。熱い澁茶をすゝる吾作の心は平和な如何にも充ち足りたものであつた。

吾作は外の吹雪の音に耳傾けて、暫く無言で居たが、稍々あつて、「うむ。さうだつた。矢張り今夜みたいな晩だつた——。」と呟く様に獨り言つた。すると妻のお雪が針箱を傍へに押やりながら、

「あら、何ですの。思ひ出したやうなことを。」と可愛い媚を湛へて首傾けて訊いた。

「いや、つまらない話だ。よさう。」と吾作は言つたが、又思ひ返して秘密でもある様に思はれても嫌だと思つて、何氣なしに話し出した。

「さう丁度六年程前のことだ。お前が儂の家に始めて來たつて、あの三年前の冬さ、儂は親父の代りに、正月の魚とりに淵へ行かうとしたが、その途中で大吹雪にあつちやつて、やつと山小屋を一軒見つけて其處へ逃げ込んだのさ。するとその小屋の中に不思議な女が居てねえ。その女の顔が今迄忘れてゐたが、今夜急に思ひ出されたんだが、妙ぢやないか？お前の顔そつくりだつたやうな氣が先刻したもんだから、自分ながら途方もない事を考へたもんだと途獨言を言つたつて譯さ——。」と無造作に言つて、吾作は妻の朗かな笑聲を期待して妻の顔を見た。

ところが、お雪は笑ふところか、下さし俯いて黙つてゐた。

これには吾作も驚いてしまった。

年が年中、快活で朗かで顔に微笑みを絶やしたことの無い本當に柔しい氣質のお雪だつた。だから麓の村人達も、

「吾作さんには本當に何とまあうつつけのお嫁さんだらう。」とよく噂しあつてゐたし、此のお雪の噂を我が事の様喜んで、一から十まで吾作の耳に入れて呉れるのは、何時も決つてあの善良な麓に住む叔母で、そのあと決つて言ふのであつた。

「お雪さんを大切にしておやりや。お前の外、此の世に頼りのない人だからね。」と。

お雪にはこれと言つて何一つ非のうち所のない女である上に、假令どんなに苦しい悲しい辛い事があつても、今日まで吾作と夫婦になつてこの方五年間こんな不氣嫌な憂鬱な表情をしたことは一度もなかつたのに、どうしたことであらう。吾作は呆氣にとられてしまつて、手持無沙汰の態であつた。

暫くして、きつと凄しい程美しい顔を上げると、お雪は隠さもしないでじつと吾作の顔を凝視して居たが、突然言つた。

「今はもう何を隠しませう。わたしがあの晩の女なのです。「雪女」です。お約束によつて唯今あなたのお命は頂戴いたす筈ですが、可愛い三人の子供のために、お命だけはあなたにおあづけして置きます。子供を可愛がつてやつて下さい。」と言つたかと思ふと、お雪はすつくと立上つて、嘗ての夜の様に、すうつと吹雪の狂ふ戸外に消えてしまつた。

吾作はあまりのことに唯々呆然として何時迄も宙を見詰めた儘、圍爐裏の火の消えたのも知らずにゐた。

翌朝、母を慕つて泣く末の幼児の聲に、ふと我に返つたかの如く、急に立上つた吾作は、ふらふらと山の麓の方に歩き出して、六年前に一泊したことのある小屋のあつたと思はれる方を唯々恍惚として、氣の抜けた人の様に何時迄も何時迄も飽くことを知らぬ様に眺め入つてゐるのであつた。

足痕隠しの雪

三島大積と言ふ村は、關原から更に又奥へよつた、殆ど刈羽と境を接してゐる處であるが、今を去ること數百年前、此の村の一部落に「源内殿の婆さん」と呼ばれる寡婦が獨り住んでゐた。

此のお婆さんは夫には、もうすつと以前に死に別れてしまつてゐたし、その上子供といふものも

無ければ親戚身縁といふものは勿論、親しく交際するものもない全くの孤獨であつた。家や家敷は自分のものであつたが、これ以外に財産といふものも皆無であつた。そのみならず、幸か不幸か家の建つてゐる處が村の外れで、一軒だけぼつんと離れた家に住んでゐるので所謂近所隣同志の誼といふものにも恵まれること甚だ薄すかつた。

他に原因があつたかどうかそれ分らないが、かうしたことも確かに原因の一つとなつてお婆さんは世の無常を果んだものか、晩年は非道く佛教に凝つてしまつた。

鬢髪は殆ど灰色に變り、相當の老齡に及んだが、頼る身を持たず、坐食出来ない財産しかないお婆さんは、僅か猫の額程の面積の田や畠を自ら耕して、やつと細々辛い暮しをして、朝夕は唯念佛三昧に耽つてゐた。

村人の誰とも交際しない許りか、毎日野良へ往復する時會ふ人々にさへ敢へて、挨拶一つしなかつた。そして常住口の中でお念仏だけ呟いてゐた。けれども目に一丁字のある女ではなし誰あつて特に經文を教へてやる程の親切な人もなかつたので、お婆さんが道を歩くにも呟くのは唯々「南無阿彌陀佛」の一點張りに過ぎないことは勿論だつた。一体、平和な生活に馴れ切つてしまつて大した佛教的信仰心など持つ必要のなかつた當時の村人が此の一風變つた「源内殿の婆さん」

の様子に對しては、嘲り蔑むといふよりも寧ろ憐むといふ眼で傍觀してゐたと言つた方が當つてゐた。

安心立命を佛教に求めないでも十分現世を享樂し得た村人の目に映つた、ぶつ／＼言ふお婆さんの様子は確かに私語し合つたり、目ひき袖ひき、甚しきに至つては指さし笑ひ合ふに足る價値のあるものであつたに違ひなかつた。

けれどもそんな村人の態度や様子にはお婆さんは全く無關心らしく、不相變ぶつ／＼やつてゐた。或年のこと、此の村一帯は春先の一番大切な田植る時に旱魃が續いた、め水不足になり、其の年の秋は大凶作だつた。當時交通の不便だつた昔のことであるから他國や他地方から穀物の移入を仰ぐことは出来ず、來年の秋迄村人達はお芋や大根で命を繋がなければならぬことになつたので、平和に豊であるべき筈の實りの秋にもかゝはらず、此の村には更に生色もなかつた。

さうした年の十二月も末の頃、或る日の夕間暮時、一人の旅の行脚僧が此の村を通つた。各戸毎にお念佛を唱へながら托鉢して廻つたが、凶作に喘ぐ村人からはお米一握はおろかなこと一飯の寄捨も奉仕も仰ぐことが出来なかつたので、坊さんは寒さと疲勞と餓えを我慢して暫く家々を廻つてゐたが、堪りかねてとある家で、前を流れる川端にお芋を洗つてゐる老婆を見かけて、慇懃に、生

の里芋、二三個の報謝を請うたが、坊さんの此の切なる願は無情にも拒絶されてしまつた。

「お坊さん、差上げたいのは山々ですが、此のお芋は石芋というて、煮ても焼いても容易なことで食べられないお芋でな。生ではとても駄目ぢやぞな。」草根木皮食へるものなら何でも手當り次第に、我勝ちに集めてやがて迫り來る嚴冬の用意をしてゐた位だつたので、芋一個と雖も惜しかつた老婆は、僅か二三個の里芋を坊さんに與へることを吝んで、いへもなくさう言つて斷つた。

柔和な相に微笑を湛へた旅の坊さんは、如何にも人を疑がふことを知らぬ様で、

「ほ、う。さうですかい。生では食べられない——成程石芋ですか。へえ！、そのお芋がね。奇妙な芋もあればあつたもんですな。」と見えすいた嘘にも腹を立てず、空腹をかゝへて、かうまで窮迫した村に一夜の泊りを貸し一飯を恵む人もないことを知つて、只管同情を寄せながら、北風寒い中を、重い足をひきづる様にとぼ／＼と村外れの方へ杖をひいて行つた。

村を出外れると、もう坊さんはどうすることも出来なかつた。餓えと疲勞のために村で最後の家「源内殿の婆さん」の家の前に來た時には、もう意地にも我慢が出来なくなつて、よろ／＼と倒れ込む様に入口に進んで、矢張り無駄とは思ひながらも案内を乞うた。

それが年久しいためにさうなつたのか、出て來たお婆さんの顔は、坊さんの姿を認めても平生と

少しも變らぬ表情だつた。口癖のぶつ／＼お念佛をやりながら坊さんの言葉を聞いたお婆さんはそれでも、坊さんを家の中に案内し、圍爐裏傍に請すると、缺茶碗に一杯の白湯を汲んで振舞ひ、ぶつきら棒に、

「そんなら泊つて行かつしやれ。」とすゝめた。

村人の誰よりも貧乏なお婆さんは、此の凶年に自分一人の口すら糊しかねてゐたのだから坊さんを泊めても、食事のあてがある譯ではなかつた。

闇が深くなるにつれて益々寒さに、せめてものもてなしにと爐に火だけは絶やさないう様にした。

夜が更けると共に、夕方から底冷えのしてゐた空は、益々骨に透る様な寒さを覚えさせてゐたが遅くなつてちら／＼と雪を催しはじめた。初雪である。地上に粉をまいた様に一二寸程も積つた。

ともすると早い年には今頃初雪を見ることも稀ではなかつたが、凶年に喘ぐ村人は十分満腹も出来ないのに、此の日の指先も痺れる様な寒さのために皆々早くから床に這入つてしまつてゐた。

もう今頃寝ないでゐるのは「源内殿の婆さん」と旅の坊さんだけであつた。

お婆さんは先刻來頻りに考へてゐた。

「坊さんを寝ませる夜着がない。明日の食事はどうしたらよいか。」とそればかり考へて、爐の火の

消えさうになるのも知らぬげであつた。

けれども坊さんは出家の常、樹下石上も厭はぬ身、雲水の行脚になれてゐるので、白湯と爐の火に満足して、爐傍に坐つたまゝ何時か眠つてゐた。

やうやくお婆さんの心に成算が立つた。明朝の食事は、僅か一握の小豆とお正月用に大切にしておる餅米とで粥を作つて差上げようといふことであつた。しかし、お茶は——。これには、はたとお婆さんは當惑してしまつた。

坊さんの寢息を窺つた婆さんはそつと立上つて戸外に消えた。

例年ならば村の大概の家の庭には、冬でも大根を凍らせないで、明春までの食用にしようと、周圍を藁で厚く取巻き、下は土を盛り上げた上に藁や糠殻を十分敷き、上は苦草屋根にした「建」といふ大根貯蔵所が出来るのだ。今年は拵へない家もあるが、依然富有な家では、我が家の豊富な食糧を凶作年にも誇りやかに今年も矢張り作つてゐる。

「そこへ忍んで行かう。そして四五本の大根を引き抜いて來よう。」と思つてお婆さんは、悪い事とは知りながら、明朝は夕飯も食はずに寝た坊さんがどんなに腹を空かして、喜んで食べるだらうかを心に描きながら出掛けて行つた。

折柄夜は更けわたり、剩へ、今冬の初雪さへ見た寒夜に、村の物持の庭へと婆さんは闇の中を辿つて行つた。

けれども眠つてゐると見えた旅の坊さんは目こそ瞑つて身動きもせずにはゐたが、眠つてゐるのではなかつた。已に先刻からお婆さんの心中の苦慮を盡く察して、お婆さんの行動を詳細悉く知つてそして知らぬ顔してゐたのであつた。

やがて、此の善良なるお婆さんは太やかな大根を四五本小脇に抱へて、物音をたてぬように自分の家に歸つて来て寝につくのであつた。自分の家の戸口から忍んで行つた大根建まで、生憎の雪の中にくつきりと往復の足痕を残したことに全然氣がつかないで眠つたのだ。盗みをしつけぬ人の無頓着さ、何れ夜も明けたならば、さうでなくとさへ平素から村人に白眼視されてゐる「源内殿の婆さん」が忽ち凶作に困つて泥棒を働いたと、盗賊呼ばはりをされなければならぬことも、坊さんへの朝餉の用意の出来たことに心安きを覺えてすつかり忘れてゐるらしいのに坊さんは憐憫の情を禁じ得なかつた。

翌朝目醒めた村人達は驚いてしまつた。初雪が今頃から降ることはさして珍しいことではないがこれ程深い雪が今頃から降らうとは夢にも思はなかつたからだ。



雪に對しても一向心を引かれる様子もなく「源内殿の婆さん」の家では、お婆さんは旅の坊さんと對坐して、爐邊ろへんに煖あたたつてゐた。自在じざい鍵かぎから下つた割鍋われなべの中では、小豆の這入もちこめつた餅米もちめの粥かゆがもう少しで煮えようとしてゐたし、爐の中のわたしの上では湯氣を立て、輪切の大根が火に焙あぶられてゐた。

やがて粥あぶりと焙大根たいこんに飽腹ほうよくした坊僧は何處ともなく立去つて行つた。

斯うして「源内殿の婆さん」の犯おかした罪は誰一人知らずに濟すんでしつまた。故老こらうの記憶にもない初の大雪のお蔭かげで……。

此の坊さんこそは一説に、佛教弘通くわうつうと衆生濟度のため諸國行脚中の弘法大師であつたと言はれ、これ以來越後に初雪が早くからしかも多く降る様になつたと傳へられてゐる。そして坊さんに芋を與へることを惜んで、一人の老婆が「石芋」だと欺あやまいたため、此の村でとれる芋は翌年から何處の家のもので、皆石の様に堅く、三日三晩火を絶たやさずに煮續ひつけなければ食へなくなつたといふのである。

都會は勿論田舎でも漸次煩雜はんざつを嫌いとふため、次第に癯すたれては來たが、まだ大正の末頃迄は田舎に於いては流石に行はれたゐた、小豆粥あづきかゆと大根焼たいこんやきでする越後の「大師講」(舊曆十二月二十三日)といふ

祭はこれを記念するものなのである。

(附) 「足痕かくし雪」といふのと「石芋」といふ話とは往々各別個に獨立した傳説としても存在してゐる。が此處には、これを連繫をもつた説話として蒐録することにした。又、「足痕」を雪の上とせず、畠の中へ忍んで抜いたとする傳説もある。これは「初雪」といふものに連關させて、別に雪の量には關係をつけないでゐる。

が、要するに、降雪傳説といふ點に於いては、前掲の「雪の傳説」乃至は後出の「雪の五郎助爺さん」など、同一素材が、民俗生活の反映や地方的粉飾や又は雜駁な色々の分子の混入することによつて、其處に異同を生じたものと思はれる。

雪

虫

支那の書物を見ると「山海經」といふ本に、

「蜀の蛾眉山といふ山は、夏になつても雪が消えないで残つてゐる山であるが、此の山の雪の中には雪蛆せつそといふ蟲が住んでゐる。」といふことが書いてある。が、越後の雪の中にも、矢張り雪蛆がゐる。此の虫は早春の頃から雪の中に發生して、雪が消えると此の虫も亦居なくなつてしまふ。が、それは兎に角として、冷い雪の中で、何を食物に、どうして生きてゐるのか。それは一体何處から

やつて来て、最後はどうなるのか、不思議千萬の虫である。

此の雪蛆といふ虫は、夜は雪の中に棲んでゐるが晝間太陽の光が輝くと活動する虫である。蚊の様な蠅の様な奇妙な虫で翅で飛行するものと、翅があつてもそれを用ゐないで匍つて歩くものとの二種類がある。

冬の夜は長くて退屈だ。

夜子供達は、夕飯が済むと炬燵に煖りながら父や母に話を強請んで固唾を呑む。

昔、信濃川に沿うた越後の或村に貧乏な母娘がたつた二人限りで住んでゐた。娘の名はお瀧と言つて今年十三だつた。

お瀧の母親はすうと以前からぶら／＼病氣に罹つて床についた限りであつたから、お瀧は未だ幼かつた時から今日まで五六年此の方長い年月の間、随分よく母親に傳いて看病に力めて來たのだが母親の患は時に小康を保つことがあつても、決して癒りはしなかつた。

今年もだん／＼寒くなるにつれて、母親の状態は又悪くなつて、呼吸するのもぜい／＼と苦しうであつた。子供心にもこれを見かねて、或る時村人の話すのを聞いたことがあるがお瀧は

「病人に威勢をつけるには鯉の生血が一等だ。」といふのを思ひ出して鯉が欲しいと思つた。

村人の家には何處の家にも、池や沼に鯉を養殖して置き、冬が近づいて雪の降る前にはその鯉を皆銘々の家の生簀に圍つて生かし、必要に応じて網で抄ひ上げて食用に供するといふのが村の普通の家のやり方だつた。

けれども貧しいお瀧の家では、鯉を養ふ場所もなければ、貯へる設備も持たなかつた。否、鯉の稚魚を買入ることすらも出来なかつたから僅か一尾の鯉も思ふ儘にならなかつた。

村人の誰彼に事情を話して頼んだら、僅か一匹の鯉位貰へぬこともなかつたであらうが、普段から何かと村人の世話になつてゐながら、又こんなことを願ふのが何だかお瀧にとつて非常に厚顔しく感じられて、とても出来なかつたから、信濃川へ行つて見ようと思つた。

冬の寒い時には、川の深い淵をなしてゐる處の低い窪溜りに、じつとして動かすにゐる鯉を丹念に捜したら見つけられないこともあるまい。と、思つたからである。

母親が眠つた隙を見て、お瀧は或日の午後村外れの川の邊へ出かけて行つた。

二三日前に降つた初雪がまだ川の土堤の枯柴の上に點々と残つてゐたが、空は碧かつた。

幼いお瀧は深い考へもなく、唯鯉欲しさの一念で川へ出掛けて行つたが、それは少し無暴な振舞であつた。

事實、お瀧が考へた様に、冬になると、川に棲んでゐる魚は鯉に限らずすべて、上層の冷たい水を避けて低い處へと求めて深い淵の底にじつと身動きもしないでゐることは普通で、別に珍しいことでも何でもなかつたけれども、さういふ處は最も水の深い凹所であるから、さうしてゐる魚は屈強の男でも迎も捕へられないのが普通であるし、人の目に觸れる様な場所にそんな箇所がさうさうさらにあるものでもない事を幼稚なお瀧には考へ及ぶことが出来ず、只管鯉を求めて川縁を歩き続けた。冷たい水に踝を浸したり、斑雪を踏んだりして暫く捜し廻つたが、それは徒勞に歸した。疲れてがっかりしたのと、折角の自分の願ひの空しかつたのでお瀧は、

「仕方がない。誰かによく譯を話して貰ふことにしようかしら。」と呟きながら、とぼ／＼ともと來た道を村へ戻つて來ると、不意に、

「お瀧さん!! お瀧さん!!」と誰かゞ呼んだ様な氣がした。はつとして耳を澄したが、聞えるものは川瀬の音だけだ。そして歩き出さうとすると又聞えて來た。

「お瀧さん、お瀧さん!!」と改めて呼ぶ聲に我が耳を疑ひながらもお瀧が四邊を見廻したが、矢張り誰もゐない。すると今度は、

「此處です。此處ですよ。」と言ふ。聲を頼りに視線を移すと、土堤下の川の淺瀬の大石の蔭からひ

つこり頭を覗かせてゐる見馴れない、躰の迎も小さい異様な人の姿がやつと眼に映つた。

「あつ!」と言つたお瀧の頭に直ぐ浮んだのは、折に觸れては母親が物語つてくれた、現在此の部落に祀られてゐる鎮守様のことであつた。

此の村の鎮守の祭神といふのは、遠く神代の時代に天孫に扈從して日本國に高天ヶ原から天降られた神様の一人で、此の地方を開拓して下さつた恩人であらせられるといふことだ。此の神様の特徴は非常にお体の小さい方であるといふことで、常に萱の莖の舟に召し、蓑蟲の殻を着て居られ今も猶、極く稀にお姿をお現しになつて恩恵を垂れさせられるといふことは村の故老も言つてゐる——といふことだつた。

お瀧は今自分の目の前の小人こそ、屹度その方に相違あるまいと確信したので、敬虔の念を全身に漲らせて、恭々しく此の小人に對して頭を垂れた。

すると、その小人は、

「いや／＼、そんなにしなくともよい。——あなたは鯉が欲しかつたんだね。若しさうだつたら、わしが上げよう。ほら今此處に五六匹持つてゐるから、さあ持つて行つてお母さんに上げなさい。親孝行は出来る丈親の生きてゐる中にするんだね。殊にああなたのお母さんの壽命はあと幾らもない

んだからね……。」と言つた。

「えつ！ぢやお母さんはもう直ぐ——。」今迄恭々しく頭を低く垂れてゐたお瀧は吃驚して顔を上げると、かう言つて訊ねた。

「え、さうです。これが神様のお定めになつたお母さんの壽命です。精々盡して上げなさい。では——。」と言つたかと思ふと、小人はひよいと大石の蔭に隠れてしまつた。

お瀧は足許に置かれた數尾の鯉を手にか路に勇んでついた。そして直ぐ鯉を料理して食べさせた貧乏であるが故に、病人でありながらも、長い間滋味に餓えてはゐたが、娘に憚つてそれと口に出しかねて居た母親は鯉を食べて此の上もなく満足さうだつた。

「何處で捕つたの？戴いたのかえ。とても美味いねえ。」といふ母親の言葉にお瀧はつまらぬ隠し立てして要らぬ心配をさせるのも体のためにならぬと思つたので、今日の出来事を全部残りなく——壽命が幾許もないといふ事以外は——話して聴かせた。

すると母親は吃驚して急に床の上に坐り直すと、

「何つ！鎮守様に戴いたんだつて？本當かい？お前何か失禮なことはなかつたらうねえ。此の村の大恩人でいらつしやるが、現在ではもう滅多にあの方の——さう何十年とか百年とかに一回もお姿

をお現しになることがあつたりなかつたりだから——お姿を拜むなんて出来やしないのに。お前は何といふ仕合せ者なんだらうねえ。此の村の随分年寄つた人でも拜んだことのある人なんかゐないのに——あ、何だかわたしは氣分が清々して來たやうな氣がする。」かう言つた母親は鯉の生血も押戴いて飲んで無上に喜んだ。

急に顔は血色がよくなり、母親の健康は一食事毎に、鯉を食べる度に増進恢復して行き、數年來の痼疾も癒るかに見えた。

あゝ然し、これは燭火の最後の瞬間に於ける輝きにしか過ぎないのだつた。消えんとする刹那の光輝を最後に、それから四五日して母親はぼつくり死んでしまつた。

お瀧の悲歎は村人の見る目にも痛々しかつた。親切な村人の手で、母の屍は萬事滞りなく野邊の葬りを済まして貰つたが、母に別れたお瀧の哀傷は何によつても癒すことが出来なかつた。村人の慰めの言葉も激勵も何の甲斐もなく明暮を泣いて過した。

數日の後、泣いて／＼涙も涸れ果てたお瀧は自らを慰め元氣づけるために、もう一度「鎮守の神である。」と母が教へた、鯉を呉れたあの小人に會ひたくなつた。

矢張寒い日であつた。彼女は寒さを防ぐ何の用意もせず、ぶらりと家を立出でた。足が自然と

向く儘に、ふら／＼と村の外れまでやつて来て信濃川の畔に出て見た。そして雪の二三寸積つた土堤の枯柴の上を殆ど無意識に辿つて、先日あの場所と思はれる邊迄来た。ちつと川の面を凝視めて耳を澄まして見た。今にも何處からか、

「お瀧さん！」とあの懐しい聲が聞えて來さうな氣がした。然し幾ら耳を澄ましても聞えて來るのは川の水音だけであつた。

鎮守の神様であるあの小人に會つて自分の心の痛手を醫やして貰ひたいばかりに、お瀧は不知識の裡に土堤を下りて川原に立つた。そして川上の方へ向つて、嘗ての日鎮守の神の小人が隠れて、立去つたと思はれる方に行かうとして、淺瀬を涉り、洲を越えてだん／＼歩を移して行つた。

乍ち晴れ乍ち荒天となる定めなき越後の冬空は何時の間にか暗くなつて、風さへ出て來た。此の天氣模様の急變も、只管、鎮守の神様との邂逅を庶幾つて他を顧る心の餘裕を失つてゐるお瀧には意識することが出來なかつた。

流水をそれかと見誤つたり、今にも河原荑菜の叢の蔭からひよつこり姿を現しはしないかとの期待と緊張に我を忘れて彷徨を續けて來たお瀧も、漸く寒氣が犇々と身に迫り、手足の爪先に痺れを感じて、ふと我に返つた時は、肩先や髪の毛は粉を浴びた様になつてゐた。始めて空を見上げて急

變した天候を知つて四邊を見廻すと、自分の村から遙か上流に當る場所で、未だ一度も來たことのない處であることに氣がついて、一寸心細くなつて來たが、それでも未だ、その邊からひよつこり、「お瀧さん、お瀧さん!!」と懐しく呼びかけ乍ら神様がお姿を現しはしまいかと思つて、矢張踵を返す氣は毛頭起らなかつた。

けれども積雪は随分深くなつてゐる。寒い風が川下の方から雪を猛烈に吹きつけて來る。ともすると前に倒れさうになるので、お瀧は深い雪を分けて、恰も風に押されるかの様に更に數歩を進めては見た。けれども身には寒さを防ぐものを何一つつけてゐなかつたし、素足に突つかけた藁の雪靴も水に浸つたり石の上を歩いたりしたので踵の方がばさ／＼に切れかゝつてゐる。

それのみか手足の自由が十分でない。寒さのために痺痺しかけて來たのだつた。

ふとお瀧の腦裡を家の狀景が掠めた。

縷々と揺らぐ線香の煙、音もなく油を吸つてゐる常明燈の心、佛壇の中の眞新しい白木の位牌などが一瞬浮かぶと、お瀧は目前の吹雪と變つた天候を衝いて果して無事に家に戻ることが出来るだらうかと思つて暗然とした。今更自分の輕卒を後悔しても見た。けれども仕方がない。引返すより外に方法がない。

かう思ふと同時に急いで川下の方へ引返さうとしたけれども、それは容易なことではなかつた。猛烈な向ひ風は容赦もなく、目口鼻と所嫌はず雪を吹きつけるので、呼吸も出来ない。それにもう全く体が寒さのために自由にならない。それに加へて此の數日來、母の死を嘆き悲しんで碌に食を攝つてゐなかつたので栄養も十分でなく、唯々泣きしほたれて過した彼女の身体には潑刺たる少女の精氣が失はれてしまつてゐた。剩へ始めての場所では土地が不案内なので、どちらが村里に近いかも分らず、河原を彷徨ふ以外になす術を知らなかつた。身に迫る危険を漸くにして覺つたお瀧は、彼女が知る限りの神佛の名を吹雪の中に絶叫して救ひを求めはじめたが、彼女の此の氣の狂つた様な努力と叫喚も、物凄い吹雪の唸りに掻き消されて、斷れぬに聞えるに過ぎなかつた。身も心も疲労困憊の極に達して、お瀧はとうとう吹雪の帷の中にぼつたり倒れて、漸死の足掻きを二度三度續けたが、遂に再び起上ることが出来なかつた。

吹雪は情も容赦もなく、お瀧の上にもどんく雪を重ねて行つた。夢中に神の名を呼び續けて、無意識に積る顔の上の雪を拂ひ落し掻きのけてゐたお瀧の空しい手の働きもその中に動きが止まつてしまつた。

村の人々は長い間、此の孤兒となつたお瀧の失踪について噂しあつた。村人の中には川の方へ行

くお瀧の姿を見たものも二三あつて、神様の話と結びつけて話し合つたが、人の噂も七十五日、何時しかお瀧のことは人々から忘れ去られようとする頃冬が終つた。

思ひ出した様に川の附近についてお瀧を搜索して見ようと言ひ出すものがあつて、捜したが雪が消えてもお瀧の死体は現はれないでしまつた。従つてお瀧の失踪に就いて真相を知るものは一人もなかつたけれども、此の年の春先の頃から村人は雪の中に蠢く異様な虫を發見して驚いた。これまでに見たこともない白い蚊にも似た又蛾の様な蝶の様な虫であつた。

そして何時の頃から誰が言ふともなく、

「これがお瀧の魂だ。」と言ひはじめたのである。

(附) これは北海道地方等にも傳はる、アイヌ傳説中のクロボツクル人傳説の系統に屬するものであらう。少彦名命に關する傳説が内地に於いても方々に傳へられてゐるが、かうしたものは何れにせよ、古代、大和民族以前の土地開拓者に對する後代の住民の感謝によつて起つたものと考へられるが、これを雪蛆と關係づけたところに佛敎的影響を見ることが出来はしまいか。そして雪蛆に關しては、生物學的な解明を俟たなければならぬものと思ふ。事實、雪の中で過した少年時代、融雪期に於ける晴天に、戸外で湯を醫すべく、雪を糺まうとして此の虫を發見して、驚いたり、地上に水溜りと化した雪の溶けた中に一二寸位の白い蚯蚓様のもつと細い虫を見出しては、心秘かに、成程、大人が雪を食ふなといつて禁じてゐるのは、

蟻の様な虫のゐるのを知らずに口に入れ、腹中でこんな虫に化すのを慮つてのことだつたのだ、など、聞
り思つたり、或は友と語つたりして惧れたものであつた。
そして今日に至るまで未だに雪蛆の何たるかを解しもしぬ辭に、これに絡まる話だけは忘れずにゐるのだ

消えた娘

或る寒い大晦日の夕暮時のことであつた。ひどい雪の中を一人の貧しさうな娘が碌に防寒具もつ
けないで、藁で編んだ雪靴を履いて港の町(新潟市)を歩いて居た。

未だやつと十三四のその娘は汚ない前掛の中に二十個許りの燐寸とほんの少しばかりの附木(燐
寸の火などを薪に移す前に用ゐるもので、木を薄片に削いで乾燥させその一端に硫黄を塗つたも
の)の束を入れ、一個だけ燐寸を手にもつて、

「燐寸の御用はありませんか。附木は如何でせう。」とかう呼びながら歩いてゐた。

彼女は朝から今迄一日中斯う呼びながら、町から町へ、小路から小路へと彷徨ひながら、賣り歩
いてゐるのであつたが、誰一人として此の娘の手から、彼女の商品を購はうとするものはなかつた
し、貧しさうではあるが、乞食でもなさうな此の娘に一錢だつて惠まうとする人もなかつた。

それでも娘は根氣よく、なほもとぼくと、雪の中を

「燐寸！附木！」と呼んで歩き續けた。

髪の毛は何時の間にか眞白に雪におほはれた。林檎の様に赤い頬も、血の吹き出さうな唇も何時
か紫色になつて來た。

家々の臺所の窓からは年越しの御馳走の美味い香が戶外の空氣に漂ひはじめ、明るい灯の色が
華かに窓外の雪を染めてゐる。

朝から一粒の御飯も口にしないで、歩き通しに歩き續けた娘の体は、餓と疲労と寒さのために今
にも倒れてしまひさうな氣がした。

さういふ娘にとつて此の燈火、此の御馳走の香は迎も堪らない魅力だつた。

家路へ急ぐ人々や忙しく歩いて行く用ありさうな人々の群を離れた娘は、やがてとある家と家と
の板壁の間を見つけて佇んだ。そして今迄むき出しに出してゐた脛を、端折つてゐた襦袢着物の
裾を下して、それで凍え切つた脚を包んだ。けれども骨まで沁み透つた寒さはもう觸つても感じさ
へない程になつてゐた。さうして考へて見るまでもなく、娘は朝から一錢のお金も儲けてゐなかつ
た。否燐寸一個さへ賣ることが出来なかつたのだ。だからどんなに辛くても家へ歸ることは出来な

かつた。家へ歸つて見たとて、迎へて來れる人がある譯ぢやなし、腹を満す一杯の冷飯だつてある譯でないからであつた。

けれども、娘の兩手は寒さのために最早感覺さへ失つて、もう凍える許りになつてゐたのだが、今迄休を動かし續けて來たお蔭で、でも未だ凍え切つてだけはしまはずにゐるに過ぎない状態であつた。あまりの寒さ冷たさ辛さに堪へ切れなくなつた娘は、とうとう商賣物の燐寸に手をつけようと思つた。

感覺もない様な指先を燐寸の火で暖めて見ようと思ひついたので、震へる指先で箱の中から棒を一本やつとの思ひで撮み出すと、しゆうつと擦つた。小さい焰の上に凍え切つた片手を翳して指先を暖めた。娘にとつて此の一本の燐寸の軸木の燃える暖かさは、大きな圍爐裏の中で燃え盛る柶火程にも感じられたので、今度はもう片方の手もついでに暖めようと思つて、二本目の軸に火をつけた。やつと兩方の指先に感じが鈍いながらもついて、恰も家の炬燵にぬくぬくと暖まつてゐるかの様に思はれて、快かつた。

三本目の軸に火をつけて、今度はそれを兩方の手で圍んで暖まつた。さうすると暖氣が腕の方にまですうつと昇つて來て何ともいひない快さがぞくぞくと感じられた。娘は壁板に寄りかゝつて兩手で軸木の焰を圍んで、うつとりと夢見る様な眼射で、大きな鏡餅を重ねた立派な、大火鉢に一杯に炭火を盛つた暖い座敷で、お正月の御馳走がうんと自分の前に並べられてゐる状態を想像して見た。と不意に、お供餅の上に橙と並んでゐた蝦魚が急に、その長い鬚を動かしたかと思ふと、突如びんと娘の方へ跳ねた——と思つた途端に燐寸の火が消えて、黒い軸の燃え殻が彼の女の顔に飛んだのだつた。

そして娘の美しい空想は一遍に吹飛んで、もとの様な冷え々とした家と家との間の板壁だけになつてしまつた。

哀れにも、此の娘は明らかに死の直前のあの眩覺に襲はれ始めてゐるのであつた。朝からの疲れと餓とそして寒さのために弱り果てた神経が凍死直前の幻影を追つてゐるので、もう理性はとつくと失はれてしまつてゐた。娘は只管、美しい幻を求めて止まなかつたので、更に四本目の燐寸が音たて、擦られた。——今度は大きな羽子板を抱へて、娘自身は長い袖のついた美しい振袖を着て門松を背に立つてゐた。ふと見ると向ふに、遂、昨年亡くなつた筈の、娘がたつた一人の最後の身縁であつたあの慈愛深かつたお祖母さんがこゝ娘を手招きして笑つてゐた——と娘には見えたあんなにも生前娘を可愛がつて呉れたお祖母さん。あのお祖母さんの生きてゐる中は娘は何處の誰

よりも幸福だったのに。娘がお祖母さんの顔を見て、甘い感傷に浸つてゐると、急に火が消えさうになつたのに気がついた。娘は此の幻を——幻とは思つてゐなかつたのだが——もつと續けたい、懐しいお祖母さんの傍へ行つて見たい、お話もしたい。けれども火が消えたら此のお祖母さんも見えなくなつてしまひはしないかと大急ぎで次から次へと箱から軸木を出して火を移して行つた。前掛の中の燐寸にも火をつけた。箱ごと火をつけた。附木も一緒に火に入れた。火はぼうつと勢よく燃え上つた。

火勢が盛んになると共に、お祖母さんの姿は急に大きくなつて、それと共に、恰も映畫の大映しの様になつたと娘の前に近づいて来て、「千代ちゃん！」と呼んだ。

娘は懐しいお祖母さんに久振りに自分の名を呼ばれたので、それを聞くと、

「あつ！お祖母さん。」と言つて縋りつく様に「あの、わたしも一緒に連れてつて頂戴！、此の火の消えない中にね。今お祖母さん何處にいらつしやる？」と言ひながら、娘はあるだけの燐寸も附木も皆一時に火に燻べたので、四邊は晝間の様に、ばあつと明るくなつた。お祖母さんの姿は一層大きくなつたかと思ふと、軽々と娘を抱き上げた。そして如何にもいとしさうに頬すりした。

と、火が消えてしまつた。煙が青くゆらゆらと立上ると一緒に、孫娘お千代をしつかりと抱いた

お祖母さんはすうつと消えてしまつた。

翌正月元旦の朝、町の人々は、一人の身なり賤しい貧しさうな娘が家の壁板の間に死んでゐるのを發見した。娘は蒼白い頬に微笑さへ浮べて凍死してゐるのであつた。

たつた一晩で年が新たまつた今朝、去年の雪に凍えて死んだ娘の骸の上にこれは又何と晴々しい新年の陽光が燦々と照り輝いてゐた。娘は未だ手に確乎りと燐寸を握つたまゝ横たはつてゐた。

「これで屹度暖まるつもりだつたんですよ。」と、残りの燐寸と燐寸の燃え屑を見た女達は言つて氣の毒がつた。

けれども不幸な娘お千代が死際にどんな幸福な思ひに満されて死んで行つたかについて、知つてゐるものは一人もなかつた。

(附) 傳説としては最も新しいものに屬する一つらしい。しかし、それは此の傳説が相當、新しい要素「燐寸」などいふものを含んでゐることや五港の一である開港場新潟(實際は新潟でなく、柏崎とか、直江津とか、寺泊とか言つた港町に發生したものであつたかも知れぬが)を背景としてゐる爲めに、新味を感じられるのかも知れない。そして、かへつて、或は漸次文化的變遷を蒙つて來てゐる古い話であるのかも知れない。がそれは兎に角、此の傳説の中から越後の年越や正月の様子考へられるのは別の意味から面白いと思ふ。

雪

女 (二)

此の話は雪の越後に於いても特に雪の多くて遠く都會地を離れた邊鄙な山村地方に相當廣く傳へられてゐるもので、同一素材から出たと思はれる話が雑多な形式で語られてゐる「雪女」傳説中の代表的なものである。

或冬の夕暮近い時であつた。

低く垂れ下つた灰色の空からは、先刻來ひつきりなしに雪が降つてゐたが、夕方近くから加はつて來た山風に、漸く勢を加へて物凄しい吹雪と變つて唸りを立て、吹き荒れてゐた。

と、今時分何處へ行くのであらう。此の吹雪を衝いて餘程重大な用事でもあるのか、一人の旅人が頻りに歩いてゐた。一步一步、ともすれば吹雪のために持つて行かんでもしやしまいかと思はれる程危つかしい歩調である。目口鼻處嫌はず顔中吹きつける吹雪には眼も眩み、降り積む雪には足許を擲はれて、よろめきながら人痕絶えた道を一心に歩を運んでゐた。日も暮れかゝつて來た上に吹雪の日は日没時間と關係なしに常に空は暗いので漸く墨の色が濃く加へられた。

旅人は迫る夕闇と吹雪のために殆ど一尺先さへも見透せない中を、匍ふ様にしてやつと一つの村

外れまで辿りついた。

「逆も目的地まで行きつくことは覺束ない。」と思つたのか、旅人は、村中と雖も吹雪の黄昏時通行する人もなく訊ねることが出来ないの、濃い霧の向ふに物を見る時のやうにして、暫時物色し思案してゐるらしかつたが、やがて村内でも比較的大きく見える一構の家かまの入口に立つて、緊く閉とぎされた戸を、ほとほとと叩いて案内を乞ふのであつた。

案内を乞ふ旅人の聲に應じて入口に現れたのは、見るからに好人物らしい人品賤いやしからぬ老人であつた。老人は旅人の請を快く入れて、屋内に導くのであつた。

今迄の吹雪の雪道での疲勞も、凍え切つた手足も、旅人は老人に請ぜられて、氣持よく燃える爐の傍に坐ると蘇生の思ひがした。それから老人は湯氣の立つ粥を旅人が満腹するまで薦めたので悉皆元氣を恢復した。

食後老人と爐傍で茶を啜りながら何かと話した。雪の話、今年の作の出來工合、それから旅人の自己紹介など話題はなか／＼盡きなかつた、けれども、旅人が先程から不審でならなかつたことは相當村でも物持らしい家にも似合はず、此の家に家族の眇いことであつた。否眇いと言ふよりも無人と言つた方が寧ろ適切であつたかも知れない。さういへば最初旅人が此の家に案内を乞うてから

食事を運んだのも、茶の支度をしたのも、薪を補給するのも總べて此の老人一人でやり通してゐたではないか。

旅人の氣持を察したのか、老人の話も自然その事に觸れて來た。

燃え上る爐の火を火箸で弄りながら、ぼつり／＼と老人の語るところによると斯うだつた。

此の家は老人とそれから今日は生憎風邪の氣味で奥に臥床中の老人の妻、それに夫婦の間に二人ある兄妹の四人暮しである。けれども長男は數年前から他に出て修業中なので現在家にゐるのは夫婦と娘のたつた三人だけの暮しである。娘といふのは先刻食事の際、此の部屋の襖一重向ふまで食事を運んで來たらしい氣配のしたつたのがそれださうで今年十四になつた。——と言ふことであつた。

「お子さんがお二人限りとは、此の大屋根では嘸ぞお淋しいことで……」と旅人のお世辭にも老人は乗らず、何故か家の事に關しては言葉が重く餘り多くを語ることを好まぬらしく見えた。

話も其處で一吋接穂を失つた形であつたし、旅人は老人の言ふ儘に、事實疲れてもゐたので寢むことにした。

一間に案内されて見ると、なか／＼立派な部室で調度なども贅澤であつた。先刻の話の娘が用意

したものが、上等の夜具がちやんともう敷かれてあつた。旅人は悠くり手足をのばして間もなく快い眠りに入つた。

どれ程の時間睡つたことであらう。旅人はふと目が醒めた。外は未だ吹雪が猛り狂つてゐるらしく物凄い立木の鳴る音が聞える。寢返りをうつた途端、襟元から冷たい風が込み入つたので、思はず肩口を内側から抑へつけるようにして旅人は急に手足を竦めた。と……彼はさら／＼、さら、と言ふ様な物音を耳にした。最初は雪が窓紙に觸れる音かと思つたが、さうでもない。「空耳かな」と疑つた瞬間又聞えた。着物でも襖か何かに觸れる様な——きぬすれにも似た——物音が暫く間を置いて規則的に聞えて來る。

「はてな？」と耳を傾ると物音はどうも彼の寢てゐる部屋の入口の邊らしい。

何故か知らないが、はつとして思はず旅人の胸の動悸が早くなつた。

此の時旅人の胸に浮んだのは、遂二三日前に一寸休憩した茶店で聞いた怪談だつた。

昔、此の附近一帯に聞えた朝日とか夕日とかいふ長者があつた。此の長者の邸には鄙には稀れな美しい小間使の女が召使はれてゐた。長者は此の美しい小間使を此の上もなく寵愛してゐた。自分の意志ではなかつたにもせよ、長者の愛を獨占した小間使の身の上は決して幸福なものではなかつ

た。長者の妻には悪まれ、朋輩達には妬まれた。が、特に顔の醜かつた様に心も亦素直でない長者の妻には、何かにつけて虐められ苦しめられ通しだつたが、長者の胤を宿すに至つて愈々長者の妻の憎悪は非道くなつて、

「お腹の子供は、實は村の若者との不義の報いであるのを、長者を欺いてゐるのだ。」とあらぬ濡衣を着せて讒言したので、長者は大變立腹し、雪の降り頻る冬の最中に、素裸の儘手足を嚴重に縛し、村を流れる川に架けた橋桁から倒に吊り下げ、弄り殺しに殺してしまつた。召使はもとく／＼長者の軒下に捨兒されてゐたのを拾ひ取つて育てられた女だつたので其の恩義もあり、心に進まぬものを主人の權威で挑まれて、これに屈従させられてゐたのだ。今更かうした目に逢はせられたからと言つて廣い世間に一人の身縁もなく、巧みに仕組んだ長者の妻が奸計を遂に冤罪と言ひ解く術もなく無實の罪に非業の死を遂げてしまつたのである。

それ以來と言ふもの此の召使女の靈は毎年冬になると此の界限に出沒して、男といふ男は誑かし盡さうとしてゐる——といふ話だつた。

斯う考へた時旅人は急に言ひよのない恐怖の念に襲はれて、蒲團にもぐつて見たが迎も堪らすがばつと寢床を蹴つて跳起きた。

何か背後から襲ひかゝりはしまいかと思ふと居ても立つても居られない衝動に驅られた旅人は、我れ知らず部屋の入りの襖目掛けて駈けて行つた。

襖を蹴破らんばかりの勢で先程から怪しく思つてゐたところを開けようとする、彼の手が襖にかゝるか、かゝらぬに、襖は向ふ側から先にさつと開けられて、怪しや闇の中にも明瞭と浮かび上つたのは、眉目麗しい十三四とも思はれる蕾の花の様な女の姿であつた。眞白な雪をも欺く顔色、闇にも定かに見て取れたのは寒中にもかゝらず肌襦袢一枚の髪ふり亂した立姿だつた。

女は旅人を認めると、白い齒を見せて凄艶にやりと笑つた。

娘の此の有様を見るや否や、旅人は「あつ」叫んだまゝ後に倒れてしまつた。

二三日後晴天の日が来た。

朝雪の道を踏みに村外れまで出掛けた一人が村の入口近くに、体を全く雪の中に没したまゝ、二三日前に死んだらしい見知らぬ旅人の屍体を發見した。

屍体の處理に集つた村人達は

「又、何處やらの人が雪女にやられたね。」と秘かに私語しあつた。

(附) 俳句の季題にまである「雪女郎」といふものは、色々變つた傳説もあるが、本來の「雪の精」が具象化し

たものよりも、他の薄命の佳人とか乃至は逆境や不遇に若き命を断たれたり、失つたりした女に假託して出来たものが多い様である。そして、それには雪の惨禍に對する恐怖と佛教的影響による善因果、因果應報といふ様な思想が働いてゐる様に思はれる。それでは「雪女郎」と「雪女」はどう違ふかと言ふと、概ね人間に姿を見せてゐる時間の短いと長いによるもの、様である。男性と夫婦生活を數年間に涉つて子までなすなどといふのは「一女」に屬し、本物語や「茂助地藏」などの如きものは「一男」と見做してよい様に思つてゐる。

茂助地藏

如何に人智が限りないものでも自然現象を残らず征服するのは容易なことでない。従つて昭和の聖代に於いても、雪の猛威の前には人間も屈服せざるを得ないことが屢々あるのも止むを得ないことと言はなければならぬ。その爲めに無人の境の如くなつてゐる部分が雪の越後の國には必ずしも稀でない。

これは奥羽境の岩船にある、さうした場所に纏る傳説である。

すうつと山深く入つた森林の奥、一寸そこで空地をなして密林が切れた處に、凡そこんな無人境にも等しい場所に——と人に妙な感じを起させる程、土地に不似合な位立派な石のお地藏様が建て

られてゐる。

以下、此の地藏尊建立に關する故老の語る物悲しい一挿話を掲げる。

今を去ること百數十年前（明和頃か）今年も亦冬ともなれば、日本海の水蒸氣は西比利亞の寒風に雪と化し、日本海沿岸の陸地に襲來して來る。寒い／＼冬は來る日も過ぎる日も吹雪だけであつた。

或寒い吹雪の日、顔も削り取られるかと思ふ程激しい吹雪を眉深に被つた笠で避けながら、積雪にふらつく足許を手にした杖を唯一の頼りにして、踏みしめ／＼歩いてゐる旅の人らしい姿があつた。

所は羽越國境、念珠ヶ關、朔風に乗る吹雪は殆ど面を向けることも出来ない。足許のみ見詰めて吹雪を笠の庇で避け／＼歩いてゐる旅人は前方になど注意の行届かう筈がない。

であるから突然前方に現はれた人の姿に氣のつく道理はない。まして眞白に煙る雪の帷の中に蠢めく白衣の人があらうなど、は夢にも知るよしがなかつた。

けれども少しでも心に向ける人があつたとしたら、怪しまない譯には行かない風態であつた。白衣をふはりと羽織る様にした人の姿は明かに女であつた。丈なす緑の髪は吹雪に映えて愈々漆黒で

風で後へ靡いてゐる。女は身に防寒具らしいものは一つもつけてゐなかつたが、吹雪の一片さへも女の体に附着しないのを見ても、確かにこれ一つだけでも十分不思議だつた。それであるのに女の身邊は、恰も雪の渦巻の中心にゐる——雪は女の体を中心にして四方八方へ飛散してゐるみたいに見える——様に思はれるのに雪は少しも女に附着しないのだつた。

女の腰から下が特に猛烈極まる雪煙に包まれてゐるので、女が何を履いてゐるやら乃至は裸足やら皆目見當はつかなかつた。女の動きに連れて漸次吹雪も旅人の方へ移動しつゝあつた。

酷い吹雪が襲つて來るので、今迄重い足を漸くに運び續けてゐた旅人も、暫時呼吸も出來ないで立止まつてゐたが、なか／＼吹雪が通過しないので、懶氣に僅かばかり頭を上げて吹雪の方向を見定めようとした。すると、此の時はおも旅人と殆ど衝突しさうにまで接近して來てゐた怪しの女は突然、

「何處へ行かれますか？」と訊ねた。

旅人は、ぎよつとしたが、激しい吹雪に、長く呼吸を止めてゐたので顔俯向けて息を整へながら

「——うむ。温海……温海から酒田へ——酒田へ行きまするでな。」と答へた。

旅人の答を聞いた女は、

「えつ？、それは大變な遠方へ、又。もう直ぐ日も暮れますに……。若し如何です。一晩わたしの家にお泊りなされては。」と言つた。

女を仰ぐ餘裕も與へられない程吹き捲いてゐた吹雪も幾分か静まつたやうだ。

顔を上げた旅人は女の風態をしげ／＼と見ながら、おど／＼したやうな調子で、

「えい。さうお願ひ出來ますならば誠に有難いことですが——。」と言葉を濁した。何故ならば、此の邊には炭焼小屋だつて一軒もないと前の宿で聞いて來たからだつた。

旅人の言葉を聞くと、白衣の女は、自分の正体に就いては、旅人に一言も怪しみ審かる暇も與へずに、踵を返して案内し出した。

雪は漸くちらりほらりになつて、風は全く収まつた。道らしい道もついてゐない雪の中を物凄いな速さで歩き出した。旅人は息せき切つてやつとついて行つた。

旅人が氣がつくと、目の前に見窄しい小屋が見えた。旅人はやつと息をついて、

「何だか怪し氣の女だと思つたがさうでもなかつたんだ。小屋が一軒もないなど、言つたのは前の宿場で、矢張り客を引止める口實だつたんだ。」と思つたので女に導かれて、地獄で佛に逢つた様な思ひで、小屋の中に這入つて行つた。

小屋の中では、爐には暖い火が燃えて居たし、自在鍵の鐵瓶は湯氣を吹いて蓋を鳴らしてゐた。此の旅人は女の小屋で本當に手厚いもてなしを受け、温い寢床に憩ふ事が出来た。

數日後、偶然此の念珠ヶ關にやつて来た樵夫の手で凍死者の死骸が雪の中から掘り出された。勝木の方から来た人で運び出された凍死者を見知つてゐる人があつた。

果然、凍死したのは温海を経て酒田へ行くと言つた旅人であつた。

運んで來られた屍体を前にした村人達は、此の旅人の死因について種々の噂さもし、推測をしたが、結局

「『雪女郎』にやられた。」のであらうと云ふ意見に歸着したので、今後も吹雪の日に、斯うした災難に遭遇しないやうに、一人倒れると淋しがつて友を呼ぶのが遭難して死んだ人の魂に共通したものだからと、お互が銘々に十分の戒心と要心を怠らなかつた。けれども、止むことを得ないで通ることがあつても——譬へそれがどんなに猛烈な荒れの日だとしても——其の後は不思議と數年間一人の奇禍に逢ふものも出なかつたので、村人は

「迷へる遭難者の靈は、生きてゐる人と呼んで頻りに自分と同じ目に逢はせて殺すものなのに、一人もその後命を失つたといふものはないのは、屹度旅人の靈が反つて生きてゐる人に加護を垂れてゐるからであらう。有難いことだ。是非あの氣の毒な旅人の菩提を弔つて靈を慰めてやらなければならぬ。」と言ひ出して、旅人が、長々と横たはつて、平和な顔を雪に晒してゐた場所に、石の地藏尊一基を刻んで建立し、自ら最後の犠牲となつて、長く村人の上を守護して呉れる旅人の靈に對して恩恵を感謝した。

旅人の素性も名も詳かでないが、しかし何時の頃からか、何が故にか、此の地藏様は「茂助地藏」と呼ばれて、其の後百七八年を経た今日も猶風雪に曝されて僅かに残つてゐるといふ。

石になつた獵師

これはもう随分と古い話らしい。恐らく數百年を経たものかと思はれる。

越後と岩代の國境に守門山と言ふ山がある。可なりの高山で、岩代の只見川も此の山から源を發してゐるし、俗に越後一の高山だと言はれてゐて、十月の末の頃にはもう頂上は雪をいたゞき、翌年の六月頃にならなければ雪が消えないと言ふ山である。織物で名高い栃尾の背後に當つてゐるが、麓から巔まで約七八里あり、山頂には草木と言ふものが更にならない砂山で、池もあるし、守門明神が祀られてゐる。兎に角最近では登山者が非常に多くなつたが、昔から色々多くの傳説に富む山

である。

昔、守門山のすうと更に奥の方に寄つた、丁度只見川も最も上流の山の麓に、越後の獵師が住んでゐた。

舊の正月も二十日が過ぎたので、彼は丈餘の雪を標で踏分けながら、獲物を求めて守門山に分け入つた。

獵師は、地圖も磁石も持つてゐる譯で勿論ないが、多年の経験と、経験から來る感で、ぐんぐん足に任せて山に踏込んで行つた。そして常人からは殆ど考へられない様なことではあつたが、白皚々たる雪の中で、只管鳥や獸を求めて、數日を過して來るのが、かうした職業の人達には普通のことであつた。此の獵師は今迄に何回となく、此の山に這入つてゐるのであるから、少しの不安も危惧もなしに、其の日は何時もより少し範圍を擴げて、兎や山鳥を捜して歩いた。

其の中に空腹を感じて來たし、又疲れも覺えたので、豫め兼ねて今夜の泊り場所にするこの出來さうな危険のない處を早く索めて置いて、其處で一服しようと、頻りに四邊を物色してゐるとその中にふと向ふの方に——さして遠くもない處に一軒の山小屋を發見した。

「あんな處に——と、今迄に何回となく來たが遂ぞ見掛けない小屋なので一寸變にも思つたが、

野宿に優ること數等なことは言ふまでもないので、だんぐ歩み寄つて行つて見た。

誰も住んでゐる人なぞあるまいと、無遠慮に這入らうとして、入口の戸を突如がりりと開けた。

するとどうだらう。無人と思つた小屋に人が住んでゐた。しかも、白髪の老婆がたつた一人で、圍爐裏を前にして坐つてゐるではないか。獵師は吃驚して一寸言葉も出なかつた。

「冬の此の最中に、こんな山の中に、然もこんな婆さんがたつた一人で住んでゐるなんて——。」と忽ち懷疑の念が沸いた。が、一人で守門の奥山に踏込んで來る位の獵師渡世の男だ。根が豪膽に生れついでゐる。

奇怪には感じたものゝ、兎に角火を作る造作もなし、雪に降り埋められる心配も此處なら全くないので、躊躇なく這入つて行つた。

來意を手短かに語つて、宿を借りたいと老婆に頼んだ。老婆は顔にも年にも似合はぬ。優しいそして元氣な聲で、案外快く獵師の希望を入れて小屋の中に請じた。

携帯した腰の辨當をとつて早速爐傍で食事を始めようとする獵師を見ると、折から自在鍵に懸つてゐた鍋の中から、何やら湯氣の立つ煮物を木皿に盛つて老婆は薦めた。

爐の火に煖りながら食事する獵師に、老婆はかう言つて語るのであつた。

「實は、私はもう此の世の者ではないのだ。夙くに死んでしまつたのだが、浮世に未練があつて、どうしても行く處へ行くことが出来ないで人目を避けてこんな人煙稀なところに忍び隠れて、或人に對する復讐を果さうと執着してゐるのだ。死んでも成佛出来ないのも此のためだ。」と、獵師が時々箸の手を休めなければならなかつた程、誠に身の毛もよだつ様な怪奇な無氣味極まる長物語をした。

全身肌粟を生じた獵師は、それでも流石に日頃の豪膽さから、顔色を變へたり、逃したりする様なことはしなかつた。

折柄荒れ出した空模様、獵師は其の儘、萬一身に危害の迫る場合を思つて、依然、腰の山刀はその儘腰に、側にたてかけた弓矢にも直ぐ手の届く様にして、小屋に泊つた。

夜爐傍に横になつて老婆と眠つた。夜中に目の醒めた獵師は、老婆の様子を窺つた。老婆はぐつすり熟睡してゐるらしかつた。むつくり起上つた獵師は、爐の燃え残りの薪の炭を拾ひとると、飯を入れる木製の曲物である面桶の底に、考へ／＼山小屋のある位置と附近の見取略圖を描いた。雪明と爐の火を頼りに圖を描き終へると、心中秘かに後日の手掛りを得たことを思つて、他日に備へることの出来たのを喜んだ。

再び老婆の様子を眺めて、やがて夜明も遠くないことを思ひ、秘かに決心し、一夜の命を生きのびさへしたらと考へながら又横になつた。

偕て話しかはつて獵師の家では、あまり長く夫が歸宅しないので、妻が心配しだした。随分長く歸らないことも珍しくはないが、携行した食糧から考へても、今回は少し長過ぎる。

「何かあつたのではあるまいか。萬一夫の身の上に變つたことでも——。」と考へた獵師の妻は、それと事情を同じ獵師稼業の人々に話した。そして搜索に行つて貰ふことにした。

誰一人として雪の山に馴れ切つてゐない人はない。勢揃した仲間の人達は、銘々各人の獵場を熟知してゐたので、段々山に分け入つて來た。

さうして最初、老婆の棲んでゐた山小屋を獵師が発見した地點まで來ると、果然其處に無慘にも丸裸になつて冷たく雪の上に横たはる獵師の屍体を發見した。

何一つ持物でなくなつてゐるものはなかつた。蓑笠、雪靴、標、弓矢、面桶、山刀と着衣の外は全部揃つてゐた。不思議に思ひながら、面桶や干飯・味噌・梅干等と一緒に食糧を入れてある網袋を點檢すると、面桶が空になつてゐるだけで、その他のものには全然何一つ手がつけてなかつた。

「一体どうしたつてんだらう。」と面桶をひねくり廻してゐた一人が偶然、薄れかゝつた圖面めいた

炭書を、面桶の底に発見して、

「こりや何だ。一体」と言つた。

一同額を集めて圖面に見入つた。けれどもそれが何であるか、誰にも諒解出来なかつた。

そこで衆議一決して、兎に角これを頼りに圖面の示す地點まで行つて見ようといふことになつて、雪を踏んで辿つて行つた。

獵師が残した面桶の底の略圖に示す地點には一同が容易に到達することが出来た。

黒々と焚火の跡が雪の上に残つてゐた。それから其處に、一同のよく見覚えのある獵師の着衣がそつくり脱ぎ捨てられてあつた。帯から輕衫まで皆あつた。が一同が最も不審に堪へなかつたのはそんなことよりも、こんなことよりも、其處に轉がつてゐた一個の巨大な大石の存在についてであつた。

檢べて見る迄もなく、轉がり落ちて來たものではない。附近にはそんな形跡も、否場所がさうした場所でないのだ。では、もとから其處にあつたものかと思へば、雪の上にある。本當に、天から降つたか、それとも——そんなことは到底考へられないことだが——誰か、他處から運んで來てそつと置いたものとしか考へられないことだつた。

一同奇異な思ひで、獵師の屍骸と遺品を携へて村に引返して一部始終を、獵師の妻に話したが、此の話は暫く、村の冬の爐邊を賑はす話題となつただけで、一切は不思議な謎の中に終つてしまつた。

雪の山小屋で、夜明けを前に、果して何があつたのか、老婆の正体は何物であつたか、又、獵師の死因や大石の由來など、すべて一切の真相が不明のまま、今日に語り傳へられて、「石になつた獵師」と言つて村の子供達の好奇心を咬つてゐる。事實今もその大石は依然その場所に残つてゐるが、然し一切は矢張謎のまゝだ。

これに就いて村の故老は

「矢張り雪女郎なんだらう。」と言つてゐる。

それは兎に角として、近時越後の名山だと言ふので急に登山者が増したため、山小屋などの設備も稍々十分になつて來てゐるが、昔は老樹鬱蒼と繁茂してゐて、日中でも太陽の光が通らぬ木の下道を、木々に礙する猿の啼聲をきながら通る時は、その物凄さは言語に絶し、鬼氣人に迫るものがあつたと言ふことであつた。此の道は會津へ抜けるので、道程約四五十里で俗に八十里越と呼ばれて居り、その間には人里といふものが全然なかつたので、旅行者は皆食糧を携帯して野宿したも

のであつたといふ。此の道の丁度中間にあたる——越後の最後の村里から十四五里の地點——部分に、一つの洞穴があつた。面積は約疊二十枚敷位の洞穴で、何時の頃からか、誰が置いたのか分らないが、五升炊の釜が一個、三升炊の釜が一個、内朱外黒の漆塗の椀が十個、木皿が十枚、描鉢一個が備へられてゐたといふ。それであるから旅行する人は野宿を避けて、皆此の洞穴で必ず炊事宿泊をしたといふことである。

猶此の洞穴備付の器具を横領して、持逃げなどしようとする者があると忽ち五体が竦んで動くことが出来なくなり、又假令盗み出し得ても、その人は何處かで必ず災を蒙つて、再び洞穴に器具を返さなければならなかつたといふ面白い挿話も傳はつてゐる。

そしてこれは皆守門明神の使者天狗の仕業であると里人は信じてゐた。が、兎にも角にも古來幾多の傳説に富む山である。

妙多羅天と彌三郎婆

歐洲第一次大戰時代、日本財界が極度に急激な膨脹と躍進を遂げた頃、魚沼の一砂鐵鑛山が、東京の一小財閥の手で採掘されたことがあつた。今は既に收支相償はぬといふ理由のもとに夙くに廢

礦になつてゐるが、現在も猶、此の附近からは、日本最大の結晶を誇る雲母や、これも亦日本に於いては稀にしか發掘されないとかは言はれる黒花崗岩が各別資本で、極めて小規模ながら採掘が続けられてゐる。

却説、鐵山のことであるが、それは權現堂と言ふ山にあるのだ。權現堂山は、この殆ど全山砂鐵で出来てゐると言はれる、俗に「猫岩」といふ一つの峰で東西に分かれてゐるのだ。

權現堂山の「猫岩」より西、即ち西權現堂に「鬼の穴」と言ふ深い堅坑がある。一体、全山砂鐵で出来てゐると言はれる「猫岩」もその形状が猫の臥たのに似たところから起つた名稱であるが、其の他、權現堂山には色々奇妙な場所や稱呼が非常に多い。で此の「鬼の穴」と言はれる堅穴も何時頃、どうして出来たかと言ふことに就いては更に知られてゐないが、誠に深い穴で何處まで續いてゐることやら一寸想像も出来ない深さらしい。

これに就いて、權現堂山から數里隔つた小山の麓にある「大將淵」といふこれも見るからに神秘的な、そして多くの傳説と舊跡に富む淵まで穴は續いてゐると土地の人は言つてゐる。何故ならば、今若し試みに「鬼の穴」に一握りの糶殻を投げ込むならば、ごうつと忽ち糶殻は吸ひ込まれる様に穴の奥深く消えて行く。此の時假りに何かの目印になるものを一緒に投げ込んだとするならば

そのものは靱殻と共に数日後、悉く一大將淵の水面に浮いて出るといふことである。靱殻のかはりに小石を投げ込むならば、からん／＼と穴の四壁にぶつかるといふ音を立て、落下して行く物の音が底の方から穴に届きながら、半日聞き続けても絶えないと言ふことである。これらはずまり穴の深さの尋常でないことを物語るものに外ならないのである。が、又或人は、此處から數里を隔てた古志の村松山の一部である金倉山の洞穴とも底が連つてゐるとも言ふ。

それはそれとして「鬼の穴」と名からして人の好奇心を唆る此の穴は、實に「彌三郎婆」といふ鬼女の棲處であると言傳へられて居る。

師走も末に近づくと、越後の雪は次第に深くなる。殊に魚沼地方の雪は酷い。上越線の開通によつて漸く都會地方にも知られはじめたが、雪で全國に名高い高田などは、量に於いても質に於いても逆も／＼魚沼の雪には比較すべくもない。雪に明けて、吹雪に暮れる日々を、幾ら風の子でも戸外でなど遊ぶことは夢想だも出来ない。下雪が固まらないからスキーもまだやれない、まして陽光を仰ぐことの出来るのは數日に一度位なものだ。

戸外に出ることの出来ない子供達は晝も夜も炬燵に陰鬱な日を送る。

さうした子供達が耳を傾けその話を聞いたり、時には不氣嫌にむづかる子供を母が宥めたり賺し

たり或は威したりする時、風に低く唸る窓の障子紙や吹雪にがたつく雨戸の音に注意させて、

「ほら／＼。悪い子になつて泣いてゐると、そら風に乗つて、今權現堂の「彌三郎婆」が、彌彦の「妙多羅婆さん」の處へ持つて行くお歳暮の子供を捜し歩いてゐる。早く黙らないと見つかつて浚つて行かれてしまふ。彌彦の「妙多羅婆さん」は子供を食ふのが大好きださうだから連れて行かれたら頭から、ガリ／＼と嚙られてしまふんだ。さあ早く黙つてをるが好いぞ。」と屢々子供達を戒める材料に使つたりするのは次の様な傳説による話だ。

魚沼の八海山の麓にある大崎村に、昔孫右衛門と言ふ人があつた。家は獵師を業としてゐた。孫右衛門夫婦の間には男の子が一人あつた。そして親子三人は貧しいながらも、幸福な日を送つてゐた。ところが一人子彌助が十三になつた年の冬のこと、孫右衛門は或る日山に獵に出て行つたが、その儘到頭歸つて來なかつた。死骸を捜すことも出來ず、妻は泣く／＼村人の情で夫の野邊の送り手を済したが、夫に後れた悲しみから妻は幾度となく世の無情を託つたが、辛うじて一子彌助の身上を思つて、只管息子の成長だけを楽しみに細々と數年を過した。

強く逞しい立派な若者に成長した息子の彌助はやがて、父の名と業を繼いだが、界限に並ぶ者のない弓矢の名人、腕利の獵師となつた。

老へ先の短くなつた母のために、孫右衛門は妻を迎へて、日頃山野にばかり出てゐる自分に替つて母に孝養を盡させることにした。夫婦睦じく間もなく一人の女の子を儲けて、お安と呼んだ。老婆は息子夫婦の心盡しに加へて初孫の顔を見たのが何よりも嬉しく、一家四人毎日々々需々たる生活営んでゐた。

けれども、好事魔多しとやら、お安が生れた年の冬、山に出かけた孫右衛門は父と同じ運命に倒れてしまつた。一家は急に不幸と悲歎のどん底に突き落された形で、未だ若い妻は悲しみの餘り、前後の思慮も分別も失つて、衰へ果てた老婆と未だ嬰兒の愛兒を残したまゝ、自ら命を絶つて夫の跡を追つて死んでしまつた。

重なる不幸と母の乳房を求めて唯々泣くだけのお安を後に残されて、老婆も途方に暮れてしまつた。

村人の情で、三日四日は何とか過ごしたが、吹雪の酷い日には村中の往來でさへも杜絶え勝ちになる雪道を、老へ衰へた老婆が、曲つた腰の上に、漸く体重を増しかけて來た孫を背負つて、貰ひ乳して歩くのは決して容易なことではなかつた。加之、無智で迷信深かゝつた當時の村人達は間もなく、孫右衛門一家につまらぬ噂をたて、

「親子二代揃つて、それに嫁までが非業な死を遂げたりしたのも、皆殺生の祟りだ。いや、生物の呪があの家にはあるのだ。」と言つて、未だ頑是もないお安に、餘つた乳を與へることすら嫌がりはじめた。

折角、雪の道を辛い思ひで、泣きやまぬお安を懷に訪ねて行つても、

「今一寸、手が塞つてゐるから——。」とか、

「今日は生憎あまり乳が出ないで——。」とか言つて好い顔をしなくなつた村人の、俄かに變るよそくしい態度を老婆は見る様になつた。

自宅で泣き叫ぶお安を抱へて、もてあます老婆も、村人の冷淡な態度を思ふと、出来るだけ、御飯の重湯や米汁で済したかつた。けれども重なる心身の苦勞のため老婆自身が床から動かれない様になると、火のつく様に泣き立てるお安を老婆は全く持餘してしまつた。唯々しつかりと抱きしめて床の中に横たはつてゐるより外仕方がなかつた。

泣いて泣いて泣き疲れてお安は、乾枯らびた老婆の乳房を口に含んだ儘すや／＼と寝入つた。老婆はお安の顔の上にはら／＼と涙を流して、訪ねて呉れる人一人ない自分の不幸と村人の冷酷を深く／＼恨んだ。

自分の身の自由さへ儘にならぬ病氣の老婆は嬰兒を抱へて吹雪に閉ぢこめられ、火の氣さへない家に食事まで攝らずに、破れ蒲團にくるまつて數日を過した。

泪と鼻汁が止め度もなく流れて枕を濡らす、高熱のために意識が時々朦朧となる。可愛い孫は吸つても吸つても出ない祖母の乳房に縫りついては泣き疲れて眠る。

と、目醒めた老婆は、つくづく眠つてゐるお安の顔を眺めた。數日前まではあんなに艶々と丸く太つてゐたのに、今は見る影もなく瘠せ衰へ眼許り大きくなつた孫の頬に、泪と鼻水の顔をすりつけた。と何時もなら冷たく生氣のない顔の重みと壓迫に直ぐ目醒めて猛烈に乳房を慕つて泣出して止まぬ孫が眼を醒まさぬ。揺すつても動かなかつた。あゝ、乳一滴吸はずに數日を過した嬰兒の稚い生命は遂これに堪へ得ないで餓のために、父母の後を追つて去つて逝つてしまつてゐたのだつた。

可愛い孫の死を知つて祖母は一瞬くらくとした。暫く瞑目してから改めてお安の死屍を緊く抱きしめて頻りに頬すりし愛撫してゐる中に、稍々病氣も恢復しかけたので猛烈な飢餓に迫られてゐた老婆は、嬰兒の頬に我知らず疎らな齒を突き立て、噛み緊めてしまつた。

「はつ。」と氣がついて、淺間しい自分の所行に自ら呆れて茫然としてゐたが、口中の滋味に堪へ兼ねて、又愛撫に事寄せて、鬼氣身に迫る様な振舞を死んだ可愛い孫に繰返した。そしてその度に老

婆の衰へ果てた体には次第々々に溢れる様な氣力が蘇つて來るのだつた。

孫右衛門家の隣家では、此の相次ぐ不幸に見舞はれた家に對して、無關心らしい關心を秘かに寄せてゐたが、やがて十日にも垂んとする此の數日中、最近まで洩れ聞えてゐた嬰兒の泣聲がばつたり絶えてしまつたし、一体どうしてゐるのだらうかと不審を抱いた。

數日來打續いた吹雪も漸く晴れた或朝のこと、隣家のお女房さんは不意に老婆を訪れて見た。幾ら聲をかけて見ても返事がないので、縮もしてない立關の戸をあけて這入つて行つた。

すると、戸の開いた物音を聞きつけたらしく、今迄死兒お安の屍にくひ入つてゐた老婆は頭をふと此方に向けて、人影を認めると、にやりと物凄く笑つて屍体を下に置いた。

幾日も梳らぬ白髪が蓬々と亂れ、瘠せさらばいた老婆の面貌を、僅かに窓からのみ入る薄暗い光の中で見た時お女房さんは、思はず、

「きやつ！」と叫んで家に逃げ歸り、

「いや恐しい様だつた。口は耳まで裂け、額には白い蓬髪の中からゆうつと二本の角が生え、長い牙は血に塗れて突き出てゐた。まるで繪に描いた鬼婆そつくりさ。」と家人に告げたのも無理からぬ事だつた。

それからそれへと、尾緒がついて噂は忽ち村中に擴がった。隣人の注進に驚いた庄屋は、至急村の重立つた人々を集めて協議を遂げた。兎に角そんな鬼婆が居ては村の治安が維持出来ない。何時何處の子供が奪られるかも知らぬから、様子如何にと先づ老婆の家に檢分に赴くことにした。庄屋を先頭に村の重立つたものが孫右衛門家に行つた。噂さに湧きたつた村の野次馬が後に續いて立關先まで押寄せて來た。

此の大勢の人を見て、死んだ孫の体を小脇に抱へて、上り框までやつて來た老婆は今迄の村人に對する怨恨と憎惡が急に單上げて來て、忽ちくわつと逆上してしまつた。

「孫をかへせいつ。」と喚いて躍り上つた。
 傍にありあはせた利鎌を片手に握るや忽ちさつと閃かして振上げるや否や、

「孫をかへせいつ。」と喚いて躍り上つた。
 檢分も物かは、老婆の狂態に吃驚仰天庄屋も重立も野次馬も一度にわあつと叫んで我勝ちに戸外に散つた。

「いやもう命辛々逃げて來た。鎌を振上げたその有様はありやもう人間ぢやない。早く戸を閉ぢてゐろ。やつて來るぞ！」と話に、更に尾緒がついて傳はつた。

然し、其日は別に何事も起らなかつたが、一度死兒の腐肉を味はつた老婆は既に鬼畜となつて



ゐた。人肉の味を忘れかねて、吹雪の日に乗じて、二度三度と村の子供を奪つては食ふのであつた。世に人命程貴いものはない。然るに故もなく唯自分の食欲を満すために頻々と村の家々から幼いものゝ命を奪ふ老婆を其の儘にして置くことは許されない。村の人々は早く此の鬼婆を退治して、枕を高くしてゐたいと到頭孫右衛門老婆を討ち取らうと相談した。

其處で村人の此の計劃を知つた老婆は住み馴れた家を立去つて他に移るべく餘儀なくされた。すでに悪鬼と化し、通力を得てゐた老婆は風を御し吹雪に乗つて棲處を索して、空中を飛行する中、大崎の隣村峰本(麓)村にある孫右衛門家の菩提寺船岳山眞淨寺の山門を認めて下り立つた。

住持を訪ねて一切を懺悔した。

「夫、息子と二代續いた殺生渡世のため生物の祟りを受けてゐたのと、村人の冷酷無情を悪んだ自分の心の悪鬼の爲め、遂に最愛の孫お安の屍体を貪り食つて鬼畜に化し、他人の子供まで奪つて食はなければ腹の満せなくなつたのも佛罰と思はれる。自分の悪劫は容易なことでは消滅しさうもない斯く淺ましい姿と成り果てた自分には先祖の祀りももう出來ないし、死後の冥罰の程も恐ろしい。せめて生きてゐる間に佛前に供養して置きたい。」と言つて、眞淨寺に「萬年蠟」を寄進し、懺悔の證に住持の手で剃髮得度して貰ひ、銀の様な髪の毛を同寺に残して再び風に乗つて去つた。棲處を

求め求めて老婆は遂に權現堂山の洞穴を發見して此處に住居する様になり、依然風雪に乗じて近郷近在から赤子を奪つて食つた。かうして權現堂の洞穴は、赤子食ふ婆の棲む「鬼の洞穴」となつたのであつた。

赤子食ふ鬼婆となつて魚沼一圓の人々から忌み嫌はれ、悪まれ怖られる様になつた孫右衛門の鬼婆が眞淨寺に残した「萬年蠟」と髪の毛は其の後代々の住持が相傳へて長く同寺に残つてゐた。「萬年蠟」は其の名の示す如く、老婆自ら火を點じて寄進して以來、永久に燃え盡きることなく、本堂の永代常明燈となつて、夜となく晝となく光りを放つてゐたが、今を去る二百數十年前、同寺火災の折に、髪の毛は焼失してしまひ、萬年蠟は一大炬火の如き輝を放ちながら天空遙かに昇つたまゝ見えなくなつてしまつたと言ひ傳へられる。

怪力鬼神と化した孫右衛門老婆は、何故か、何時の頃からか彌三郎婆と呼ばれる様になつて依然權現堂山の洞穴に棲居してゐたが、何時の間にか、彌彦山に當時居た「妙多羅婆さん」と類を以つて集り誼を通じ常に往來する様になつた。

「妙多羅婆さん」に就いては次の物語が残つてゐる。

何時頃のことか時代は詳かでないが、西蒲にある越後一の宮彌彦神社の鎮座在す彌彦に程遠か

らぬ一部落中島といふ處に、一人の獵師が住んでゐた。殺生稼業であつたにもかゝらず、御佛の手に縋つて天壽を全うした。息子の彌三郎も亦父の業を承けて日毎に網をもつて、あの森此の林と寝鳥を獵る渡世ながら、稀に見る好青年で人の氣受けも、部落の評判もよい人間であつたから、屹度神佛の加護や冥助があつたのであらう、妻と共に平和な生活を營んでゐた。

しかし、彌三郎の母である老婆は誠に業の深い憐れな人間であつた。村の人達は、「夫や息子の殺生の祟りを一身に蒙つてゐるからだ。」と噂さしあつてゐた。年老へても神佛に對する信仰心も出て來ず、邪険な心の持主で常に息子夫婦との間もうまく行かなかつた。それが何時の頃からか、人間の食物では十分腹を満足することが出來ない鬼畜の様な境涯に陥つて、鳥や獸さては魚肉などを生の儘頻りに欲した。けれども流石に身の行ひを恥じ、息子彌三郎の獲物を掠めては腹を満してゐたが、我慢が出來なくなつて夜秘かに自分も外に出て、鳥獸魚肉の類を漁り、それを村外れに聳える幾百年を経たか知れぬ榎木の太木の洞に隠して置いては一人貪り食つてゐた。或晩榎木の洞に行つて見たが蓄への生肉が生憎となくなつてゐたので、獲りに出かけようかと榎木の洞を飛下りようとした處へ折悪しく、子供を背負つた女の人が提灯下げて來かゝつた。するとこれを見て急にむらむらと悪心を起した老婆は、榎の枝からぶら下りながら片手を女の頭上に伸すと突如背

中の赤坊を奪ひ取つて木の洞に消えた。

かうして一度人肉の味に飽いた老婆は、黄昏の逢魔の時を利用してはよく此處で子供を奪つて飽食した。憎むべき老婆の所行は、村人に榎木に天狗が棲むと思はせたので、誰一人此の木の下のを通る者もなくなつて、再び老婆は食に窮しはじめた。

幼児や子供の行方不明の詮議がだん／＼嚴しく行はれ始めたので、老婆は晝も容易に外出出來なくなつて只管奥の薄暗い自分の寢室にのみ籠つて、家人が食事を告げてもなか／＼出て行かず、部屋の入口までわざ／＼運ばせるのであつた。が實を言ふとこれには理由があつたのだつた。或年の秋の頃から老婆の額の、髪が生え際の左右に瘤の様な隆起が始まつたが、此の隆起は日を経るに従つて、到頭化して角になつてしまつた。又これと前後して、當年すでに齡百を超えるまで一本も脱落しないでゐた齒の奥齒がだん／＼伸びて、口中から外に突出してしまつた。そのために口は左右にくつと擴がり裂けて恰も動物の牙の如くになつてしまつた。さうでなくてさへ、邪険の心さま其の儘の恐しげの容貌だつた老婆の形相は全く鬼の様になつてしまつてゐたのだ。

これを人に見られることを怖れて老婆は寢室の外には晝間は出なかつたのであつた。

老婆の變貌を見て、彌三郎夫婦は只管歎き、後生を願ひ、夫の冥福を祈つて、お寺参りや佛いぢ

りを薦めても見たが、そんな事には老婆は耳も借さなかつた。

嬰兒や幼童の紛失事件のために村人の詮議と警戒が嚴重になつたので、老婆はもう榎木附近に立寄ることが出来なくなつた。が、然し何とも堪へきれないのは、久しく人肉に遠ざかつてゐる口腹の欲求だつた。それで到頭今度は暗に紛れて墓地掘返しを始めた。生佛があるへ行つては屍体を出し、自家の床下に隠して置いては、秘かに腐肉に堪能してゐた。けれども、死人の數には限度があつて、無制限に老婆の食欲を満すことが出来なかつたので、再び止むなく、暗夜寢鳥などを捕へることにしたが、これはなかく實は容易なことではなかつた。其處で、自分の息子を初めとして、村に幾人か住んでゐる、夜寢鳥に網を打つて捕へる獵師渡世の人々の後を追つて歩いて、その獲物を横取りしては過してゐた。

ところが、此の中島部落に五助といふ獵師が住んでゐた。彼は或晩、水鳥を捕へようと思つて川傍に行つて、罾を仕掛けて待つて居た。すると間もなく鴨が一羽かゝつたので、網を手許に手繰り寄せて、鴨を捕へようとする、突然、暗中から、背の高さ一丈にも餘り、眼光炬火の様な鬼女が現はれて、その鴨をむすつと引摺んで奪らうとした。根が豪膽な五助、腰にさしてゐた利鎌を抜取るや否や、怪物望んでさつと斬りつけた。すると、確かに手應へがあつたが、鬼女は虚空遙かに舞ひ

上つて忽ち姿が消えてしまつた。翌朝、五助が、その場に行つて見ると、見るも恐しい爪の生えた左の手と覺しい腕が落ちて、夥しい血痕があつたので、その腕を拾つて家に歸つた。

此の話は最近村に頻發する色々の恐しい事件と共に忽ち村中に擴がつて、五助の豪膽を讃へると共に噂は噂を生んだ。

彌三郎もその話を聞いて一人秘かに、もしやと胸を痛めて居た。そして機會があつたら、なかなか自分の部屋から姿を見せない老婆の腕の有無を確かめて見ようと考へてゐた。

或晩のこと、彌三郎は何時もの様に身支度を整へて獵に出て行つたが、その晩はどうしたことか何となく氣分が勝れなかつたので、二三羽獲れた鳥を網に入れて肩にかけ、歸途についた。途中まで來ると、突然彌三郎の肩にかけてゐる網に入れた獲物に手をかけて奪らうとしたものがあつたので、彌三郎もなかく豪勇の男であつたから、腰の鎌を抜くや否や、その腕に斬りつけると、その怪しいものは何か叫びながら暗に消えた。

翌朝起きて家の廻りを歩いてゐた彌三郎は、老婆の寢室の窓に血痕の附着してゐるのを見て驚き地面を檢べると點々として血が滴つてゐたので、さてはと心づいて、血痕を辿つて行くと、昨夜自分が怪しいものに襲はれた處に來てしまつた。さては最近村に起る色々の事件は皆我が母の仕業で

あつたかと覺つて、彌三郎は悲しくなつた。

如何に諫めたとして聽入れる母でないことはもう十分分つてゐる。が、さりとて此の儘濟ますことは世間に對しても申譯のないことだ、と考へた彌三郎は妻とも相談の結果、家を嚴重に戸締りして置いて、火をつけることにした。失火の態に見せかけて、どうにもならぬ業深い我が母を焼殺し自分達夫婦は他村へ移住しようといふ計劃からだつた。

然し、老婆は焼死しなかつた。村外れの大榎木の洞穴へ移つてしまつた。彌三郎夫婦は住居を焼いてしまつたので、それを口實に他村へ移り住むことになつたが、それからは何處へ行つても更によい事はなく轉々として住所を變へて遂に身の終るところを知る人がなかつた。——がそれは後の事である。

榎木の洞穴に移つた老婆はそれからは全く神變不可思議な行動をした。

何時か、五助が斬り落した老婆の左腕も、何時の間にか奪回されて老婆の躰にかへつてしまつたし、白晝でも惡鬼の形相も物凄く村人を襲ひはじめた。大榎木の附近は、老婆の口腹を満足させた氣の毒な被害者の骨骸で堆かつた。そして周囲は臭氣紛々と漂つてゐた。

中島部落の人々は慄然として彌三郎婆を恐れ、戦々慄々一日として安き心もなく、果ては老婆の

棲處大榎木の存在を呪つた。榎木さへなくなつたら棲處を他に求めて老婆も居なくなるだらう、といふ單純な考へからであつた。けれども自ら進んで榎木を倒さうといふ人もないので、依然老婆はその洞穴に住んで村は鬼女の跳梁に任せたまゝ數年は流れた。

或年のこと諸國行脚の雲水が此の村にやつて來た。さうして毎日の様に次から次へと犠牲になる者を見て、不憫に思ひ、矢張村人と同様に大榎木切倒しを考へたと見えて、

「木を伐つてしまはう。」と村の人々に相談を持ちかけて來た。すると村人は

「お考へは至極御尤で、以前村でもそのやうなことを言ひ出す者もありましたが、何しろ木も木ですし、後の祟りも恐しいし……。」と尻込みするのを坊さんは、

「いや、御佛のお力の前には、鬼女も妖怪も何があらう。有難い經文を讀誦して切る分には一向差支へがないから——。」と村人を説き伏せ、早速、翌日は自から大勢の人夫を引連れて出かけて行つた。人夫には各々鉞や斧や大鋸を持たせ、坊さん自らは榎木の傍に立つて暫時聲高らかに經文を誦した。

最初の中は尻込みして恐れてゐた人夫達も坊さんの讀誦する經文に勇氣づけられる様に銘々手にした得物を振つて大榎木の切倒しに着手したが、木に傷がついても、遂に何の奇怪も不思議も起ら

なかつた。

雲水の讀經の聲は、清らかに嚴かに又有難く四隣を壓して、附近の草木や石塊にまでも沁入るかと思はれた。人夫達は愈々勇を鼓し氣を奮つて、曳々聲を揃へて、見る／＼中に仕事が進捗して行つた。

怖いもの見たさに、人夫と雲水を圍んで、大榎の周圍を遠巻にしてゐた黒山の見物人の老幼男女は、次第に環を縮少して來たが、坊さんの讀經の聲が益々澄み、人夫達の作業が進行するに従つて、一人二人と見物人の輪を抜けて、大榎伐倒の仕事に加はるものが出て來た。果ては棒切や木の枝の折を手にして、根元の土を掘るもの、大鋸の柄に取つくもの、切拂はれた枝を運ぶもの、綱に手を貸すものなど見物人は一人残らず作業に加はつて、全村力を協はせての仕事に、さしもの魔の大木も根元を別られ、數十百人力を合はせて引く綱に引かれて地響立て、倒れてしまつた。

坊さんは更に有難い經文を一しきり讀誦し、それが濟むと、やがて此の大木に火をつけた。數百年の樹齡を誇つた大木も、七日七晩天をも焦さんばかりの焰を上げて燃え續けたが、やがて灰と化してしまつた。

全村擧げての畏敬と信頼を受けて、殆ど生佛の様に尊崇されて、只管滯留を願つて止まぬ村人の

請の儘に、十數日村に起居してゐた坊さんは、ふと微恙に侵されたが、數日を出ない中に入寂してしまつた。

村人は大榎の祟りか、彌三郎の老婆の呪か、命を失つた此の若き旅の雲水のために懇ろな供養を營んだ。

が、これと共に、唯一の頼みの綱である坊さんを失つた村人は、一面又、大榎を切倒されて焼かれ、棲處を失つてしまつた老婆の復讐を懼れた。

此の頃老婆は彌彦山に逃れ、更に古志の金倉山に棲家を得て、此の二ヶ所に時々移り住んでゐた鬼女と化した老婆の呪を防ぎ、村の災危を未前に免れるには、神に祀るに然かずと考へた村人は、彌彦神社の傍に「妙多羅天」として老婆を請じた。

雲水の死は全く命數の盡きたもので、それは偶然の暗合にしか過ぎなかつたのであるが、老婆の出現と童幼の奪はれることを雲水の死によつて極度に心配した村人は斯うして在天の靈として彌三郎老婆の怒を慰めようとしたのだつた。

老婆はその後全然此の世に姿を見せなかつた。被害を受けるものもなかつた。然し誰も老婆の死んだといふ事について、見聞した者もない。

斯様にして權現堂山の孫右衛門の老婆と、彌彦山の彌三郎婆とはお互に往來しあつてゐると考へられ、舊の十二月八日に越後は酷く荒れるのが常で、俗にこれを八日吹雪と言つてゐるが、その直後、金倉山の洞穴附近には、死人を入れて土葬にしたはずの棺桶の破片や人骨が散亂してゐると言はれてゐる。これは兩婆が此處に會して交歡したその残肴であると言ふ。

(附) これは明かに殺生を禁じてゐる佛教傳説が自然現象と結合して出來たところの傳説である。

けれども此の話は彌彦神社外苑にある「妙多羅天」縁起とは餘程趣を異にしてゐる。事實西蒲地方には彌三郎が轉々移住した跡といふのが方々に隨分と傳へられてゐるし、大坂を失つた老婆が海を越えて佐渡沿岸や海上に現はれた話もあつて、妙多羅天の話は可成有名である。

けれども、南魚の孫右衛門婆さんの話についてはあまり知る人もない。

此の二つの傳説によつて見ると、此の兩婆は實際は一人のもの、如くも考へられるが鬼神に於ける階級を想像して、假りに、西蒲の婆さんの方が格が一段上で「妙多羅天」として祀られるに及んで「彌三郎婆」の稱呼を南魚の婆さんに譲つたと考へた方が事實は別として、寧ろ興味がありはしまいか。兎に角毎年決つて襲ふ定期の猛吹雪をかうした佛教傳説と結合せしめた處に、可成縣下各地に廣く傳へられる「妙多羅天と彌三郎婆」といふ傳説の有する文化的實際性情が窺へるものと思ふ。

恩に報いた石地藏

上越線小出驛に近い一寒村に昔、子供のない老夫婦が佗しく然し平和に暮してゐた。

寄る年波にかへて、加へて、恒産とてもない老夫婦の生活は可成り窮迫した辛いものであつた。

春から秋にかけては僅かの田畠の小作をし、その隙々には村の大家や物持の家などに日傭稼ぎに出て行き或は、山に出掛けて木を樵る力業も敢へて営まなければならなかつた。そして一年中で一番長い辛い冬四五ヶ月の間は、お爺さんは藁仕事に過した。草履や草鞋さては雪靴を作つたり編んだり、繩を編つたりするお爺さんと一緒に、爐の傍でお婆さんは、富有な人に夏涼しく着せるための帷子の糸になる苧をせつせと紡いだ。

座食する餘裕のない老夫婦は一寸の暇なしに忙しく手を動かし続けなければならなかつた。然しこんな寧日のない日々を送り迎へながらも、佛教を信仰して只管後世の安穩を希ふ二人は、特に地藏尊を信仰し、安心立命の境涯に何等の不平等も不満もなく平和に日々を送り迎へてゐた。

年の瀬も押し迫つた師走の或日老夫婦は相談して、今迄せつせと働いて出來た藁製品と苧の糸を町に持つて出てお金にかへ、それでお正月の用意の品々を買求めて來ることにした。お爺さんは綿

の様な雪が霏々と降る中を雪靴を履いて、箕笠に雪をよけ、品物を背中に町へと志した。村を出きつて、やがて町へ這入らうとする四辻には道祖神と並んで石地藏が七体立つていらつしやる。此の前までやつて来たお爺さんは、歩みを止めて、笠を脱ぎ、雪の中に膝まづいて長い事額づいた。

拜み終つたお爺さんは、笠を被らうとして石地藏を仰いで、「やれ／＼。何といふお痛しいことだ。此の雪の降るのに、どなたもお一人として被物も召されないで……。」と呟くと、やをら身を起して深々と降り積む雪に綿帽子を被つた様になつてゐる石地藏の雪を頭から肩へと残らず七体の躰から拂つた。

改めて瞑目合掌したお爺さんは感慨深かさうに足を町へと運んで行つた。

平素から律儀と實直で名の通るお爺さんの品物は一つ残らず、老夫婦が考へてゐた以上の高値で問屋がみんな引取つて呉れた。

幾何かの金を手にすると、お爺さんの足は暮の賣出賑やかな店のある方へは向かずに、とある一軒の荒物屋の店頭立つた。

「はい、御免なさい誠にお手数ですが、菅の笠があつたら七つ許りお貰ひ申したいんでござります

が——。」と言つて、意外な買物をするのであつた。

お爺さんお婆さんが長い間かゝつて働いた折角のお金も、笠の代金に大半なつてしまつた。年越しの用意もお正月の支度も何も出来なかつた。

でも、いと満足さうな面持で、

「——婆さんだつて、まさか苦情も云ふまいで。」と呟きながら、いそ／＼と村へ引返して来た。

例の四辻の處まで来ると、歩みをとどめて、もう一度石地藏に丁寧に禮拜を済ました。そして大急ぎで、再び積つた石地藏の体の雪を掻き落してから、

「さあ／＼今度はもうこれで、雪にお濡れにならないでゐられます。お地藏様方——。」と言ひながら先刻程殆ど財布の底を叩かんばかりにして購めた新しい菅の笠を一体々々の地藏様の頭に被せるのであつた。被せ終ると本當にこれでもう何にもかにも悉皆り済んで、重荷を下したと言ふ様な満足氣な面持で、足取も軽く家に歸つて行つた。

お爺さんの歸りを待ち侘びてゐたお婆さんは年にたつた一度しか迎へないお正月の支度の品々を心楽しく想像してゐる處へ、案に相違して、お爺さんは全く手ぶらで、然し如何にもこ／＼嬉しさうに顔の相好を崩しながら戻つて来た。

「お爺さん、買物は？」

「いや、何——お地藏様に皆差上げて来たわい。」

「えつ？何ですつて。お地藏様。何を地藏様にどうしたつてんですの？」と審るお婆さんにお爺さんは詳細を話した。お爺さんの話を聞終つて、お婆さんも、

「さう。それは——。お爺さん、本當によく気がついて呉れましたね。」と心からお爺さんのやつたことについて喜んだ。本當にお婆さんもお爺さんに負けない信心深い、よい人であつた。さうして老夫婦は口を揃へて、

「わたし達は幾ら貧乏でも、かうして雪も風も凌がせて頂ける家があり、此の年になるまで、無事息災にかうして過させて頂けたのも、これも一重にお地藏様のお蔭によるのだ。お正月も御馳走も何がなくとも、お地藏様に上げることさへ出来れば、わたし達はそれでよい。」と心の底から嬉しさがこみ上げて来るだけで、後悔などは微塵も起らなかつた。

貧しくても温い夕御飯を陸じく済した後は、些かも平素と變ることなく、薬を打ち苧を續んだ。老夫婦はせつせと忙しく手を働かせながらも、後から——と幸福感が胸にこみ上げて来るので、夫婦折々顔見合つては微笑み交してゐた。

何時もの夜なべ仕事を仕舞ふ時刻になると、やめて爐の火に燦りながら澁茶一杯を啜つて老夫婦は寝に就いた。

老人の目聴さで、お爺さんはふと夜中に目が醒めた。何かの音がするので聞耳立てた。戸外である。お婆さんを起さうと思つて小聲で喚ぶと、彼女も、もう疾くに、戸外の物音には気が付いてゐた。

「何でせうね。此の夜更に——然も雪の降るのに。」と先づお婆さんが言つた。

「うん。何か大勢で随分重いものでも運んでゐるらしい様子だが——。」とお爺さんも言つた。老夫婦は悉皆目が醒めてしまった。年の加減で眠の浅い老夫婦が完全に目醒めて、床の中で聞耳立て、ゐると、戸外では可成の人数らしい氣配で、がや／＼言つてゐる。物音と人聲はだん／＼近づいて来る。

「いや。どつこい。うんこら。どつこいしよの、しようつと。」と重い物を運んでゐるらしい。

「何だらう。誰だらう。こんな雪の夜更に。」と老夫婦が再び小聲で密々話してゐる中に、随分、外の物音は近寄つて来たと見えて、もう話聲が手にとる様に明瞭に聽分けられる。

「さあ。すぐ其處だ。そろもう一息。」

「何處だ〜。なにどつちだつて。」

「ほら。其處だ。こつち〜。うん。」などと言つてゐる。

村人の聲だつたら、老夫婦には大概聞覚えがある筈だが、どうもさつぱり村の人の聲ではないらしい。

稍々暫時すると、外の人達がどうやら自分達の家にやつて来るらしいことが臆氣ながら分つた。

好奇心が急に恐怖心に變つてしまつた。老夫婦は恐しさに床の上に起上つたが、居ても立つても居られない氣持で、二人はしつかり抱合つた儘、部屋の隅でぶる〜震へてゐた。その中に物音は最早疑ふべくもない。明かに老夫婦の立關先に来てとまつた。やがて今迄よりも一際高い掛聲をかけたかと思ふ次の瞬間、ずし〜んと奥の間に震へてゐる老夫婦の体にまで響の傳はる程の地響をさせて何か餘程重い物が立關に下されたらしい。

思はず、夜着を頭から被つた老夫婦は一心に、お地藏様を心に念じた。

憐れ善良で臆病な老夫婦は夜着を頭から被つたまゝ夜の明けるまで震へ續けた。

けれども、荷物を置くと人々はその儘何處かへ立去つて行つたらしい。それから後は唯ひつそりとして物音一つしない。耳を澄ませば、時々さら〜と雪が明取の窓紙に觸れる音だけがする。

曉けるに遅い冬の夜も漸く白みかけると、おつかなびつくりながら、やつと老夫婦は夜着を頭から脱いだ。顔見合せた二人は、ほつと溜息を吐いて、先づお婆さんが口を開いた。

「ねえ、何でせう。あれから後さつぱり物音がしませんか。」と言つた。お爺さんは、

「誰かの悪戯かな？しかし儂は人様にそんなことをされる覚えはこれほつちもないんだが、婆さんはどうだい。」と訊ねた。

「飛んでもない。何でわたし達が人様に怨まれるやうなことなんかするのですか。何かの間違ひですよ。屹度〜しかし、それはさうと何が投げ込まれたか。お爺さんお立關を一つ見てみませうよ。」と未だ尻込みするお爺さんを促して、それでも怖々立關の潜戸の掛金を外した。どきりとして待つたが、何事も起らない。けれども、がらりと一思ひに戸を開けて見る勇氣が出ない。お爺さんは、ごくりと唾を呑込んでやつと重い板戸に手をかけた。そろ〜と一寸二寸開けたが誰もゐない別に立關に異状があるとも見えない。これに氣を得てやつと全部開けたが何もなし。するとお爺さんの肩越に後から覗いてゐたお婆さんが

「あれは何でせう？」と言つて指さしたのを見ると、成程あつた。白木の箱が潜戸の反対側に殆ど戸に押つける様にして一つぽつんと置いてある。

見るからに頑丈さうな長持位の大きさの白木の箱だ。
 撫でゝは見、叩いては見たが、平凡な何の變哲もない箱だ。繩もかけてなければ、錠前も見當らぬ。たゞ蝶番で上が開蓋になつてゐるらしいだけだ。手をかけて揺り動かして見ようとしたが、貧乏搖ぎもない。叩けば鈍い木の音がするから相當の厚さのある板らしい。到頭思ひ切つた様に蓋に手をかけたが、又思ひ返した様にお爺さんはやめて、もう一度上蓋を叩いて見た。中には何か物が一杯に詰つて空隙のないらしい音だ。お婆さんに促されて愈々思ひ切つたらしく手をかけて開けようとした。なかく緊くて開かない。手に唾をつけて、うーんと持上げた。途端に蓋はぱくつと開いた。

長持の蓋が開いた拍子に

「あつ！」と言つて二人は思はず後へ尻餅ついてしまった。くわあつと中から眩しい様な光がさして夫婦の目を射たからである。

腰の痛みを忘れて起上つた二人は長持の中を覗き込んで、今度はふらくと長持の縁に獅噛みつ

して

「うむうつ！」と唸り出してしまった。

老夫婦が唸り出したも道理、長持の中は、ぎつしり空隙もなく縁まで黄金で一杯になつてゐる。それこそ大判小判の山だつた。今にもその一片二片が玄關の土の上に溢れさうに詰つてゐた。

暫時して、やつと落着を取戻すと、

「こんなものを儂ん家へ持つて來たのは、一体何者だらうな。」と言つてお爺さんは、

「一体どうしたつてんだい。人の家の玄關にこんなものを置いた儘にして置くのは。——大した雪ぢやなかつたにしろ、昨夜は一晚中雪が降つてゐた筈だが。うむ。こんな重い物櫃の外にや運べつこない。さうだ。櫃の痕があるだらう。」と言つたお爺さんは突如雪靴を突っかけ裾を絡げると、まだ、ちらりほらり空に舞つてゐる雪の中を膝頭まである雪を掻分けて、門先に飛び出した。

すると、あつた。あつた。二本の櫃の痕が門先から村外れの方へ向つて往復した痕が、暫くも前のことゝて幾分か淺くはなつてゐるが明かに認めることが出來た。

我を忘れてお爺さんは只管櫃の痕を辿つた。後からは少し遅れて、これも何やら譯の分らぬことを喚きながら、これは裾を絡げることもしれたらしいお婆さんが續いた。

櫃の痕は町の方へ續いてゐる。大變なものを持ち込まれた、早く引取つて貰はなければ大迷惑だ早く持込んだ人を捜したいの一念で他事を省る餘裕を失つた爺さんは、急に櫃の痕を見失つて瞬

間呆然としたが、見れば其處は町へ行く四辻で石地藏の立つてゐる處だ。はつとして石地藏を仰いだ利那、何と言ふことだ。これはまあ、七体の石地藏の周囲の雪の踏荒し方の酷さは！、臺座が動かされて土を掘り返したらしい形跡は、再びもと通りに直して雪で覆つてもあるし、纒かではあるが降積つた雪も上を被つてはゐるが、事實は歴然と誰の目にも分ることだつた。

餘りのことに茫然としてゐたお爺さんも、暫く此の場の光景を眺めてゐる中に一切が諒解出来た——自分達夫婦の貧しいこと。自分の昨日石地藏に笠を被せたこと。長持は石地藏の蓮座の下に埋まつてゐたものだつたらしいこと。深夜長持を運んだのは七体の石地藏の仕業だつたこと——など總べて石地藏の報恩だつたのだ。

お爺さんの目から、はらくと感激の泪が溢れた。そしてその儘、へな／＼と雪の中に膝をつくと、折から遅れ馳せに追ひついたお婆さん共々唯々合掌して何時迄も雪に額を埋めてゐた。

雪婆と蛇塚

或年の冬の日のことである。

越後名物の雪は霏々として降り頻つて、今日も遠くの山々を白屏風の彼方に隠してゐた。灰色の

空は夕方の迫るのもそれと分らぬ儘何時しか、とつぷりと暮れて夜になつてしまつたのである。

人里遠く離れた原つばの中央に大きな古池があつた。と、見るとその池の傍に、ぼつんとたつた一軒恰も置き忘れられたかの様に家が建つてゐた。連日降り積む雪の中に、辛うじてその存在を認められる程度の見窄しい藁葺家である。

原つばを横切つて向ふの方から此の雪の中を雪明りに透し／＼辿つて来る一個の人影があつた。その人影はやがて此の貧弱な藁葺屋根の前迄来ると、やがてその家の戸をほとほと叩くのであつた。

見れば、それは未だ年の若い一人の男であつた。一見それは富山の藥種行商人と知れる、大きな紺の風呂敷包を背負つた風体の男であつた。笠の上に積つた雪の量は、家一軒ない此の雪の原を、飢と寒さと疲労に苦しみながら、もう數時間歩き續けて来たであらう苦心の程を雄辯に物語つてゐた。

若い富山の藥賣がほと／＼と叩く戸の音に應へて屋内では暫くごと／＼といふ物音がしてゐたがやがてがらりと潜戸が開いた。中から顔を見せたのは、白さを通り越して黄色になりかけた髪の毛を結んで後に下げた一人の老婆だつた。一見何となく薄氣味の悪い嫌な感じのする老婆であつた。

藥賣は瞬間、背筋がぞつとした。老婆は嫌にぎよろつく眼——それが又隻眼だつた——でじろりと藥賣を見たので、その嫌な氣持の悪い眼の光に、はつとして逃げ出したい衝動に驅られたけれども、

「此の雪の中を、今頃になつて——。」といふ意識が腦裡を掠めたので、危く踏止まつた。

老婆はかうした藥賣の心中を知るや知らずや、藥賣が何も未だ言はぬ先に、如何にもぞつとする様な氣味の悪い聲で先づお追従笑をした。その

「いひ……。」といふ笑聲には、年がら年中、旅から旅を重ねて相當色んな目にも逢つて修業が積んでゐるので、滅多な事には動ぜぬと日頃自負してゐた藥賣も思はず、冷水を浴びた様に肌はだに粟を生じた。

商人は流石に心中の動搖を包みかねて物も言ひ出せないでゐるのに、老婆はそんなことには一向無頓着らしく、何も彼にもすつかり心得顔に薄氣味悪く笑ひながら、

「嘘ぞお寒むかる！腹も定めし空いたでござらう。」など、顔にも似合はぬ親切らしい言葉を頻りに並べながら、早々に彼を家の中に請じ入れるのであつた。

断るに断り切れず、此の家を出て何處へと行くあてもない商人は漸く度胸を据ゑて、

「えい、儘よ。どうにでもなれ。」と半ば捨鉢的な氣分も手傳つて、老婆の後について躊躇なく家の中に這入つて行つた。

通された部屋は家具一つない全くがらん洞な處であつたが、およそ不似合な素破らしく大きな圍爐裏があつて、火だけは勢よく盛んに燃えてゐた。

藥賣の男は老婆の薦める儘に、爐傍で煖りながら串にさした團子を空腹にしこたま詰めこんだ。

腹の皮が背骨にくつつく程空腹を感じてゐた彼は、火に煖り食事を攝つたのでこれだけで十分満足だつた。

うつら／＼としてゐたが、とう／＼爐傍に倒れると男は、今迄の疲れのために全く前後の辨へもなくなつて、死んだ様に高聲で眠つてしまつた。

幾時間眠つたことやら、ふと寒さを感じて目が醒めた。むつくり身を起した。四邊は眞暗である圍爐裏にも全く火は消え果て、手を翳して見ても温味さへなかつた。

その途端、壁一重向ふの部屋と思はれる方で、ことりと微かな物音がした。

ごくりと唾を呑み込むと、彼は寒さの故ばかりでなしに、ぞくりと寒さを感じた。じつと荒壁の闇を凝視して居ると、柱と壁の境目らしい處に一個所火の洩れて來る處を發見して、そろりと手搜

で這寄つて、穴に目をあてた。
やつと眼がうまく穴にあつた。全神経を隻眼かために集めて隣室を覗くと、其處に異様の光景が展開してゐた。

彼が覗いてゐる壁に背を向けて老婆がゐる。老婆の表情は見えないが、彼女の前には無数の紐がある。極く光が微かなので最初はよく分らなかつたが、よく瞳を凝こらすと、その紐が、もぞ／＼と動いてゐる。「あつ！蛇だ。」蛇が蠢うごめいてゐるのだつた。危く咳かうとして彼ははつと息を呑んだ。

此冬の最中に蛇が、うじよ／＼動いて匍ば廻まつてゐる。蛇を飼ふ老婆。氣味の悪さに体が固くなつた。けれども目も放たず、好奇心の虜とりこになつた商人が、魅み入いられた様になつて、老婆の動作を見守つてゐると、老婆は前に二つ三つ竝ならんでゐた土製らしい瓶には何が這入つてゐるやら、傍に二三個轉ころがつてゐる栓せんのとれた同じ様な瓶を見ると、どうやらこれには蛇が入れてあつたのだ、と判断出来た。すると、商人が戦おのく胸を押へ呼吸を殺して見てゐるのを知るや知らずや、老婆はつと前に並んだ土製らしい瓶の一つを取上げて、瓶の蓋ふたを拂ふと、中から一見砂の様に思はれる異体の知れぬものを、さら／＼と掌てのひらに搔かき出して、突然それを頬張はつた。ごくりと咽喉のどのなる音が壁を通して聞えて「あゝ、うまい！何時もの事ながらうまい喃なん。こんなに美味おいい物が、何故又人間にや毒なんだ

らう、うふ／＼。明日の朝には又蛇が一匹殖えるわい。」とかう獨自して、物凄い笑に満足さうな表情を見せてゐるらしく思はれた。

老婆の奇怪な言葉から推測すると、此の砂みたいなさらくしたものが、何であるか分らなかつたが、渺すくくともそれは人間には毒なものらしい。いや毒といはうよりも、それを食べると人間が蛇に化してしまふものと判断せざるを得なかつた。そして老婆の好物は蛇になつた人間の所産しよさんらしい。商人は、

「これは大變だ。」と思つた。何時どの様な方法で、あの砂みたいなものを食はせられるやら知れたもんぢやない。いや、殊ことによると夕飯代りの串燒くしやき團子だんごの中にも這入つてゐたつたかも知れない。もう一度明朝食ふとその效きで忽ち蛇になるなんてのかも分らぬ。今夜は未だ效き目があらはれてゐないのだらうと考へて、

「糞くそつ！、蛇になんかされて堪たるもんか。畜生ちくせいつ。」と彼は直ちに此の家から逃げ出さうと決心した然し今迄隣室の老婆の奇怪な所作しよさに氣を奪はれて忘れてゐたが、外は雪が風を交へて降つてゐるらしいことは明瞭めいりやうに分る。

「此の雪の中を——と言つて此の恐い家に止まることも出来ないし。」と暫おもひし思煩わづらつた彼も到頭決

心の臍を固めた。

そろりと暗の中を手搜で、商賣物の藥箱の包を肩にすると大急ぎで、足を拵へた。杖と笠を手にすると大きく息を一つした。

「どうせ分るんだ。愚圖々々してはゐられぬ」と口の中で呟くや、ぱつと戸外の雪の暗の中に飛び出した。盲滅法、道も何もあつたもんでない。一間でも一尺でも此の屋から遠く離れることが肝腎なのだ。

風が耳を削ぎとるかと思ふ程痛い。顔は吹きつける雪が附着して氷になつてしまひさうだ。唯目茶苦茶に走つた。股まで没する雪に時々前に倒れる。又起き上つて走る。杖も笠ももう何處かへ失ひ、藥箱が咽喉首を後から締めつける。がそんなことも氣がつかない位だ。

耳許で唸る風の音に混つて、後方から叫ぶ聲がした様だ。ぎよつとすると稍々速力の鈍つた体を鞭打つ様に死物狂ひで、商人は無暗矢鱈に手足を動した。

「はつ！」として首捻向けた後には、物の十間と遅れないで、白髪を蓬々と後に亂し、隻眼を光らした老婆の、悪鬼の様な形相が迫つてゐるではないか。

「もう駄目だつ。」と觀念しかけたが商人はもう一度思ひかへした。

一捉まるまで逃げよう。むざ／＼捉まるのも愚の骨頂だ。萬に一つ僥倖がないとも限らぬ。」と疲れ果てた躰を必死の勢で、

「南無。神様つ佛様。」と言ひながら逃げた。

途端に、どしんと商人の体は投げ出された、闇の雪道を唯闇雲逃げた商人は偶然林の中へ飛び込んだのだつた。雪の少ない林の中に踏み込んだので、力餘つて頭倒したのだつた。

「やれ嬉しや。」と思ふ間もなく林の中を逃げなければならなかつた。

先刻、林にそれとも知らず踏み込まうとした時、老婆の鈎の様な爪の生えた指が、彼の背負つた包みにかゝつたのだが、その瞬間、彼は前に倒れたので、藥箱を胸に後へ轉つた老婆が雪を蹴つて跳起きると藥箱を傍へはねのけて怒りの形相怖しく續いて林にとび込んで来たからだ。

林の中は外よりもつと暗い。けれども雪が浅いので足が自由になつた。どしん、と立木に衝突して倒れる。起き上つて走る。老婆の指先が彼の襟頸にかゝる。と思ふと、立木に縋つて、くるりと方向を轉じて又逃げる。老婆の吐く荒い息遣が後に聞える。彼も口中が枯々になつた。心臓が痛い程動悸を打つ。

老婆の執拗な追跡をやつと一寸離し二寸離して駈續けたが、最後にどしんと、物に衝突したと思

つた刹那、する／＼と四五尺墜落した。枯葉の積つた木の洞の中だつた。破裂しさうな胸の鼓動を外に聞かせまいと、胸を両手で押へてゐる商人が其處に落ちたとも知らず、老婆は物凄い勢で彼を追つて其處を歩き過ぎてしまつたらしい。

「ほつ。」と安心すると枯葉の堆く積つた中で商人は失神した様に、ぐつたりして朝まで洞の穴底に横たはつてゐた。

やがて暁が近づいて來た。

どうやら老婆も諦めて踵を返してしまつたらしい。雪も霽れて東の空が蒼白色に染まりかけたので、商人はぐつたり疲れた躰をやをら起した。昨夜からのことが今更回想されて強く「助かつた。」といふ感じが胸に湧き上つた。何時までか此の儘でもゐられないので、木の洞を出た商人は兎に角林の外へ出ようと努力した。

やつと林の外に出て見ると意外にも、直ぐ其處に朝の炊煙が立ち上る村を發見して商人は思はず歡呼の聲を放つた。

其の後一年有半の月日が流れた。

時は夏のこと、再び越後路を廻ることになつた富山の藥賣の男は、丁度所用あつて來た遠縁に當

る僧侶と連立つてゐた。怖しい思出の地を通るにつけて、僧侶と二人連れで、原つばの池の傍を廻道して見た。

これと思ふ處を搜したが、池の傍にあつた怪老婆の棲む家はどうしても索しあてることが出来なかつた。

彼等がさん／＼搜し索めて、確かに、此處らあたりだつたと思はれる地點に佇んで見ると、半ば草に覆はれてゐる地面に埋まつて纔かに外に露はれてゐる奇妙なものを發見した。掘り出して見るとそれは紛れもない老婆の所持した例の土製の瓶だつた。

忘れようとしても忘れることの出来ない緊く栓をした瓶の蓋を、薄氣味悪くは思ひながら好奇心に驅られて、こじあけて見た。中には死んで乾枯びた蛇が一杯に詰つてゐた。瓶は幾つもあったが、皆同じことだつた。一切を僧侶に告げた商人は、其處に塚を築いて、僧侶に懇ろに讀經して貰つた

これがその名だけ今に傳はる「蛇塚」である。

「蛇塚」が何處にあつたものか場所は判然しない。
今は名のみ傳はつて誰も知らないが、刈羽、古志、南蒲、中、北魚の中心地帯をなす——と、いへば、長岡市になるが——何處かであるらしい。けれども、此の話には多分に假空的要素を含んで

ゐることは、事實で、「林」といふのもその一つらしい。そして主として此の傳説は中魚の人によつて傳へられて居る。「雪女郎」に對して「蛇づくりの雪婆」と言ふ點に興味があるが、老婆が如何にして人を蛇に化したか？

好物らしい砂のやうなものは何か？

と言ふ様なことに關しては、それこそ全く雲を掴む様な話に過ぎず甚だ物足りないが、炬燵に於ける雪の夜語に子供の好奇心を唆るだけならばこれでよいのかも知れない。

雪の五郎助爺さん

海岸地方に今でも「雪の五郎助爺さん」と言ふ言葉が往々口にされてゐるが、一体「雪の五郎助爺さん」と言ふのは誰のことであらう。

話はすつと昔に遡る。

越後は勿論のこと北陸地方一帯は、昔は冬になつても雪が降らなかつたと言ふことである。

雪は降らなくても冬だ。流石に寒い日が幾日も續いた或年の冬の日のことである。

金作の家では今夕飯を済めたところだつた。夕飯後の楽しい一時を家中揃つて爐傍に過してゐた

主人金作、妻のおよし、子供の三郎のたつた三人暮しであるが親子水入らずで、火に煖りながら世間話に打興じてゐた。

外では、朝から寒かつたのに、夕方から出た風がだん／＼強くなつて來たらしい氣配だ。誰にともなく金作は、

「おゝ寒い。」と言つてから「三郎風邪を引かねえ様にしろ。むゝ、寒いなあ。かう寒くちや、仕事なんかまるで手につきやしねえ。」と言つて、折柄下火になりかけた圍爐裏の火を火箸で突つついた。びち／＼ぱちんと火は風を起して燃え上つた。

入口の戸や窓が外の強い風に煽られてがた／＼と音を立てた。時々風に送られて、犬の遠吠えが聞えて來る。寂しい晩だ。

「全くかう寒くちや、やりきれねえ——。」と爐の火を弄りながら言つたが、金作は風に煽られるがた／＼いふ音に一寸言葉をきつて、聞耳立てゝゐたが續けて、

「——はてな？おい！およし、お前何か聞えなかつたか？儂の耳の故かな。」と妻を顧みた。

「誰か戸を叩いてやしねえか。あゝ、三郎お前一寸行つて見てみな。」と三郎にいひつけた。三郎は「うん——。」と言つて立つて行つた。

度外れて寒いこんな晩に、滅多に訪ねて来る人もあるまいから早く戸締りして寝まうともうとつ
くに懸けておいた、入口の潜戸の心張棒を外すと、三郎は戸を開けて何心なく外を窺いた。すると
玄關には見知らぬ老人が一人立つてゐた。大分疲れてゐるらしい。老人は三郎を見ると、べこんと
一つお辭儀して、

「あゝ、お坊つちやまでございますか。行暮れて誠に早や難澁して居りますだ。どうか今夜一晚納
屋の隅にでも寝かせてやつて下さる様お頼み申して見て下せませんか。」と言つた。老人はかう頼
みながらも、手にした杖に寄りかゝる様にしてそれでやつと身を支へながら哀願するのであつた。
「うん。どうだか——行つて訊いて來らあ。」と三郎は駈け戻つて來て、父にかう告げた。

「うむ、よし。儂が行くからお前はもういゝ。」と言つた金作は戸口に出て行つた。妻のおよしも夫
の後について入口まで行つた。

老人は金作を見ると、

「おゝ、旦那でございやすか。何とも早や申兼ねやすが、後生でござんす。一晚お願ひ申します。」
と嘆願を繰返すのを、金作は、

「おゝ、上んねえ〜。寒かつたらう。うゝむ、およし、どんぐ〜火を燃してくんないさあ、早

く上んねえ。」と先に立つて老人を爐傍に請じた。

入口から何程も離れてゐない爐傍まで、杖を手から放した老人は殆ど匍ふ様にして這入つた。坐
ろ同情の念禁じ難く、何はなくとも暖い爐の傍で湯氣の立つ食事が給せられた。

食事が済むと殆ど座にも居たゞまれない風情の老人を助けて、金作夫婦は自分達の寢室の隣に寢
ませた。

やがて金作夫婦も、親子三人枕を並べて眠りについた。

曉方近く、窓も白みかゝつた頃、床の中で、「うゝん。」と伸びをした途端「はつくしよん」と噓
を一つした金作は、これで完全に目が醒めてしまった。

十分睡り足りた金作は續いて欠伸を一つして、

「あゝ、よう眠つた。客人は寒うなかつたかな。」と呟いて、昨夜老人を寝ませた隣室を窺つた。

「はてな？ごらつしやらねえぞ。」と言つて、ごろりと寝返り一つうつて、妻を呼び起した。妻のお
よしは目を醒まして、

「まだ、早やいに。どうしたつてんだい——おゝ寒い。」と言つた。金作は、

「早やいちやねいぞ。昨夜の老人が見えねえんだよう。」と言へば、およしは、

「あれまあ、本當に。どうしたつてんだらう。」とやつと床を離れて隣室を覗いて見て頓驚聲を出した。

昨夜、あれ程正体もなかつた老人がゐない。金作夫婦に助けられて倒れる様に床に就くと、その儘ぐつすり眠つて、親子が眠る時にも隣室からは規則正しい快さうな鼾を立てゝゐた老人の姿がこんな早朝から見えないとはどうも變な話だ。幾ら老人だからといつて――。

「便所かしら？」

「顔洗ひに出つてゐるんだ。」と色々言つて見たが家中何處をさがしても、老人はゐなかつた。底冷えのする様な寒氣も忘れて老人の姿を捜したが何處にも見えない。さういへば老人の身につけて来たものも、履物も何にもない。ではこんなに早くも出発したのか？、それにしても昨夜あんなに歎願し哀訴する様にして泊めて貰つた癖に、家人に一言のお禮をも述べないで行つてしまふといふのも妙だ。いや、それよりも何よりも潜戸の心張棒にちつとも異状のないのが不思議だ。外して外に出たかも知れぬが、戸を閉めて再び心張棒を懸けられる筈がない。

「消えてしまふなんて、まるで魔法使みてえぢやねえか――。」といひながら、心張棒をはづしてがらりと戸を開けた金作は、

「ひえどつ。」と驚きの聲を發した。

外は一面の雪だ。野も山も田も畠も道も、家の立關先まで白皚々たる銀世界だつた。

「わあ！雪、雪だぞ。雪が降りをつたぞ。」と瞳を射る雪の光に目を細めながら金作は言つた。妻のおよし、續いて雪と聞いて初めて見る三郎が駈け出して來た。

我を忘れて雪に見入つてゐた親子はやがて物珍しさに戸外に出て行く三郎を残して、捜し索めた老人のことも忘れたやうに、

「おい、寒い。寒いも道理、雪が降つたんだもの。」と呟きながら内に引込んだ。

村に始めての雪が降つた。それが一夜に三尺も積つたのだ。これは何か悪いことの起る前兆ぢやないかと人々は噂さしあつた。がその中に妙な話が傳はつて金作夫婦の耳にも入つた。――といふのは、こんな話だつた。

「儂が昨夜寝てしまつてから喃。どんぐりと戸を叩くものがあるので、何だと思つて起きて出て見ると誰も居やしねえ。狐か狸の悪戯かなと思つて戸を閉めようとして、ふと向ふを見ると、薄明の中を一人のよぼ／＼の爺さんが杖に縋つて歩いて居るぢやねえか。儂あ氣味が悪くて急いで戸を閉めてしまつた。」と。

金作も村人も此の不可解な老人のことは一時噂の種として不思議にも思つたが、何時しか忘れるともなく忘れてしまつた。

此の地方に始めて降つた雪も消えて、春が来ると村人は農事に忙しかつた。やがて夏も去り秋を迎へると、何かしら雪が降つて不吉なものを豫想して、作物の出来榮えを秘かに心配してゐた村人の思惑を裏切つて、今年の作物は何でもかんでも、人々の未だ曾つて経験したことのない大豊作であつた。村中は大満悦の態だつた。が、やがて迎へた冬は、今迄の様に全然雪が降らなかつた。寒い時期としての四季の一でしかなくて過ぎた。

金作は去年のことを思ひ出して、怪老人の噂さに注意してゐたが、老人について語るものは全くなかつた。するとその年は去年とはうつて變つた大凶作で、村人の大部分の眉を擧めさせる状態であつた。

けれどもその翌年は又雪が降つてそして大豊作だつた。

此の頃になつてやつと村人はかう言ふ事に氣がついた。豊作の前年の冬は必ず雪が降り、雪を見ない翌年の秋は決して作物の出来の悪いと言ふことであつた。

それから雪の降る年には、誰かしら、何處かで、

「怪老人の歩いてゐるのを見た。」とか、或は

「夜遅く戸を叩かれた。」とか、さうかと思ふと、

「大きな袋を背負つたよぼ／＼の老人に宿を貸したら朝までに消えてゐた。」とかいふ噂さや事件が必ずあることであつた。

「怪老人と雪」これの関係について村人は考へる様になり、毎年冬になると、心秘かに怪老人の出現を待望するやうになつた。

かうして怪しい老人の姿には、村人の想像も加はつて、

「よぼ／＼の汚らしい格好で、背に大きな袋を負つて杖に縋つた全体としての感じがどうも灰色染みてゐる。」と語られる姓名不詳の此の爺さんは、何時誰がいひ出したともなく、

「ごろすけちいさん」と呼ばれる様になつた。何處から来て、何處へ行くのかさつぱり分らなかつたし、何をする人やら、それも知れなかつたけれども、「五郎助爺さん」の出現は地方民全体から、最初の氣味悪いといふ氣持を全く忘れて生まれ、慕はれ、そして大いに期待と希望を以つて歓迎される様になつた。

そしてその結果、中にはこんな事を言ふものもあるやうになつた。

「儂んところで昨夜泊めたが、夜中にこつそり袋の中を見たら、綿みたいな白いもので一杯に詰つてゐた。あれが屹度雪だらう。」と。

それは兎に角、新潟縣人は、「五郎助爺さん」のお蔭で、雪の名所になり、全國一の米産地になつたものと信じて今も語り傳へてゐる。

冬咲く黒百合の花

底知れぬ深みを湛へた「樽淵」は千古の謎を秘めて、鏗にも似た暗い色に渦巻いてゐる。試みに石を投じて見るがよい。ごぼーんと谷間の静寂を破つて、淵は物凄く笑ひにも似た音をたてる。

寂寞そのものゝ如き淵底には嚴格な、そして又何となく悲壯な感じを持つ黒い山影が凝固した様に神祕な姿を映して見える。何と言ふ物靜かな溪間であらう。何とまあ寂し氣な淵であらう。

此の靜かにして寂しくも亦佻しい淵は、冬を迎へ、やがて白雪が降り始め、師走の風が水面に漣を立てる頃になると、此の里人が呼んで「蛇穴」と言ふ、淵の岸をなす絶壁の下、水面近くにぼつかり口を開いた穴は、入口近くに咲く百合の花で飾られると、里人は人毎に言ふ。そして、

「あゝ、お尼様のお靈が今年も亦「蛇穴」に綺麗に咲いたぞ！」と。

奇しくも又妖しい冬咲く黒百合の花。これには秘められたる一篇の哀しき物語がある。

これは此の地に生れ、此の村に育ち、そして此の土地に殆どその全生を過さうとする六平老人の雪の夜語である。

北魚沼郡廣瀬村といふのは、戸屋ヶ嶺の麓一帯の高地を占める部落の集りで、東は川底の非常に深い破間川の清流に洗はれてゐる。此の破間川は信濃川の一支流たる魚野川の支流で、お國自慢の人々が

「破間の鮎が日本一だ。味と香氣と肉の緊具合は比較物がない。」と言ふ川なのだ。

偕、此の破間川に沿うて血津といふ人煙蕭疎な群居がある。破間も此の邊まで溯ると、清流は兩岸が次第に相迫つて、碧潭—寧ろ黒くさへ見える—は斷崖絶壁に挟まれて靜かに澱んで来る。「樽淵」は此の血津の近くにあるのだ。此の淵の上下はずつと川底が上つて淺くなつてゐるのに、淵の部分だけは、實に深さ幾許なるか計り知ること出来な程である。「樽淵」の稱呼に就いても興味ある話があるのだが今は省く。此の淵を挟んで水面高く屹立する兩岸の間に架けられた吊橋の上から淵を俯瞰するならば、朝夕を此處に住む里人ですら慄然たらざるを得ない。

此の樽淵の流に向つて左岸、丁度淵の中間の邊に「蛇穴」がある。名からして怪奇な「蛇穴は、